令和 3(2021)年度

年次報告書

「第Ⅰ期中期実行計画」に基づく
各組織の年間活動報告

神戸常盤大学

神戸常盤大学短期大学部

令和3(2021)年度　第Ⅰ期中期実行計画に基づく年間活動報告【A組織】

※実行計画「1.教育に関する計画」について、令和3年度の細項目の活動計画を依頼していない組織は空欄となっている。

2021(令和3)年度　年間活動報告書			
第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
1　教育に関する計画			
（1）教育の質保証の推進			
①　三つの方針（「卒業認定・学位授与の方針」「教育課程・実施の方針」「入学者受け入れの方針」）を踏まえた学修支援体制の確立	ときわ教育推進機構	本学独自の教育の質保証システムを構築すべく、学習支援体制の確立に繋がる各方針を見直す。 ・学修成果の可視化で明らかになった課題に基づき、建学の精神および各針との関係性に配慮しながら、ときわコンピテンシーの4つの力と19の諸能力を見直した結果を示す。	2022年度より開始する第2次教学マネジメント改革の準備として、基盤教育分野の見直しに加え、学修成果の可視化を中心とした本学独自の教育の質保証システムの改善を行った。 具体的には①ときわ教育目標の見直し②全学DPの見直し③ときわコンピテンシーの見直し④全学共通の基盤教育分野科目の見直しである。 第１次教学マネジメント改革での可視化の視点から見えてきた矛盾点を取り除くべく、ときわコンピテンシーの可視化は学生の自己評価によるものとし、成績評価に用いるルーブリックはカリキュラムマップに基づいた学修の到達目標に対応するものとした。
	医療検査学科		■学修支援体制：1～3年生は4−5名の学生に教員1名が担当するチューター、4年時は卒業研究担当教員がサポートを行った。全学年に渡り学生支援に有用な事項は学科会議で共有し、緊急を要す際には学科会議外でも教員間で迅速に対応を行った。退学、卒業延期が確定しそうな学生へ早期に面談し、学科教員のみ確認できる共有データベースに保存し、同様な状況にある学生への早期対応にも役立てた。オフィスアワーだけでなく教員の電子メールアドレスも学生に連絡し、学生が相談しやすい環境を整えている。成績下位学生へのサポートとして再試験前に資料配布または補習プログラムを組み、学習支援した。欠席が多い学生にはチューター・クラス担任が対応し、状況に応じて保護者と連絡をとり各人にあうサポートを行った。綿密なサポートが有用な学生には、キャリア支援課、学生相談室と連携し、必要あれば学科長も個別面談を行い、学生の不安を取り除けるようにした。新入生には新型コロナウイルス感染症対策を含め、ガイダンス中から確実に連絡が取れるとれる体制を整えて不安除去に注力した。 ■国家試験対策：B6サイズの厚紙(B6カード)の表面に問題を印刷したB6カードを3年時から利用し、配付2～3ヶ月後に国試模試を行った。4年時は模擬試験結果を毎回解析し、下位15名を成績不振学生として対象に補習や個別指導を行った。また下位学生が所属の卒業研究担当教員が把握指導した内容に関し学科会議にて情報共有した。成績低迷学生に対し、卒業研究担当教員と国家試験対策委員が個別に学生を呼び出し、個人指導も行った。国試直前の2月からは成績下位層学生に既卒生も加え、下位学生に対して直前集中補習を行い学力向上に努めた。 ■臨地実習：46施設にて79名の学生に臨地実習を行った。新型コロナウイルス感染症拡大により、臨地実習が不可となった18施設の26名に対し、厚生労働省の指針に沿い学内代替え実習を行った。 ■進路支援　就職委員が中心となり、2年時から進路支援を主目的とするBLSキャリアパスI、３年時にBLSキャリアパスIIを選択科目を通じ、課程内外で就職委員による、履歴書・面接・小論文等の指導を実施。大学院進学希望者には入学時より学科長が継続的な指導を行った。 ■その他：全学生に教員の電子メールアドレスを公開し、欠席・遅刻を含めて教員へ気軽に連絡とれる体制を整えた。
	診療放射線学科	1.診療放射線学科の教員が担当する基盤教育科目の中で、「専門」の内容を意識しながら「専門」にとらわれない基盤教育を考える。学生の探究心に応えるとともに、将来の発展に耐えられる教育を行う。 過去の国家試験問題の整理・分析・改変等により、国家試験対策を強化する。 2.コロナ・ウイルス感染症に関して、関連部署との連携の下、学生を指導する。 3.学内実習に必要な備品の整備を遂行する。 4.教員の研究環境（設備・備品・人）整備に努める。 5.地域貢献事業やボランティア活動に、学生・教職員とも引き続き積極的に関わってゆく。 6.過去の入学試験の形態・時期などを分析し、2022年度入学試験に備える。	■学修支援体制：各学年に担任３名を配置するとともに、チューター教員を置いてきめ細かな学習支援ができる体制を構築した。担任は、オフィスアワー以外の時間にも研究室を開けて、学生が相談しやすい環境を整え、学生の不安に対し、より迅速に対応できるようにした。また、各学生の学修状況を聴取し、特に支援が必要な学生には適宜、面談を実施した。さらに、各科目責任者との連携を取りながら学修向上に必要な方策を協議し、学生に助言を行った。 　チューター制度は教員1名が５、６名の学生を担当し、担任の目が届かない部分を補う形で履修登録のアドバイスや学修方法に関する助言を行った。また、全教員のメールアドレスを学生に周知しクラス担任やチューター以外の教員にも学生が気軽に相談できるようにした。 　欠席が多い学生や不安を抱えている学生については定期的に調査し、学科会議などの場で学科教員全体が情報を共有するとともに、キャリア支援課、学生相談室とも連携しながら対応した。 　なお、各学生の成績について科目横断的に把握し、特に1期生については前期には解剖学や基礎数学、期末試験前後には前期履修科目、後期には2年次履修科目に関する補習を実施した。また、特に成績が低迷している学生については三者面談を実施した。さらに、各学生の学修に関して進捗と低迷の原因の分析を試み、学修状況に合わせて個別対応にて学習支援を行った。 ■国家試験対策：第1期生が3年次に進級することを機に、本格的な国家試験対策を開始するための準備を行った。まず、3年次から国家試験までのスケジュールを想定して、模擬試験や対策講座といった国家試験対策を計画した。また、国家試験対策の前段として、すでに履修が完了した国家試験科目については、実力試験を2回実施し、現状での実力を推定し、効果的な国家試験対策に繋ぐデータとした。 ■臨地実習：2022年度からの臨地実習開始にむけて、各学生の居住地域や就職希望地域を考慮して実習の配置案を作成した。また、実習予定施設に関してコロナ感染における受け入れ人数の変更等がないか確認し、適宜、配置を修正している。 ■進路支援　就職委員が中心となり、就職ガイダンスの日程調整や求人に関する必要書類の整備を行った。また、学生の進路について希望調査を行い、特に企業就職や大学院進学を希望する学生に対して、情報提供や関係者との意見交換をする機会を設けた。 ■その他：国家資格である放射線取扱主任者の試験に受験を推奨し、受験希望者に対して受験対策講座を開講した。また、地域貢献活動として福島スタディツアーに関する支援を実施したが、地震のため予定の半分の行程で戻ってくることになった。年度末にオンラインでの保護者会を実施し、学生の成績と履修要件、臨地実習、就職関連、国家試験関連などの情報を提供し、学生へのサポートについて意見交換を行った。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
①　三つの方針（「卒業認定・学位授与の方針」「教育課程・実施の方針」「入学者受け入れの方針」）を踏まえた学修支援体制の確立	看護学科		■学修支援体制： 各担任・チューターが年2回面接をし、連携を図りながら支援している。今年度、休学・退学に至った学生は前年度の3年次後期の臨地実習科目で単位修得出来なかった者の後期再履修のための休学があった。また、体調不良が長期になっている学生や１年次から退学に至った学生もあった。チューターや担任と連携し、状況に応じて家族とも連絡を取り本人の意思決定の支援を行った。学力不足や学習意欲の低下に関するサポート体制が課題である。就職に関しては、就職委員会活動において、卒業年次にはきめ細やかな指導を実施し、8月末には９割以上が進路決定した。コロナ禍の中での就職活動支援は今後も課題となる。 ■国家試験対策：今年度の看護師国家試験は88名受験し、4名が不合格であった。全国合格率（新卒）96.5%をやや下回る95.5%の合格率であったが、得点率は必修93%（合格基準80%以上）、一般・状況80%（合格基準66.8%）と成果を上げている。活動内容は、4年生には看護師国家試験模試8回、保健師国家試験模試3回実施し、コロナ禍であったが、教員によるオンデマンドの特別講義なども取り入れ、きめ細やかな対応を実施した。次年度はコロナ禍のため、引き続き3年次の臨地実習が臨地で学ぶ機会を失った学生がいることを考慮して、更に、きめ細やかな指導が課題と考える。また、学生のレディネスに応じた低学年からの学修支援を行い、特に１．２年は専門基礎となる解剖生理学等の力を付けるための対策を行ったが、計画的な学修習慣をつけられるよう次年度以降も課題とする。クラス担任・チューター、研究指導教員との連携も必要に応じて積極的に取り入れ、必要時保護者との連携を取り入れた学生個々の指導に役立てることも重要である。 ■臨地実習：今年度も昨年度に引き続き、コロナ禍のため、臨地実習の一部が学内実習となり、教員が実習目標到達のための教材の工夫等に努力した。また、臨地実習指導者研修会は「地域包括ケアシステム構築における実習指導を考える」をテーマに保健科学部学部長：塩谷英之教授の基調講演、長尾学科長の教育講演を行った。LIVE配信は49アクセス、その後オンデマンド配信も実施した。終了後のアンケート結果からも概ね良好であった。次年度もコロナの影響もあり、臨地での実習ができない可能性があり、実習目標達成のための工夫が課題となる。さらに次年度入学生から定員増となる。実習場の確保が今後課題となる。
	こども教育学科		■学修支援体制：1・2年生は各4名のクラス担任を配置しており、各学年担任が、ゼミ形式で実施する授業も担当しているので、きめ細かい学生の支援が可能となっている。3・4年生は卒業研究ゼミの担当教員に加えて、各学年に2名のクラス担任を配置している。進路対策として、個別にその都度、学科教員（就職委員、ゼミ担当、各科目担当、各コース担当等）の立場から面談や個別指導を実施すると共に、教職支援センター職員、キャリア支援課職員等の力を借りながら必要な指導を重ねた。 ■教員採用試験対策：「定例学習会」「夏季弱点フォロー勉強会」（コロナ感染予防のため縮小実施→教職教養を削減）、「自主学習会」「春季セミナー」「春季集中学習会」等の採用試験対策を実施、「学力把握テスト（兵庫県・神戸市・大阪府の傾向を踏まえた出題）」を年3回実施、教員採用試験対策講座（EN1、E2対象）遠隔学習コンテンツを作成しmanabaにて実施、東京アカデミーによる「教職教養対策講座」、「基礎力養成講座」、「論作文・面接・討論対策講座」を実施、養護教諭合格者座談会の実施、小学校教諭合格者座談会の実施、先輩激励訪問の実施、「学内スタート模試」（3年対象）の実施、「全国公開模擬試験」（3年対象）の実施、「自治体別模擬試験」は次年度4/3（日）・4/5（火）に実施予定 ■臨地実習：臨地実習委員会を年間11回開催。2月開始の保育実習Ⅰ（施設）は、社会情勢や学内感染状況を鑑み、実習を延期。それ以外の実習については、当初予定通り実施することができた学校園も多かった。感染状況によって学校園からの延期の申し出があった際には、それに準じて日程をずらして実施した。KITの実習は、施設長と学内担当者が連携を密に図り、１年次からのプログラムを実施することができた。感染状況によって、延期になった学生もあったが、現場での実習が不足する際にもKITでの実習で振替するなど、多くの学びの場を得ることができた。 ■進路支援：３・４年生「就職ガイダンス」の実施、志望･進路調査（別紙3）及びゼミ毎個別進路面談の実施、職域ごとの就職フェアへの参加促進と引率の実施、採用試験対策模擬面接の実施、採用試験時提出書類の添削指導、公立･私立対策講座及び模擬試験の実施、就職体験報告会の開催、保護者会を資料配布にて実施（3回生、新3回生）、卒業生就職先巡回訪問（挨拶）の実施、就職委員会に対する当該年度卒業生アンケート実施

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
①　三つの方針（「卒業認定・学位授与の方針」「教育課程・実施の方針」「入学者受け入れの方針」）を踏まえた学修支援体制の確立	口腔保健学科		■学修支援体制：1クラス（1学年２クラス）2名のクラス担任を配置した。クラス担任は適宜学修および学生生活状況の聞き取りを行い、保護者との連携を強固にして問題の早期発見と早期解決に努めた。今年度は学修のペースが掴めず睡眠不足などの体調不良を訴えた学生が1名いたが、早期に保護者と連携が取れたため、深刻な身体・精神状態に陥る前に退学を選択する事が出来た。また、月1回開催される学科会議において各科目担当者はそれぞれの科目での学生の学修状況（出席状況や授業態度、課題提出状況など）を報告し、教員が学生情報を共有することで、よりきめ細かい学修支援を実施した。さらに、１年生では必修科目「学びの基礎」で、1名の教員が5～6名の学生を担当するゼミ形式の授業を実施し、担任や科目担当者とは異なった視点で大学での学びの支援を行った。学外実習の多い2年生は臨地実習担当教員が週1回は実習先に赴き、学習の支援を行った。3年生は進路相談に対応できるよう、必ず歯科衛生士教員をクラス担任と就職委員に配置した。 ■国家試験対策：国家試験対策委員会を学科内で設置し、昨年度コロナ感染防止の影響でカスタムメイド教育が難しかった点を踏まえて、年度当初に年間スケジュールの策定、試験問題の選択、試験回数、試験結果の分析、成績不良者の抽出と対策などを検討した。3年生前期は過去問題等で試験を実施し学生の学修の現状（不得意科目や分野）を把握し、3年後期は特論1、2による補習と難易度を勘案しながら複数回の過去問題による試験や模擬試験を学生全員に実施した。それらの試験結果を分析し、1月には下位15名程度を成績不良者として抽出し、成績レベルに合わせて個別と小集団に分けて指導を行った。2月中旬からはコロナ感染を防止するため、遠隔による補習と個別および小集団の指導を実施した。 ■臨地実習：今年度は昨年度と異なり、3年の前期臨地実習は一部の病院を除いて実施することが出来た。実施できなかった病院の代替は夏季休暇中に実習可能な病院で補実習を行った。2年の後期臨地実習は滞りなく実施できた。いずれの学外実習に際しても、事前のPCR検査と実習開始2週間前からの体調管理チェック表（日常の行動記録を含む）の記入を行ない、新型コロナウィルス感染症対策を講じた。 ■進路支援：就職委員会（3年生担任を含む）が中心となり、キャリア支援課、国家試験対策委員会と共に情報を共有し、学生の学修状況を鑑みながら進路支援を行った。求人情報をmanaba機能を活用して学生に提供したり、必要に応じて対面での個別相談や模擬面接、履歴書の記入方法や小論文等の指導も行なった。昨年は就職内定者に国家試験不合格者が出たので、今年は国家試験合格が決定するまで就職活動を行わない者がいたため、3月末の進路決定率は90%を下回った。就職ガイダンスは、3年生向けを5回、2年生向けを2回実施し、保護者にも進路状況についての説明文を郵送した。
	看護学科通信制課程		■学修支援体制：入学時の学習説明会は、動画配信を行った。入学後はチューター制をとり教務委員と連携して学生をサポートしている。1年次の学生には、10月に学習計画の立て直しの指導をし2年次の学習につなげた。令3年度入学生で基礎実習及び看護マネジメント実習に進める学生は82.2%（昨年78.9%）で昨年よりも増加している。今年度入学の学生は春期スクーリングがすべて遠隔授業となったため、モチベーションを維持するべくチューターからの連絡を密にした結果と考える。R4年度入試の入学前教育として、早期入学手続きをした入学予定者に対して「練習レポート課題」を提示し添削指導を継続しておこなった。対象者93名中51名（昨年64名中21名）54.8%の参加率で昨年度の32.8%を大きく上回った。 ■国家試験対策：今年度は、学生の学修進捗状況の把握やチューター制度下の電話相談・指導等の支援を昨年以上に丁寧に行うと共に、コロナ禍に対応した国試対策行事の企画・実行、参加の推進および結果の分析と学習支援への活用を実施したが、新卒者合格率は全国合格率を10.9%下回る結果となった。原因として、卒業要件を満たすことがなかなかできず、受験ぎりぎりまで国試対策ができなかった学生の数が増えていることがあげられる。模試や講座への参加者も偏りがあることから、次年度は、これらに対する対策に重点を置く。 ■臨地実習：コロナ禍による見学実習中止は基礎・看マネ実習では、36施設中20施設、対象学生100名中52名が代替学習となった。各領域実習では98施設中11施設、学生延べ541名中108名が代替学習となった。実習スクーリングは本学では7科目全て、東京・金沢会場ではそれぞれ7科目中2科目のみ対面で実施出来た。実習スクーリング時の感染予防対策は密にならないグループ人数の設定やパーティションの設置、授業形態の工夫などを図った。遠隔授業の内容は昨年度の実施を踏まえ、各教員が振り返り修正して実施した。見学実習を代替学習とした時リアルな患者や場面がイメージしにくい、また実習スクーリングでは他者の意見を聞く機会がないため学習内容の到達レベルに差が出やすいなどの問題が提起された。次年度に向けては見学実習が実施できる良いよう臨地との調整をし、対面でのスクーリングの実施も図りたいと考えている。 ■その他：生活支援として神戸常盤大学奨学援助資金を通信制課程の枠に従い公募し個別面接を実施、支援の必要度が高い学生に対して支給している。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
②学修成果の保証と充実した学修機会の提供	教務委員会	１.2022 年度カリキラム改正に向けた情報共有と現行カリキュラムからの移行（読み替え科目等）について検討 する。 ・2022 年度から O 科の４大化、M・N の指定規則の改正、基盤教育の見直し等、カリキュラムの一部変更が予定されている。各学科、ときわ教育推進機構でそれぞれ検討を進めているが、委員会としても、今後の活動に活かせるよう各カリキュラムの特徴について情報共有を行う。また、現行から新カリキュラムへの移行がスムーズにすすめられるよう、読み替え科目（案）を作成する。 ２.GPA の活用について検討する。 ・GPA の活用については昨年度に引き続き、学科ごとに効果的な活用について検討する。また学生自身が学修成果の一つとして意識し、学修に活かせるようよう促していく。 ３.学修機会の広がりや内容の充実に向けて検討する。（「大学コンソーシアムひょうごこうべ単位互換授業」の活用） ・学修機会の広がりとして、「大学コンソーシアムひょうごこうべ単位互換授業」の活用に向けて、実際の運用のためのルール作りを検討する。	1）、O科の4大化とカリキュラム改正に向けた準備 O科の4大化、M・N科のR4(2022)年度カリキュラム改正に向けた準備を教務委員、教務課を中心に学科ごとに進めてきた。また全学共通の基盤教育分野が4年間経過したことで見直しを行うこととなり、各学科カリキュラムの見直しが必要となった。その後、各学科所定の時期に申請を終えることができた。さらにE科においては新たな免許コースを設ける準備をすすめている。R4年度年間行事予定表や時間割の作成・調整を行った。上記に伴い課題が多く、例年以上に調整に時間を要した。今後も課題をの解決に向け、学科、ときわ教育推進機構他、各組織との連携を図っていく必要がある。 2）新・旧カリキュラムの読み替え対応科目の検討 新カリキュラムへの移行がスムーズに行われるように、読み替え対応科目の検討を行った。専門分野については各学科での対応となるが、基盤教育分野では「生命と倫理」、「心理臨床学」が1単位減となっているため、1単位分の補講が必要となる。今後は単位不足が生じないように学生に周知するとともに、対応が必要な学生がいるか確認する必要がある。 3）GPAの活用についての検討 学科ごとに履修指導に活用している。また資格選考要件などへの活用（看護学科では保健師課程の選択者の選定の要件としてGPA2.5をR4年度生より提示する）も検討した。1年次の学修がその後の履修状況に影響するといわれ、国家試験や就職活動にもGPAが影響する。そのため、効果的な活用方法の検討と学生自身の意識付けをするために、履修ガイダンス等で引き続き説明していく。 4.）学修機会の広がりや内容の充実 「大学コンソーシアムひょうごこうべ単位互換事業」の活用に向けた検討の予定であったが、至らなかった。基盤教育が見直され、新たな科目も増えたので、まずは本学のカリキュラムを進める。3月にR4年度実施予定の科目一覧が示されたが、ごく一部を除いて対面授業であったため、実際の参加も不可能な状況である。また、コロナ禍で「国際保健医療活動Ⅱ」は不開講となったので、他大学生の受け入れもなかった。R4年度も開講されない。
	医療検査学科		■退学者は1年生4名、2年生4名、4年生4名の12名。休学者は１年生１名、２年生１名、３年生1名が健康上の理由、4年生1名が健康上の理由で10名は後期科目の履修で前期のみ休学者である。 ■GPA：必修科目 GPA　1年：2.42、2年：2.32、3年 2.54、4年 2.52 1年後期および２年後期時点での解析では、現1年、現2年ともに平均GPAが例年より低く、GPA 1.5 未満の学生数も他の学年より多かった。 ■資格取得状況：第68回臨床検査技師国家試験では新卒者91名から79名が合格し、合格率は86.8%と全国平均の75.4%を11.4%上回る成果となった。また、細胞検査士養成課程では13名の受講者全員が一次試験、二次試験ともに合格し合格率は100%であった。 ■卒業後の進路：本年度は卒業者が91名であり、国家試験合格者の進路決定率は93.7%。求人数は一昨年度361件872人から、昨年度369件827人と減っており、特に3月の求人は一昨年度13件19人から、昨年度9件12人と少なかった。 ■授業評価：Ⅰ学生自身4.2、Ⅱ授業内容4.2、 Ⅲ授業方法4.2、 Ⅳ学習成果4.3、 Ⅴ総合評価4.3 上記カテゴリー別平均値ではどのカテゴリーも4を超えるだけでなく、年々評価が良くなっている。これは学生からの意見を授業に取り入れて改善された結果と言え、各教員が授業評価を解析し、次年度の授業に活かしている成果でもあり、PDCA サイクルが上手く回っていると考えられる。 ■卒後評価： 卒業生からの回収率は56.9%であり、総合評価として、本学医療検査学科を卒業して良かったかに対し、非常に思う51%と思う29%の合計8割が肯定的な評価であった。臨床検査技師資格を有したことに対し、非常に思う71%と思う22%の合計9割以上が肯定的な評価であり、総じて本学科に対しての満足度は高いと言える。 設備については前年に比べ 0.44 ポイント低下した。就職先からの回収率は69.4%であり、肯定的な意見が前回調査の平成30年度より多かった。 就職先からの評価と、学生の自己評価を比べると「基礎知識」、「基本技術」の項目が低い評価であり、学生が十分身につけたと思った知識や技術は、臨床現場ではやや不足と感じられているようである。
	診療放射線学科		■退学者・休学者・卒業者：今年度の在学生は1期生と2期生の2学年で163名、退学者が 5名、休学者4名であった。退学者、休学者の多くは2年生で、専門基礎科目、専門科目への移行に伴う成績不振や、進路の変更に伴うものであった。 ■GPA：累計のGPA平均値は1年次は2.33、２年次は2.18であった。 ■資格取得状況および卒業後の進路：該当なし ■授業評価 学生による授業評価（学科平均）は以下の通りである。 1. 学生自身 3.9、 2. 授業内容 4.2、3. 授業方法 4.2、4. 学習成果 4.2、5. 全体評価 4.3 この結果は、昨年とほぼ同等であったが、「１.学生自身」のみがわずかに低下していることから、専門科目における自己学習が難しくなっていることが予想されるため学習支援を実施したいと考える。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
②学修成果の保証と充実した学修機会の提供	看護学科		■入学者・退学者・休学者・留年者・卒業者：今年度卒業者は11期生となり、87名の卒業者であった。その内、5名が留年生であり、また、9月卒業の2名を加えると89名の卒業者となる。退学者は5名あり、いずれも進路変更・学力不足・学習意欲の低下等であった。休学者は3名であり、長期にわたり体調不良による休学が続いている。コロナ禍における遠隔授業などの影響で、学習意欲の低下につながったケースもあり、不本意の学科選択も退学への引き金になっている。今後も各教員の個別な学生の状況把握と、学習意欲にかかわる指導が課題となる。 ■GPA：卒業年次累積GPA平均2.67、N3累積GPA平均2.48、N2累積GPA平均2.67、N1累積GPA平均2.59であった。 ■資格取得状況：看護師国家試験受験者は88名（新卒）合格率95.5%であり、既卒者は1名も合格であった。保健師国家試験受験者は31名（新卒）合格率87.1%であった。既卒者は３名受験し２名が合格した。さらに、養護教諭免許取得者は6名であった。 ■卒業後の進路：就職者数（率）は国家試験不合格者の看護助手採用も含めて87名（97.8%）、進学者数は１名であった。 （内訳）　病院81名（９２%）：国公立病院28名（31.8%）、大学病院5名（5.7%）、公的病院７名（8.0%）、一般病院41名（46.6%）、県・市の保健師６名（6.8%）であった。 ■授業評価：学生による授業評価の学科平均は前期：Ⅰ4.3、Ⅱ4.3、Ⅲ4.3、Ⅳ4.4、Ⅴ4.4。後期:Ⅰ4.2、Ⅱ4.5、Ⅲ4.4、Ⅳ4.5、Ⅴ4.5であった。 ■卒後評価：自己点検委員会が実施する「卒業生アンケート」は、本年度は回収率が29.5%（昨年49.3%）と低かった。ディプロマポリシーに関する内容は「国際感覚を身につける」が最も低く「非常に思う・思う」を合わせて30%（昨年13%）であった。また、本学看護学科の教育理念である「ヒューマンケアの視点」は70%であり、「倫理観」「基本技術」「コミュニケーション力」なども70%台であった。今後もカリキュラム運用の中で理念をもとにディプロマポリシーに向かって教育を進めていきたい。大学の各種支援については「教育環境・設備」が35%と他と比べると低かった。コロナ禍での教育環境が影響していると思われる。「国家試験の支援について満足している」は71%と昨年93%よりは低いが、まずまずであった。今後も国試対策委員会と協働し、国試の合格率をあげえることが課題となる。 また、５年に一度の「就職先アンケート」を実施した。回収率は85.7%（前回H30年59.6%）と高かった。卒業生を通した大学教育の評価としては「看護職を選択してよかった」「看護職の継続」「自分なりの考えをもつ」「チームの一員として貢献」が70%程度あり、高い評価であった。
	こども教育学科		■入学者・退学者・休学者・留年者・卒業者： ■GPA：2.8 ■資格取得状況：小学校教諭免許状取得者20名、幼稚園教諭免許状取得者45名、保育士資格取得者45名 ■卒業後の進路：①小学校　計13名（19.1%）／公立小学校（教諭）6名（前年度比＋2名）、公立 小学校（講師）7名（前年度比－1名）、②保育所・認定こども園・幼稚園　計27名（39.7%）／公立保育所・幼稚園（正規）4名（前年度比＋3名）、社会福祉法人保育所（正規）2名（前年度比－5名）、社会福祉法人認定こども園（正規）20名（前年度比－8名）、学校法人幼稚園（正規）1名（前年度比－3名）、③社会福祉施設（障害児者・社会的養護）　計14名（20.6%）（前年度比－3名）／外郭団体（3名）、社会福祉法人（11名）、④一般企業　12名（17.6%）（前年度比＋2名）、⑤公務員　1名（1.5%）（前年度比±0名）／大阪府警察　1名、⑥進学　1名（1.5%）（前年度比±0名）／兵庫教育大学大学院　1名 ■授業評価：学科平均を分野別に表示するとⅠ学生自身（4.2）、Ⅱ授業内容（4.6）、Ⅲ授業方法（4.6）、学習成果（4.7）、総合評価（4.7）と非常に高い結果となっている。昨年度と比較しても0.1～0.2ポイント上昇している。今年は昨年度より遠隔授業の割合が減り、対面授業が増え、ハイブリッド形式の授業運営が影響しているかもしれない。 ■卒後評価：回収率は31.0%であり、前年より22.8ポイント減少している。調査結果については、DPに関する修得事項の肯定的回答は、「専門知識と技能」88%、「基本的態度」70%、「倫理観」70%、「教育力」53%であり、DPに沿った教育はほぼできている。「教育力」については、経験値と実践量が大きく作用することから、卒後、熟成していくものと考えられる。それも踏まえて、リカレント教育についても今後、検討が必要である。また総合評価も97%が肯定的評価であり、就職に向けた学修指導、支援については成果をあげている。
	口腔保健学科	学修成果として国家試験合格率が全国平均を上回り、100%を目指す。 ①専任教員・業者による集中講義と個別指導の充実化 ②成績不振学生の絞り出し時期の検討とカスタムメイド教育の改善	■入学者・退学者・休学者・留年者・卒業者：退学者は1年生2名、2年生1名、3年生2名の5名。休学者0名、除籍者1名である。1年生は健康上の理由、その他は進路の迷いと成績不振であった。いずれも保護者および本人と面談または連絡を重ねた上での結論であった。昨年度に比べて退学者の数は3名から5名に増加した。 ■GPA： ■資格取得状況：第30回歯科衛生士国家試験では新卒者74名は74名全員が合格し、合格率は100%であった。昨年度不合格であった4名も今年度再祚挑戦し、4名とも合格した。合格率は新卒者、既卒者ともに全国平均を上回る成果となった。 ■卒業後の進路：本年度は卒業者が74名であり、そのうち3月末までに就職をした者は65名（進路決定率87.8%）である。昨年就職が決定していたのに国家試験が不合格となった者がいたため、成績不良者は就職活動を控えていたことが今年度の進路決定率が低くなった原因である。全員が国家試験に合格したことから現在就職活動中である。今年度の求人件数は745件、求人数は1384名であった。 ■授業評価：Ⅰ学生自身4.2、Ⅱ授業内容4.5、 Ⅲ授業方法4.5、 Ⅳ学習成果4.5、 Ⅴ総合評価4.5 上記カテゴリー別平均値ではどのカテゴリーも4を超えるだけでなく、年々評価が良くなっている。学生の評価から各教員が授業改善に努力した成果であると考えられる。ただ、学生自身のカテゴリーの中の授業以外に学習した時間は平均が3.3と極端に低く、今後取り組むべき課題と言える。 ■卒後評価： 卒業生64名から回答があり回収率は42.29%であった。昨年度の65.8%に比べて低い回収率であったが一昨年と同程度であった。総合評価として、本学口腔保健学科を卒業して良かったかに対し、非常に思う56%と思う30%の合計85%が肯定的な評価であった。 その一方で、科学的探究心の身につけることが出来たと思う割合は52%で他の項目に対して極端に低かった。就職先からの回収率は59.2%で、協調性とコニュニケーションを身につけていると回答したのは93%と高い評価が得られた。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
②学修成果の保証と充実した学修機会の提供	看護学科通信制課程	国家試験合格率が、現状より上がる 1）学習が遅れている学生の早期把握と支援対策の具体化 ・ 専任教員で担当学生を受け持ち、各学生の学習進捗の把握と支援を行う。 ・ 6 月末に新入生の学習進捗状況を確認し、必要時、チューターから連絡を取り学習を進めるよう指導する。 ・ 8 月～9 月に全学生の学習進捗状況を確認し、対応を検討する（学生へ進捗状況を知らせる。） 2）国家試験対策に対する意識の向上と関連行事への参加率の向上 ・ オリエンテーション及び学習説明会などでの国家試験対策行事の紹介と参加の推進（Web でも配信） ・ 随時、国家試験についての情報を配信する。 ・ 模擬試験の結果の見直しと各科目での強化対策の検討（模擬テストは自宅実施のため、経時的に結果を分析」し、チューターが個別に指導する態勢を整える。	■入学者・退学者・休学者・留年者・卒業者：年度途中の退学者数は18名（昨年14名）・休学者数6名（昨年3名）。理由は家庭・仕事と学業との両立や経済面、介護などであるが長引くコロナ禍の影響で、特に仕事量の増大と経済面の理由が増えている。卒業者数94名のうち2年間で卒業した学生の割合は　　67%（昨年66.9%）、また、卒業対象者の66.3%（昨年59.6%）が卒業に至っている。 ■GPA：本学で取得した科目のみで算出した。結果は平均2.80（昨年度は2.77）であった。 ■資格取得状況：看護師国家試験結果は、新卒者の合格率は75.3%で、昨年度77.4%を2.1%、全国2年課程通信制学校新卒者合格率86.2%を10.9%下回った。既卒者の合格率は25.6%で、全国2年課程通信制学校既卒者合格率28.8%を3.2%下回った。自宅受験による国家試験模試6回とWEBでの講座配信3回を実施し、模試の成績等を課程内で共有し、チューター指導の際に活用した。遠方で来校できない、近所に予備校がない、感染が心配あるいは県外への移動が制限された多くの学生が国試対策行事に参加することができた半面、受験後解答をPC入力する必要がある模試の受験率が低かった。次年度は対面による支援の充実などを検討する必要があると考える。 ■授業評価：17項目すべてで4.04～4.43と評価は高い。カテゴリー別評価でも全てにおいて4.2以上と高い評価を得ており、昨年度より授業内容と授業方法は評価が上がっている。今年度は春期の概論スクーリングがすべて遠隔授業で行われたが、昨年度初めて作成した遠隔授業内容を個々の教員が工夫した結果が反映されていると思われる。改善策に関する記述のデータ分析ではスライドという語を中心に授業内容の見直しや説明の方法などに関心が共通しているよすが見られた。 ■卒後評価：ディプロマポリシーに関しては、1項目を除いて（キャリアアップ）肯定的意見が70%と高い水準ではあるが、7項目全てにおいて前年度より低い結果だった。大学で受けた支援についても肯定的な回答はいずれも前年度より低かった。ただし、自宅での講座や模擬試験の実施変更したことに関しては一定の満足を得ていた。また、総合的評価の肯定的回答は91%と前年と同様の結果だった。全体的に前年より肯定的回答が減少したが、コロナ禍で見学実習の機会や対面での授業が減じたことが大きく影響していると考える。
③　FDによる教育力の向上	SD委員会	１．　研修の４観点（①医療・教育行政の動向の把握、②学内で優先して共有すべき内容、③教職員の教育力・教育支援力の向上、④教職協働 を図る）を踏まえた研修会を計５回実施する。各研修会の参加率75%をめざす。 ２．学科内FDを促進し、各学科の状況に即したテーマを設定し、授業改善に努める。 ・各学科の授業における課題や方向性に応じた学科内 FD のテーマを設定し、学科内の研修(公開授業等)を実施する。また、「公開授業参観記録票」の改 善を図り、各教員の授業改善に資するものとする。 ３. ICTを活用した授業に関する情報提供を行い、遠隔授業を始めとする授業の質の向上を図る。 ・ときわ教育推進機構会議、遠隔授業サポートチームとの連携を図り、ICT を活用した授業に関する情報提供を行う。 ４. 各委員会が開催する研修会を効率的・効果的に運営するための調整を行う。（「ハラスメント研修会」をハラスメント防止対策委員会と共催する。また、 必要に応じて各委員会との連携を強化していく。） ５.大学コンソーシアムひょうご神戸の相互公開による件数の情報を学内に発信する。 ・外部からの研修機会の情報を全学メールで発信する。	1.　４観点を踏まえた研修会の実施：①「新任教職員研修会」（4月2日）、②「R科新入教員SD研修会」（4月2日）、③ハラスメント防止対策研修会（４月26・27日）、④教員の教育力向上（IEPをテーマに）（９月７日）参加率58.4%、理解度96%、満足度96%　⑤「４年制歯科衛生士教育・歯科診療所の存在意義」（12月20日）参加率74.3%、理解度100%、満足度97%　の計５回を実施した。今後も事後アンケートの分析などを通して、学内の課題や外部の動向に応じた研修を行なっていく。 ２.学科内FDの促進：対面授業の公開のほか、遠隔授業も公開授業の対象とした。公開授業の件数全29件。「公開授業参観記録票」を自己の授業に反映できるものに改善した。また、M科「臨床検査技師講演会の視聴」、N科「臨地実習における指導の工夫」、R科「LaTeXでの画像ファイルの利用について」、E科「主体性をたかまえる遠隔授業のあり方」、O科「月に一度の学習会を実施し学会発表資料やスライド等の作成」、CCR「実習記録の指導について事例発表」のテーマで学科内FDを行なった。喫緊の課題についてFDを行なうことができた。 3.ICT活用授業に関する情報提供。遠隔授業の充実も視野にmanabaでの遠隔授業相互閲覧による学科内FD研修も実施した。 4.各組織との連携：ハラスメント防止対策委員会との共催で「ハラスメント防止研修会」を実施したほか、口腔保健学科との連携による研修会を実施した。 5.情報発信：大学コンソーシアムひょうご神戸による情報を学内に発信し、外部の研修情報を提供した。また、manabaの「SD委員会」に【大学等における教育FD動画コンテンツ】を掲示した。情報提供は充実してきているので、外部研修や動画コンテンツの自主的な活用を促す取り組みをすすめていく。
④　ICT を活用した学習方法の更なる充実	教務委員会	新型コロナウイルス感染対策を講じながら学修成果の保証と学修機会の提供に向けて活動（遠隔授業の効果的な活用）する。 1）コロナ禍において、3 度目の緊急事態宣言（4/26～）が発令された。今年度は対面 7：遠隔 3 でスタートしたが、関西圏の感染増加による本学の方針に則り、5 月末を目途に 5：5 になるよう調整を行った。学科ごとに学修成果の保証と学修機会の提供のため、昨年度に引き続き遠隔授業の効果的な活用を検討する。（補講日程の確保、登校できない事態になった場合の授業の確保等） 2）WEB上でのテキスト購入や資料類(シラバスなど)の公開、manaba の活用など、ICT の更なる充実を図るよう取り組む。	コロナ対応を契機に遠隔授業が始まったが、コロナ対応に限らず、効果的な実施について検討した。具体的には基盤教育や複数学科合同科目により履修者数が教室収容人数を超える場合（またはかなり密な状態になる場合）、授業回数の確保が対面では困難な場合、非常勤講師との調整などである。また学科で教育上の効果があると判断した場合もある。遠隔授業とmanabaなど教材として活用する場合を整理し、ICTの効果的な活用と学生にとっての学修機会が確保されるよう引き続き検討をする。 　　履修に必要な資料類（シラバスや年間行事予定表など）のWEB上での公開やテキスト購入、manabaの活用についてもさらなる充実を図っていきたい。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
⑤　激甚災害を想定した学修環境及び学修方法の整備・検討	危機管理（災害）委員会	学生の危機管理マニュアルの作成 ・学生が携帯できる総合的な危機管理マニュアルの策定を目指す。	学習環境については、施設の老朽化を考慮した研修室棟などの外壁工事等を実施している。 施設内の整備として、消防設備、エレベーター等の定期的な点検の他、全館停電による電気設備点検を実施した。 また、施設内の安全対策として、管理員、警備員による教室の見回り、施錠、閉館時間の管理など警備強化を進めている。
	教務委員会		R2年度より引き続き、新型コロナウイルス感染拡大により対面7：遠隔3で開始したが、4/26より緊急事態宣言が発令されたため、関西県の感染増加に寄る本学の方針に則り、5月末を目途に対面5：遠隔5となった。また8～9月の再拡大に伴い、後期も10月を目途に対面5：遠隔5を継続し、その後は対面7：遠隔3程度に緩和された。それに伴い時間割の調整、専任・非常勤の講師との調整を行った。基本的な感染対策のもと、授業等での感染の広がりはなかったが、コロナ感染者および濃厚接触者になった学生には公認欠席扱いとして対応した。追再試験の際には再度試験日を調整し、再度受験できるよう対応した。学修方法については大学での授業が困難な場合にICT（manaba）が活用できる。今後も遠隔サポートチーム等、各組織と連携して進める。
⑥　学修成果・教育成果等の積極的な情報公表	法人本部	学修成果・教育成果等の積極的な情報公表に努める	学修成果の可視化が求められている状況を踏まえ、関係法令に定められている事項は勿論のこと、GPA、就職率、国家試験合格率など学修成果・教育成果等についても可能な限り公表するよう努めた。 今後の課題としては、各学科で収集・分析した学修成果等の可視化に努め、積極的に情報公表していくことは勿論のこと、これら有用な情報をいかにPDCAサイクルに基づき教育等にフィードバックしていくかがポイントとなる。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
（２）多様で柔軟な教育体制の構築			
①　基盤教育の充実	ときわ教育推進機構	基盤教育全体の振り返りをし、更なる充実を目指したカリキュラ ム案を作成する ・開講5年目を迎える基盤教育の課題を整理し、新たな課題にも配慮した新カ リキュラム案を作成する。	2022年度入学生から適用される、基盤教育分野の新カリキュラムを作成した。 科目数は38科目から6科目増え44科目となり、より学生や社会のニーズに適合した内容となった。今後は、次のカリキュラム見直しに向けて課題を整理すべく、新たな情報を集めていく。 また、本学におけるICT活用の推進や数理・データサイエンス・AI教育を導入すべく、情報系科目の教育内容を全学共通に見直した。
②　学生個々の能力を引き出すための教育プログラム（テーラーメイド教育）の構築	ときわ教育推進機構	準正課活動も含め、学生の個々の能力が引き出せるような教育 プログラムの開発を継続する ・多様な学生の個々の能力を引き出せるように、準正課活動も含めた教育 プログラム（テーラーメイド教育）開発を継続して行う。	準正課活動の可視化については、2022年度より取り組む新ときわコンピテンシーの可視化に組み込む準備ができている。 可視化の活用については、各学科の協力を得る方向で継続審議する予定である。
③　キャリア教育の充実（「学部・学科の特色化」参照）	医療検査学科	新型コロナウイルス感染予防に対応したキャリアサポーター勉強会 の実施 1）新型コロナウイルス感染予防に対応したキャリアサポーター勉強会の支援 2）在学生に対しキャリアサポーター活動の広報	就職委員を担当する教員が主となり、卒業生の予定を調整しながら実施した。新型コロナウイルス感染症予防のため、土曜に開催した勉強会の内容をBLSキャリアパス、臨床検査入門などの授業に取り入れ、学生へ広報活動を積極的に行わずとも参加できるように工夫した。
	診療放射線学科		1期生に対するキャリア教育に関する方針を確認し、3年次からの就職活動のスケジュール等を計画した。
	看護学科		目指す将来像をイメージし、学修支援となるように、就職委員会により卒業生との交流の場を設けている（３年生対象OB・OG懇談会）。昨年度はコロナ禍の影響で開催できなかったが、今年度は方法を検討し、オンラインを活用して実施することができた。参加し他学生からの満足度は高かった。 また、保健師資格を持ち本学卒業生である職員より、保健師についてのガイダンスを実施した。養護教諭課程では例年行っている教職支援センターの協力による、卒業生を交えての座談会を実施した。 　授業においても卒業生をゲストスピーカとして招き、臨床実践を通して先輩の看護観へ触れる機会を設けた。今後も継続していく。
	こども教育学科		授業において、外部講師や卒業生を迎えてキャリア教育を行っている。また就職指導においても、就職先から講師を招き、専門職としての意識を高める取り組みも行っている。教職支援センターと連携して、卒業生を迎え、合格者座談会や先輩激励訪問などの企画も実施している。
	口腔保健学科	キャリア意識を高め、歯科衛生士という職種への理解を深める。 ・現状のキャリア支援システムの充実 ①外部講師を招いてキャリアコンサルティング講演を計画する。 ②従来から実施している既卒生による職場の歯科衛生業務の紹介を拡大する。 ・職場体験実習（インターシップ）の実習内容の検討を始める。 ・キャリア教育充実に向けて専任教員の各種資格取得を推進する。	学科内に設置した就職委員会とキャリア支援課ならびに学生委員会と連携しながら活動を推進した。 ①3年生対象に国家資格キャリアコンサルタントを外部講師として招いて講演を実施した。 ②卒業生サポーターを招いて、「先輩の話を聞く会」を実施、また、多彩な職歴を持つ本学教員による体験談を実施、更に、企業で勤務されている歯科衛生士を招いての講演を企画し、多様な働き方について学生に理解を深める機会を企画した。複数名がオープンキャンパスで職場紹介を行った内容を、ご本人たちの承諾を得て、ビデオ編集して学生に紹介した。さらに、多彩な職歴を持つ本学歯科衛生士教員の体験談を講演形式で実施した。また、四大化に向けて、教育課程にインターンシップを導入することを決定し、協力企業を募集した。協力を得た企業に対して、今後、開始時期と内容について詰めていく予定である。さらに、学科内教員の数名がキャリア教育に関連する資格を取得した。
④　リカレント教育の実施	医療検査学科	リカレント教育教材のデジタル化 1）社会人を対象にしたセミナーを開催し、リカレント教育にむけた教材作成 2）新型コロナウイルス感染予防に対応できるよう、リカレント教育教材のデ ジタル化の推進	2020年度の経験を元に、対面でのリカレント教育が行えないことを想定し、以下のデジタル教材の作成を行った。 消化管エコー動画の作成 ・腹部食道、胃、十二指腸、小腸、虫垂、大腸について日本超音波学会の基本走査法に従い、手順内の消化管エコーの観察を行った。 ・各臓器の観察方法についてVTR内にスライドショーを実施し、ナレーションを加えた。 ・下痢、腹痛で来られた急性腹症の患者を想定し、キャンピロバクター腸炎についてナレーションを加え、消化管エコー検査の動画マニュアルを作成した。 頭頸部動画マニュアルの作成 ・甲状腺、唾液腺、頸部リンパ節について、日本超音波診断の基本走査法に従い、手順内の頭頸部エコーの観察を行った。 ・頸部リンパ節については正常範囲内に現れる反応性リンパ節について、形状・境界・縦横比・リンパ門の有無など、頸部の位置別に本学生80人の検討を加えた。 ・観察方法についてもVTR内にスライドショーを実施し、ナレーションを加えた。 ・異常所見についてはバセドウ病患者を想定し、甲状腺機能亢進症についてナレーションを加え、甲状腺・唾液腺・頸部リンパ節エコー検査の動画マニュアルを作成した。
	診療放射線学科		卒業年次に達していないため，具体的な活動はなかった．

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
④　リカレント教育の実施	看護学科	リカレント教育検討プロジェクト 在宅看護実践力の育成に向け、基礎教育での内容、卒後の育成内容を検討するために、「在宅看護実践力の向上に向けたニーズ調査」を実施する。 1）在宅看護実践力の育成に向け、基礎教育での内容、卒後の育成内容を検討するために、訪問看護師に向けたニーズ調査を実施する。 ①兵庫県内の訪問看護師にニーズ調査を実施（6 月） ②調査結果をまとめる。（12 月） ③基礎教育の内容・卒後の育成内容を検討する 2）卒業生に向け「在宅看護実践力の向上に向けたニーズ調査」を実施する。 ①卒業生（短期大学～4 大）の卒業生を対象に、リカレント教育の内容についてのニーズ調査を実施する。（6 月） ②調査結果をまとめる。（12 月） ③リカレント教育の方向性を検討する。（在宅実践力を含む）	1）「在宅看護実践力の向上に向けたニーズ調査」はR3年度テーマ別研究に申請し、調査に係る費用を確保し、11月より調査を実施。調査結果を分析している。今後は基礎教育での内容、卒後に育成する内容を検討。 2）「卒業生を対象としたリカレント教育へのニーズ調査」もR３年度テーマ別研究に申請し、進めた。11がつより調査を実施し、現在分析中である。いずれも今後の方向性を見出すことまでは至らなかった。今後は引き続き結果の分析を行い、リカレント教育実施に向けて検討する。
	こども教育学科		毎年学祭の時期に合わせて、ホームカミングデイを開催している。その時に保育の動向や最新の保育事情について学科教員が講演をしている。リカレント教育の一環として実施している。しかしながらここ2年コロナ感染症の影響により開催を自粛している。教職支援センター事務室では、教員採用試験を受験する既卒生にも採用試験対策のための資料の配布、採用試験情報の提供なども行っている。
	口腔保健学科		「歯科衛生士リカレント教育キャリアアッププログラム」は、歯科衛生士の生涯学習の場として平成２６年度から開講している。 令和3年１月「令和3年度リカレント教育」の説明会のコンテンツをホームページ上にアップするとともに、卒業生・卒業生の勤務施設、また歯科衛生士会会員や近隣の歯科医師会会員の歯科診療所へ募集チラシを配布し受講生の募集をおこなった。令和3年度は6名の受講生を迎え、順調に60時間のプログラムを実施することができた。在校生を対象とした授業（web講義・対面講義）を学生と共に受講、リカレント生だけの特別講義として各教員が専門分野の講義や歯科診療所を使用しての技術修練、また他施設への見学研修など、それぞれの受講生は希望する分野の学習を深めた。3月には6名全員が学校教育法第105条に基づき履修証明書を受け取ることができた。 60時間の履修については、教員と日程を調整して一人一人のニーズに合わせたカリキュラムを組むことができることや、開講している科目を自由に選択できること等、キャリアアップを図りたいと考える歯科衛生士にとって学修しやすいプログラムになっている。履修後の受講生の感想では、「もう一度歯科衛生士として勤務することになった」「新しい分野へ挑戦することになった」「今までの業務内容を自信をもって実施できるようになった」などの声を聴くことができ、本プログラムの目的である歯科衛生士の人材確保、雇用促進に繋がっている。
⑤　大学の特色を生かした学部学科横断的な教育プログラムの検討・実施	ときわ教育推進機構	学部・学科の特色を生かした、横断的な教育プログラム（多職種連携教育）を開発する ．本学を構成する学部・学科の特色を生かすべく、多職種協働等を中心とした学科横断的な教育プログラムを開発する	多職種連携教育については、各学科の専門教育で取り組むことになった。とりわけ、保健科学部の4学科について、複数学科で共通開設すべく学部で連携して取り組むこととなった。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
⑥　地域連携型教育プログラムの検討・実施	地域交流センター	１．新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の影響により「子育て総合支援施設 KIT」「健康ふれあいフェスタ」「わいがやラボ」等地域交流の場が縮小せざるを得ない状況にあるが、コロナ禍においてどのように場を持つのかを検討し、地域と大学が繋がり続けるための企画を積極的に増やす。 ・子育て支援センター「ときわんノエスタ」を新たに開設し、既存の子育て支援施設とともに地域の子育て支援を行う。 ・「わいがやラボ」の利用促進を図るため、学生向け企画を開催する。（わいがやカフェ等） １．公開講座については、すでに昨年度より取り組みを強化しているオンデマンド配信による講座を積極的に活用し、高齢者を中心とした企画以外に新たな年齢層を取り込める企画を提案する。 ・対面・オンデマンド、年間 20 本以上の公開講座を実施するとともに、すこラボや KIT 等学内組織と連携した講座を企画する。 ３．多文化共生社会の実現に寄与する活動を企画・運営する。 ・新長田南地区に移転予定の神戸国際コミュニティセンター（KICC）等と連携し、多文化共生に関する地域課題の発掘、それに対して寄与できる活動を企画・運営する。（日本語学習者への健康支援、外国にルーツを持つ子どもへの日本語学習指導等） ４．教職員・学生に本学の地域交流・社会連携活動を周知するための広報活動を行う。 ・インナーブランディングの確立のため、学内向け地域交流・社会連携活動情報誌「社会連携だより」を発行する。またいつでもアクセスできるようポータルサイトの作成を検討する。 ・地域における防災減災啓発のための取り組みとして、長田消防署と連携した学生による啓発活動の検討を行う。 ・学生のボランティア活動推進のため、諸団体と連携した活動の企画を行う。（淡路市岩屋地区活性化プロジェクト、小豆島合宿、福島スタディツアー等）	本年度は、新型コロナウィルス感染症拡大防止の観点から多くの活動が制限され、小豆島合宿、健康ふれあいフェスタを中止とせざるを得なかったが、昨年度中止となった福島スタディーツアーが実施出来、活動再開への足掛かりとなると感じた。 公開講座は、対面で4本、オンラインで19本開催出来、地域的・世代的に幅広い層に受講してもらえた。
	ときわ教育推進機構	本学の地域活動と連動した地域連携型教育プログラムの検討・実施に着手する ・地域交流センター等と共に、既に活動実績のある地域活動とも連動させた教育プログラム開発の準備をする。	教育内容を見直した創造実践科目群にて地域連携型教育プログラムを実施すべく、地域交流センターと検討を行った。
⑦リメディアル教育（学習支援、補習授業）の検討・実施	ときわ教育推進機構	１.教育の質保証及び大学の特色化に繋がるリメディアル教育の検討・実施に継続して取り組む ・事業の継続性や社会への情報発信を見据え、各学科で実施しているあらゆるリメディアル教育の情報（準正課活動含む）を集約した結果に基づき、中期的な視点も含めて、今後のリメディアル教育のあり方を検討する。 ２.教育の質保証及び大学の特色化に繋がる入学前教育の検討・実施 に継続して取り組む ・事業の継続性や社会への情報発信を見据え、各学科で実施しているあらゆる入学前教育の情報（常盤女子高向けプラグラム含む）を集約した結果 や、中期的な視点も含めて、今後の入学前教育のあり方を検討する。	１．リメディアル教育の情報集約を行ったが、今後のあり方の検討は実施できなかった。 ２．R科とO科がmanbaを活用した入学前教育を実施した。実施状況を検証し、次年度は他学科でも実施できるよう、また本学の特色ある入学前教育として情報発信できるよう検討した。 今後は、本学の特色ある教育の一環として、入学前とリメディアル教育の接続のあり方について検討する必要がある。
⑧学園内高大連携の充実	学園一体化推進協議会	神戸常盤女子高等学校との連携事業を充実させる	高等学校生徒の学習に対するモチベーションの維持・向上を目的とした各学科の体験授業、入学予定者を対象とした入学前オリエンテーション、あるいは神戸常盤女子高等学校主催の進路説明会等への教職員派遣などを実施。これらの取り組みが学園内広大連携の充実に繋がった。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
2　入学者選抜に関する計画			
（1）IRを活用した入学者選抜制度の検証と改善	入試委員会	各学科の R.3 年度卒業生に関する卒業次の成績(取得単位、資 格、国家試験結果)と入試形態に関する解析 ・IR 推進室と協力して各学科の R. 3 年度卒業生に関する卒業次の成績（取得単位、資格、国家試験結果）と入試形態に関する解析を行う。	各学科でR. 3 年度新入生アンケートの実施・分析等により、志望動機や併願先の様子を把握することで学生受け入れに関する適性を検証した。 IR データを活用して各学科R. 3 年度卒業生（上位10名、下位10名）に関する入学時基礎力テスト結果、取得単位、資格、国家試験結果等と入試形態に関する解析を継続的に行うことはより当該学科のAPに適合した入学者の選抜につながると考える。また、各学科の特徴、独自性を強化するとともに、将来的に求められる分野を見極めることが重要である。
（2）アドミッション・ポリシーに基づき、入学志願者の学力及びそれ以外の能力・意欲・適性等を多面的・総合的に評価・判定するための入学者選抜を実施	入試委員会	新テストにおける評価基準の設定と確認 ・R.3 年度選抜で本学が導入した新テストに対応するために設定した調査書評価基準、面接試験評価基準、大学入学希望理由書の評価基準を確認する。	R４年度選抜では、本学が設定した調査書評価基準、面接試験評価基準、大学入学希望理由書の評価基準を各学科で確認した上で、各選抜入試を実施したことで従来の学力ではなく、学力の３要素を基に意欲・適性を多面的・総合的に評価できた。学科研修として選抜方法についての理解を共有した後、各入試に臨んだ学科もあった。
（3）ホームページの充実やインターネットの活用による積極的な広報展開	広報委員会	１.「魅力ある大学」として広く社会に発信できるコンテンツ作りのため、他部署と連携して HP の充実を図る。 1）入試広報課をはじめ他部署と連携しながら学生募集に効果（魅力）あるコンテンツ作りに努める 2）教育成果・研究成果・社会貢献を広報するために関連部署と掲載内容を協議検討していく。その際、トピックボックスを積極的に活用する。 ２．教育・研究・社会貢献に関する情報公開を積極的に行う。またHP 記事の更新に学科や部署の偏りがないようにし、トピックボックス等を利用して迅速に漏れなく掲載する。 ・委員会で定期的に HP の記載内容をチェックし、修正や更新を適宜行う。 ３．SNS を使った広報を活性化させる。 ・SNS を使った広報の活性化に向けて協議検討を行う。 ４.広報誌を年2回発行し、本学の実績を報告する	1．新HPに移行後スムーズに運用している。過去3年間のアクセス総数を比較すると2019年度431,478回・2020年度525,756回・2021年度469,251回である。2020年度は、コロナ禍における遠隔授業開始もあり、学生のアクセスも多く、一時的にアクセス数が伸びたと考えられる。2019年→2021年は9%増加している。 スマホからの新規訪問率についてはリニューアル前の2020年9月は46.90%、リニューアル後2022年2月は56.08%と運用開始後は9.18%増加しておりスマホ対応の画面構成にした効果が表れている。 さらに、平均ページビュー（アクセス後、何ページ閲覧したかの平均）は2021年2月2.95%から、2022年2月3.04%へと3%増加しており、新しいHPになって閲覧数が増えたことが明らかである。（根拠資料：Web Analytics Reporting Serviceの報告書） SNSを使った広報については、今年度新たに引用アプリを導入することによってInstagramコンテンツの充実を図っている。 1）新型コロナウイルスの蔓延で、新しいコンテンツ制作に関する行事関係が中止になり動画や写真撮影が予定通り行うことが出来なかった。今後はコロナの情勢を見極めながら各部署と連携し新コンテンツの制作と、修正を加えていく予定である。 2）前述の通り本学主催のイベントや活動の中止が重なり、HPへの掲載数も減少した。しかしその中でも教員の教育・研究活動は遅滞なく掲載することが出来た。（根拠資料：HPトップページ「NEWS」への掲載記事） 2．「トピックボックス」の運用により教職員が自分の属している学科や部署にとどまらず、他学科や他部署のことを知る機会を充実させることが出来た。今後はさらに決済の簡略化を行い、掲載までの時間を短縮する。また、定期的に新規トピックの紹介をオールメールにて配信する。また、広報活動に広く利用してもらうために常盤女子高校とも共有できるようにする。 3．SNSを使った広報については、Instagram更新に携わる専属委員の負担を考慮し引用アプリの導入を行った。他のInstagramアカウントから本学に関係するトピックを引用し、効果的な広報を行いたい。まず、本学職員のアカウントである「machiken_tokiwa」から投稿を引用し、本学Instagramと相互に検索可能なハッシュタグを使うことによって、投稿を見つけてもらいやすくする効果を狙う。 ４．広報紙「キャンパスレポート64号65号」を発行し、本学の実績を報告することができた。
	入試委員会	広報委員会の協力を得ながら「今の常盤」、「最新の常盤」を発信することで本学の周知を図り、認知度を高め、志願者増に結びつける。 ・新型コロナウイルス感染症の感染状況による選抜方法の変更等の告知を迅速に行い周知することで、受験生の不利益防止に努める。 ・在学生と教職員の協力を得ながら動画による web オープンキャンパスを作成し各学科の魅力と最新の情報を提供し、志願者増に結びつける。 ・web 相談会により他府県からの受験生対応の実施につなげる。	在学生と教職員の協力を得ながら動画による web オープンキャンパスを作成し、各学科の魅力と最新の情報を提供することで志願者増に結びつけた。今後のコロナウイルス感染状況は不明であり、 web オープンキャンパスの作成も「最新の常盤」を伝えるものとし、またweb相談会により他府県からの受験生対応の実施につなげたいと考える。
（4）オープンキャンパスの実施方法の改善	入試委員会	新型コロナウイルス感染症の予防を徹底しながら、新たな方法で6回のオープンキャンパスを実施し、来場者を受験に結びつける。 ・新型コロナウイルス感染症の予防（3 密の回避、消毒の徹底）に配慮しながら対面型のオープンキャンパスの方法として、予約制人数制限有り、登録制人数制限無し、学生動員の調整、午前午後の 2 度実施、来場者を複数班に分割しての実施等を企画し運営することで、高校生、来場者の要望に応える。	在学生と教職員の協力を得ながら動画によるwebオープンキャンパスを作成し各学科の魅力と最新の情報を提供することで志願者の要望に応えた。新型コロナウイルス感染症の感染状況によるオープンキャンパス実施方法の変更等の告知を迅速に行い、web 相談会により他府県からの受験生対応の実施につなげることで受験生の不利益防止に努め、来場者を受験に結びつけた。具体的には、新型コロナウイルス感染症の予防（3密の回避、消毒の徹底）に配慮しながら対面型のオープンキャンパスの方法として、予約制人数制限有り、登録制人数制限無し、学生動員の有り無し、午前午後の2度実施、来場者を複数班に分割しての実施等を企画し運営することで、高校生、来場者の要望に応えた。R. 3 年度来場者総数は生徒1,118（1.132）、保護者 767（739）合計1,885（1.871）名。高３の人数は816(891)名。（カッコ内は R２年度人数）であった。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
3　学生支援に関する計画 本学の教育理念を構成する全学スチューデントサポート・ポリシーに則り、学生委員 会を中心に以下の課題に取り組む。			
（1）各学科就職委員会と連携した就職支援の強化	キャリア支援課	各学科就職委員会と連携の上、就職支援に取り組む。従来より推進する「キャリアサポーター（卒業生）」の参加型による在校生へのガイダンス、懇談会等は新型コロナウイルス感染症の影響のため、昨年度は概ね中止、一部を動画での実施となったが、今年度はリモートでの実施も考慮し、就職活動の準備対策に繋げていく。また、コロナ禍により採用試験が早期の集中することが、予測されるため、新年度早々から学生対応を行っていく。また、令和6年3月に1期生の卒業を迎える診療放射線学科3年生から開始する就職ガイダンスの準備として、後期には就職委員会を立ち上げ検討していく。	令和3年度はコロナ禍2年目であり、WEB面接も多くの施設が導入し、採用試験も昨年のような混乱は無かった。ただ、当該学年は3年生の臨地実習の殆どが学内実習に代わり、就職合同説明会も中止、規模縮小でのWEB対応等で充分な施設見学も出ない状況での活動であったため、苦戦を強いられた年度であった。就職活動も従来より長期化する学生も多く、就職状況は医療検査学科84.4%（昨年91.3%）看護学科98.9%（前年100%）　こども教育学科100%（前年100%）口腔保健学科90.4%（前年93.8%）と昨年より減じた学科が多くなった。 診療放射線学科の就職委員会を後期に立ち上げ、3月末までに5回の会議を開催し、令和4年度のガイダンス計画を立てた。
（2）学生支援体制の充実 ①　学生実態調査および3年毎の学生満足度調査を行い、学生生活の実情を把握する。また調査の結果を学生にフィードバックするとともに、教育環境の改善を図る。	学生委員会	学生実態調査の実施部署として調査回収を行い、できるだけ早期に学生全員が回答できるように努める。 　入学時、2 年次、4 年次の学生に学生実態調査を行い、早期面談の実施および学生生活の充実に向けた環境改善につながるよう、各学科および他部署（キャリア支援課、学生相談室、IR 推進室）と連携して、できるだけ速やかに回答率が100%になるよう努める。	学生実態調査について、オリエンテーションの期間を利用して、４月中に９９.８％（４２３名の入学者の内、４２２名）の回答を得た。また、５月までに１００％の回答となった。調査を基に学科教員で面談を実施した。学生満足度調査については、印刷した冊子を事務局のカウンターに設置し、学生が閲覧できるようにした。また、データをホームページ上に公開して、結果の周知を図った。学生実態調査が早期に実施・回収できたことや、学生満足度調査の回収率が大幅に上がったことは評価できる。
（2）学生支援体制の充実 ②　学生自治会との定期的なミーティングを実施し、活動方針を協議、確認することにより、学生自治会の健全な運営のための支援を行う。	学生委員会	１．学生自治会の健全な運営のための支援を行うととに、学生生活の充実を図る 　学生自治会とミーティングを実施し、活動方針を協議、確認することにより、学生自治会の健全な運営のための支援を行う。さらには、多くの学生から意見を集約し、問題点を見つけ出すことにより、大学側と連携して教育環境の改善に役立てる。 ２．コロナ禍の中、⑴今年度学園祭、⑵次年度新入生対象の学外オリエンテーションの実施方法について検討を行う。 1）大学祭開催の是非および実施方法については、昨年度の実績をもとに学生自治会との意見交換を通じて検討する。 2）移動制限や感染防止措置が必要となることが予想されることから、昨年度の学内オリエンテーションの実績、在学生の意見、アンケート調査結果などをもとに検討を行う。 ３．喫煙学生の実態を把握し、対応を検討する。 　昨年度末で卒煙支援ブースは撤去した。引き続き、健康保健センターと連携して喫煙学生の実態の把握に努め、必要に応じて対応策を協議する。	2.(1)学園祭実施の是非については学生自治会との４回のミーティングを通じて意見交換を行った。企画時点では新型コロナウイルス第４波、第５波の感染時期であり、中止を含め学生自治会と学生委員会の間で議論が重ねられたが、学生たちの実施に向けての強い思いを尊重し、本学学生のみを対象としたリモート（YouTube配信）による学園祭実施となった。初めての試みであったが、参加学生が危機管理意識をもって取り組んでくれたこと、洗練されたプログラム内容と細やかな演出で構成されていたこと、企画会社による手厚いサポートがあったこと等の理由から、学園祭を成功裏に終えることができたことは評価できる。今回の経験を次年度以降に繋げる取り組みを進めていく。 (2)新入生オリエンテーションについては学外施設の収容能力の問題、コロナ禍での移動制限や感染防止措置などの観点から、宿泊を伴わないプログラムに変更し、これまで同様、「仲間作り」を目的として学内で実施した。なお、密を避ける意味で２日間に分けて実施することとし、感染対策については学生部ガイダンスで注意喚起を行い、学生への周知徹底に努めた。新入生対象に行ったアンケート結果は次のようになった。①トキワシンポジウム(満足度)：98.8%、②学科プログラム(満足度)：99%、③大学生活のイメージが湧いた：96.4%、④学習意欲が高まった：98.1%、⑤友達作りのきっかけになった：90.2%、⑥教員との交流が図れた：69.2%、⑦大学生活の不安が軽減した：84.7%、⑦緊張の緩和が図れた：84.7%　　その他、自由記述においても肯定的な意見が多く、学内実施を通して本来の目的が達せられたことは評価に値する。今回の経験を次年度以降に繋げる取り組みを進めていく。 3.定期的な学内見回りや禁煙に関する啓蒙活動により校内での喫煙学生数が激減した結果、タバコに関するトラブルの発生は今年度は見られなかった。禁煙活動を次年度以降も続けていく。
（3）修学支援奨学金制度の見直し 2020年4月から新たに始まる「高等教育の教育費負担軽減新制度」と本学独自の修学支援奨学金制度を連動させるために制度の見直しを行い、経済的な理由で修学が困難 な学生を支援する。	学生委員会	修学支援奨学金制度の見直しを行う。 　昨年度、本学独自の修学支援奨学金を新型コロナウイルス感染拡大に伴う経済的な支援を行うよう制度の見直しを行った。今年度も引き続き、新型コロナウイルス感染症の影響によって、家計の収入が減少した学生を対象に支援を行う。	奨学金については、今年度も昨年に引き続き、新型コロナウイルスの影響で家計収入が減収している者を対象とした。昨年は前年に比べ30%以上減少であったが、今年度は令和2年度の収入もしくは令和3年度の収入見込が50%以上減少した者を対象とした。応募者は８名であり、その内、基準を満たしている４名が採用となった。新型コロナウイルスの影響が続くようであれば、次年度以降も継続して新型コロナウイルスの影響により家計収入が減少した学生を対象に内容を検討する。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
4　研究に関する計画 医療と教育、そして地域連携を特色とする大学全体としての研究環境の充実を図り、 多様で柔軟な研究体制を構築することを目的として、以下の課題に取り組む。			
（1）「私立大学研究ブランディング事業」（平成29～令和元年度文部科学省補助事業）により開設された本学独自の「子育て総合支援施KIT」および「ときわんモトロク」を拠点として、総合的な子育て支援関連の研究を系統的に推進する。	KTU研究開発推進センター	推進のための研究環境の整備と学内啓発活動 ・2020年度から新設した「テーマ別研究」の応募区分の「地域研究」枠と「教育研究」枠の吟味と充実	2021年度は、「地域研究」に5件、「教育研究」に8件、「一般」に1件の申請があった。年度予算の範囲内であったの、換言すれば競争原理がはたらかなかったので、全申請を採択するに至った。 競争原理がはたらくように、申請状況などをもとにセンター内で検討した結果、2022年度からの「テーマ別研究」の応募区分を「ブランディング研究（地域・教育）」と「基礎研究」に再区分し、さらに「ブランディング研究（地域・教育）」のみ、1年計画と2年計画の選択を可能とした。
（2）地域社会における多文化共生の実現を目指し、保健、歯科衛生、教育、保育の分野での調査・研究を企画し推進する。	KTU研究開発推進センター	推進のための研究環境の整備と学内啓発活動 ．2020年度から新設した「テーマ別研究」の応募区分の「地域研究」枠と「教育研究」枠を活用した研究の活性化	コロナ禍による活動自粛を余儀なくされたため、地域社会や教育現場での実地の調査研究が制限され、活性化には至らなかった。
（3）多様な研究人材を活かし、医療・保健分野、教育分野における基礎的・先導的研究の推進を図る。	KTU研究開発推進センター	推進のための研究環境の整備 ・2020年度から改定した「テーマ別研究」の応募区分の1つである「一般研究」を全面的に再検討しさらなる活性化を図るように工夫するとともに、2021年度に新設された「すこラボ」と協働し、医療・保健分野における基礎的・先導的研究を推進	「テーマ別研究」の応募区分の1つである「一般研究」を全面的に見直し、2022年度から新たに「基礎研究」（科研費等の獲得へ向けた基礎研究）を設け、申請上限金額も50万円にアップした。 コロナ禍による活動自粛を余儀なくされたため、「すこラボ」自体の活動も収縮せざるを得ず、研究の着手等にも至らなかった。
	図書紀要委員会	1.紀要発行について検討するために査読システムについて検討する ・査読システム利用の実現性についての検討	査読システムについて 3社に見積を依頼し、導入を検討したが、費用対効果を考え、現状導入は見送ることとなった。
（4）学術研究、実地調査の基盤としての図書館ならびに情報ネットワーク環境の充実・ 整備を図る。	図書紀要委員会	1．電子資料のアクセシビリティの向上を図るために ①. 電子資料の利用方法について周知拡大につとめる ・電子資料の利用について学科教員への情報の発信・共有 ②. 電子資料利用状況の評価・分析を行う ・Web ガイダンスの充実、利用状況の評価・分析とそれに応じた契約変更 2．学生の図書館利用を促進する取り組みを継続する ①. Web を活用した利用促進の取り組みを行う ・教員と連携した授業・課題等での図書館利用の促進 ・継続的な広報活動（ガイダンス、配布物やポータルシステムでの情報配信、館内掲示等での利用案内、教員による利活用紹介） ・Web 広報・案内の充実（図書館利用に関する目的別ガイダンス作成、コンテンツ構築） ・読書マラソンを実施し、優秀者の表彰を実施する ・ビブリオ KoToLa の充実を図る	1．電子資料のアクセシビリティの向上を図るために ①.・ 文献検索ガイダンスをmanabaで開催した。（対象：MNE科4年生、O科2年生） ・図書館HPに「オンデマンドガイダンス」ページを作成、電子資料の利用方法等を公開し、各学科教員および学生に周知した。（図書館HP＞学修支援＞オンデマンドガイダンス-文献検索：データベースやインターネットを使った文献の探し方　医中誌Webの使い方、CiNii Articlesの使い方） ・医中誌Webのアクセス制限（3）をなくし、学外認証システムによる学外からのアクセスを可能にした。（2022年1月末：学認接続15,871回・学内からの接続：11,280回） ・聞蔵Ⅱビジュアルをmanaba連携し、アクセシビリティの向上を図った。（ログイン回数：2020年度222回・2021年2月末1,445回） ・教員へ各データベースオンライン講習会の案内を都度tokiwa-allで配信した。（9回）" ②.・図書館HP「オンデマンドガイダンス」に電子書籍利用の資料を公開した。 ・メディカルオンラインのトライアルを実施。利用ログを収集・分析し、利用資料の傾向等を確認した。（利用ユーザー数：2020年度1,223人・2021年1月末：3,464人（うちトライアル383人））トライアルの結果、各プラットフォームに適した電子書籍を購入した。（購入冊数：丸善イーブックライブラリー（10冊）・メディカルオンラインイーブックスライブラリー（3冊）） ・Dentistry & Oral Science Sourceのトライアルを実施、利用ログを収集・分析し、新規に契約した。（アクセス回数：2021年6月～12月126回） " 2．学生の図書館利用を促進する取り組みを継続する ①.・OPACマイライブラリを利用した図書の予約や貸出延長の利用が増加した。（全体のうちマイライブラリ経由の 予約：94%・貸出延長：70%） ・OPACマイライブラリを利用した学外文献複写依頼が増加した。（学生依頼：2020年度78件・2021年度134件） ・学生Web 選書を実施した。（参加者：3グループ18人(E科授業での利用)、個人1人） ・Web上で、OPACマイライブラリを活用したブックリユースを実施した。（予約：63冊、持ち帰り：51冊） ・教員希望で、図書館利用の対面オンデマンドガイダンスを実施した。（O科：1回） ・E科授業での学生Web 選書の案内、購入したリクエスト本のPopを作成し、掲示した。（3グループ） ・学生企画のオリエンテーションM1学科プログラムに協力した。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
（４）学術研究、実地調査の基盤としての図書館ならびに情報ネットワーク環境の充実・ 整備を図る。	図書紀要委員会		・図書館内に、具体的な書名を記載せずとも購入希望が出せる「ふわっとリクエスト」掲示を設置した。（リクエスト件数：2件） ・コロナ禍での学外からのアクセスについてポータル配信をした。（聞蔵IIビジュアル：2回） ・イベント開催ごとにポータル配信で周知、参加を呼び掛けた。（5回）" ・図書館HPに「図書館活用法」ページを作成、図書館利用方法について目的別に資料を公開し、各学科教員および学生に周知した。（図書館HP＞学修支援＞図書館活用法） ・読書マラソンの表彰を行い、読書マラソンニュースを配信した（読書マラソン表彰者2 名） （読書マラソン新規エントリー者：2020年度2名・2021年度6名）" ・ビブリオKoToLaを募集した。（推薦者数：2020年度14人・2021年度22人、推薦図書冊数：2020年度75冊・2021年度56冊）その他、寄贈が4冊あった。貸出利用の促進を図った（2021年度166回→2022年1月末199回）
（５）「外部資金」獲得のための支援体制を構築し、学内研究活動の促進を図る。	KTU研究開発推進センター	「外部資金」獲得のための支援体制のさらなる整備と充実 ・「外部資金」募集案内の全学的発信と、特に若手研究者に対する応募書類の校閲と加筆修正のアドバイス	本年度の科研費は申請19件に対して、5件が採択された。 本年度は科研費以外の外部資金の獲得も1件あった。 次年度もオールメールを活用し、外部資金の情報を全教員に広く周知していく予定である。
5　地域連携に関する計画 建学の精神のもと、「地域と歩みを共にする大学」として教職員・学生が一体となっ て以下の課題に取り組む。			
（１）大学の地域貢献 「子育て総合支援施設 KIT」「健康ふれあいフェスタ」「わいがやラボ」など地域交流の場を積極的につくるとともに、諸団体（地域団体・行政機関・企業等）との連携強化を図り、地域課題解決に向けた本学独自の教育研究活動を展開する。	神戸常盤地域交流センター	新型コロナウイルスの世界的な感染拡大の影響により「子育て総合支援施設KIT」「健康ふれあいフェスタ」「わいがやラボ」等地域交流の場が縮小せざるを得ない状況にあるが、コロナ禍においてどのように場を持つのかを検討し、地域と大学が繋がり続けるための企画を積極的に増やす。 ・子育て支援センター「ときわんノエスタ」を新たに開設し、既存の子育て支援施設とともに地域の子育て支援を行う。 ・「わいがやラボ」の利用促進を図るため、学生向け企画を開催する。（わいがやカフェ等） ・学生のボランティア活動推進のため、諸団体と連携した活動の企画を行う。（淡路市岩屋地区活性化プロジェクト、小豆島合宿、福島スタディツアー等）	新型コロナウイルスの感染拡大により、「健康ふれあいフェスタ」、「わいがやラボ」を活用したわいがやカフェ、「小豆島合宿」の実施を見送る結果となった。 しかし、コロナ禍における地域交流、地域貢献活動を模索し、下記の事業を実施した。 ・3施設目となる子育て支援センター「ときわんノエスタ」を新たに開設し、既存の子育て支援施設「神戸常盤大学子育て総合支援施設KIT」、子育て支援センター「ときわんモトロク」とともに地域の子育て支援に寄与した。 ・小豆島合宿の代替企画として実施した動画作成プロジェクト、淡路市岩屋地区活性化プロジェクト、新長田学生サポータークラブ等、学生による地域活動を実施した。 ・福島県双葉郡の「東日本大震災・原子力災害伝承館」等を訪問する福島スタディツアーを実施した。実施初年度は診療放射線学科の1期生11名が参加した。 ・ボランティア活動数　25件、ボランティア活動者数　218名（前年度実績：ボランティア活動数　8件、ボランティア活動者数　152名）
（２）多文化共生 多文化共生推進のためのワークショップ、シンポジウムを開催するとともに、学生参加プログラムとして国際保健室活動などの正課内外への組み込みを検討する。また、外国にルーツを持つ子どもたちが安定した生活を築くロールモデルの確立を図る。	神戸常盤地域交流センター	多文化共生社会の実現に寄与する活動を企画・運営する。 ・新長田南地区に移転予定の神戸国際コミュニティセンター（KICC）等と連携し、多文化共生に関する地域課題の発掘、それに対して寄与できる活動を企画・運営する。（日本語学習者への健康支援、外国にルーツを持つ子どもへの日本語学習指導等）	多文化共生社会の実現に寄与するため、、下記の事業を実施した。 ・神戸国際交流センターにて、神戸常盤大学多文化研究チームとの連携のもと、在日外国人を対象とした国際保健室を2回実施した。 ・神戸国際交流センターと協働して、神戸市長田区に住む外国にルーツを持つ子どもを対象とした日本語学習事業の企画・準備を行った。（令和4年5月～実施）
（３）公開講座（生涯教育） 履修証明制度を導入するなど、社会の多様なニーズに合った生涯教育の体制を体系的に整備するとともに、本学知財のさらなる可能性を探る。また、高大連携事業の一環として高校生向けのイベントを計画する。	神戸常盤地域交流センター	公開講座については、すでに昨年度より取り組みを強化しているオンデマンド配信による講座を積極的に活用し、高齢者を中心とした企画以外に新たな年齢層を取り込める企画を提案する。 ・対面・オンデマンド、年間20本以上の公開講座を実施するとともに、すこラボや KIT 等学内組織と連携した講座を企画する。	地域住民へ生涯学習の場を提供するという目的のもと、対面で開催できたものがKITでの2講座、オンライン開催18講座、中止が4講座。また、前期公開講座には「芸術文化論」の特別聴講も複数組み入れているが、新型コロナウイルス感染症の影響を考慮し、本年度は、2講座を開催した。
（４）インナーブランディング 建学の精神に基づく地域活動の充実と学内の理解の一層の深化のための仕組みづくりを行う。教職員・学生がアクセスしやすい地域交流・社会連携活動情報サイトを構築するなど、各自が「ジブンゴト化」できる活動環境を整備する。	神戸常盤地域交流センター	教職員・学生に本学の地域交流・社会連携活動を周知するための広報活動を行う。 ・インナーブランディングの確立のため、学内向け地域交流・社会連携活動情報誌「社会連携だより」を発行する。またいつでもアクセスできるようポータルサイトの作成を検討する。	コロナ禍の状況もあり、「社会連携たより」の発行も1回と、停滞してしまったことが反省点である。 地域再生大作戦事業の助成を受け、本学学生が「岩屋おさかな散歩MAP」を作成、学内のみならず様々な場所で配布されており、本学の活動のアピールにつながったと考えている。 また、昨年度はノエビアスタジアム神戸が神戸市の新型コロナウィルスワクチンの大規模接種会場になったため、本学「ときわんノエスタ」を活用したキッズスペース（一時預かり）を神戸市から業務を受託。様々な場面でこの活動が取り上げられた。 託児スタッフとして、こども教育学科学生もアルバイトで参加した。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
（５）防災・減災教育 学生・教職員を対象とした防災訓練を行うなど防減災活動を実施するとともに、地域において防減災に関する知識を啓発していく。全学生が取得する市民救命士の資格を基礎に、地域活動に関する新たな学内認定資格の創設を検討する。	危機管理（災害）委員会）	消防訓練の実施 教職員の消防(防災)訓練を実施する。 長田消防署の協力を得て企画する。 健康フェスタが開催される場合には、併行して実施する。 ＊ 新型コロナウイルス感染の状況で、開催が困難な場合を想定し、別途開催の可能性を検討する。	消防訓練については、令和3年度に学生消防団と長田消防署の協力のもと危機管理委員会を中心とした防火訓練を実施した。 健康フェスタ等学内イベントがコロナ禍で中止となり、同時開催とはならなかった。 避難訓練についは、3月に在学生、4月に新入生の避難訓練を実施することが出来た。 その内容は、防災マニュアルの配布と説明、避難経路を実際に確認するなど災害時の対処方法について説明を行った。 全学的な避難訓練の実施向けて今後の更なる検討が必要となる。
	神戸常盤地域交流センター	地域における防災減災啓発のための取り組みとして、長田消防署と連携した学生による啓発活動の検討を行う。	・危機管理委員会（災害委員会）、長田消防署、長田消防団と連携し、学生消防団員による初期消火デモンストレーション、体験会を実施した。
6　国際交流に関する計画 学生のグローバル共生の意識を高め、また国際貢献を担う人材を育成することを目的 として、以下の課題に取り組む。			
（１）ネパール交換研修プログラムの充実 22年間におよぶネパールとの研修生交換事業のさらなる発展を目指し、短期研修プログラムの系統的な作成と効果的な実施に取り組む。	国際交流センター	本年度の実施が困難となった場合、次年度実施に向けて、ネパール交換研修生のニーズに合ったプログラムの検討を行う ・本年度の実施が困難となった場合、次年度以降の派遣と受け入れの時期、内容の検討を行う。	ネパール交換研修プログラム実施についての検討 COVID-19の影響により、2021年度のネパール交換研修は中止とした。昨年度の方針を踏襲して、2022 年度に実施可能となった場合は本学の派遣より再開し、翌年受け入れと順次変更していくことを決定した。
（２）国際交流プログラムの実施 ①　海外学生派遣プログラムとして「国際保健医療活動II」（ネパール・米国）を開講するとともに、本科目を「大学コンソーシアムひょうご神戸」の参加大学に開放する。	国際交流センター	本学で実施されている海外渡航を伴う国際交流プログラムの本年度の実施計画を把握し、次年度以降の実施支援に必要な情報収集、並びに方向性の検討を行う ・大学コンソーシアムひょうご神戸に開放している「国際保健医療活動II」に関して、国際交流員委員会副委員長校副委員長校として、設定目標の改善の必要性などについて、コンソーシアム側にフィードバックを行う。	海外渡航プログラムに関する情報収集・方向性の検討 大学コンソーシアムひょうご神戸の国際交流員委員会副委員長校として、（オンライン）会議に参加し、設定目標改善の必要性などについて、コンソーシアム側にフィードバックを行った。コンソーシアムは将来的な課題と認識し、検討を行う事となった。
（２）国際交流プログラムの実施 ②　「異文化体験」等をテーマとした各種国際交流プログラムの実施を通して、学生がグローバルな視点から共生の意識を持てるよう支援する。	国際交流センター	１．学生のグローバル共生の意識を高め、また国際貢献を担う人材を育成するために資する学内実施国際交流プログラムの検討を行う ・ネパール交換研修の本年度の実施が困難となった場合、昨年度に引き続き、「ネパール交換研修オンライン勉強（OSEP）」を、より学生が参加しやすい形式を検討のうえ、実施する。 ・学内実施国際交流プログラムとして実施可能なものを選定し、実施する。 ２．次年度新設予定の基盤教育科目「国際理解」の内容策定を行う ・「国際理解」のシラバス作成を行う。	１．学内国際交流プログラムの実施 ・ネパール交流会 COVID-19の影響によりネパールに渡航しての交流は中止となったが、22 年以上に及ぶ貴重な交流を継続するため、さらに在日ネパール人や他組織との連携を行うため、2月22日に「ネパール交流会」を本学と包括協定を結んでいる神戸国際コミュニティセンター（KICC）と共同で開催した。交流会は対面で行いながら、オンラインでネパールとつなぐハイブリッド形式で行った。内容も、学生がより参加しやすいプログラム内容とするため、参加学生が中心となって計画、実施した。 24名（内訳：学生5名、在日ネパール人3名、KICC4名、一般2名、本学教職員10名）の対面参加があり、日本とネパールについてクイズや両国の踊りなど行い交流を深めた。参加学生のアンケート結果によると、「ネパールの学生と繋がって嬉しかった」、「国の文化の違いを知ることができた」、「もっと様々な国の方と交流したい」など意見があった。 ・ネパール語勉強会 12月20日に在日ネパール人による「ネパール語勉強会」を開催した。参加学生（7名）はネパール語の日常会話やネパールの民謡、文化などを意見交換を行いながら学習した。 ２．基盤教育科目「国際理解」開講に向けての準備 2022年度から基盤教育分野「国際理解」を新規に開講するにあたり、各回の内容・担当者を決定し、シラバスを作成した。 その準備のために、サブチームで【・対面会議3回・ビデオ会議1回・10月から3月の期間、継続的にメールによる会議・ゲストスピーカー候補者との折衝3名×2回】を実施した。
（３）「国際交流センター」の充実 国際交流関連情報にアクセスできるセンター機能の充実を目指し、多言語・多文化に関心を持つことのできる資料の整備を進める。	国際交流センター	センター機能の充実を目指し、多言語・多文化に関心を持つことのできる資料の整備を進める ・本年度重点的に整備を進める言語、文化を設定し、それらの関連資料の調達・整備を行う	センター機能の充実 国際交流センターは現在、すこラボの一部を使用している。資料の利用を図るシステムをどのように構築すべきかが不明であったため、今年度は書籍等の資料購入は見送った。次年度設置場所等の調整を行ったうえで、進めていくこととした。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
7　自己点検・評価に関する計画			
（1）自己点検・評価の継続、及び第三者評価機関等による評価を実施し、それらの結果に基づき、内部質保証システムを効果的に機能させ、大学運営の改善につなげる。	自己点検・評価委員会	第三者評価（機関別認証評価）受審の準備を円滑に進め、本学の自己点検上の課題を明確に認識する。 ・大学（日本高等教育評価機構）：「自己点検・評価報告書」作成、および評価機構の現地調査を受け、その結果を大学運営の改善につなげる。 ①各担当が点検項目ごとに記載し、各基準責任者が修正加筆等を行い、報告書原案を作成する。 ② 原案を、認証評価準備委員会のLO、委員会委員長を中心に推敲し、5月の運営会議に提出、審議を経て日本高等教育評価機構に提出する。 ③ 11 月　現地調査を受ける	第三者評価（大学）：日本高等教育評価機構による認証評価（第三者評価）を受審した。6月に「自己点検評価書」・エビデンス集を提出し、11月18-19日にオンラインによる実地調査（大学関係者・学生との面談）が実施された。3月に「適合」との通知を受け、総評として「使命・目的及び教育目的の達成のために教育課程編成、教育研究組織、学修環境及び学修支援体制を整備しており、「いのち」を心身両面から支える専門職業人を育成している。教学マネジメントは、学長のリーダーシップを支える組織が構築されている。経営・管理と財務は、経営の規律と誠実性が維持され、責任と権限を明確にした運営をしている。内部質保証は、「大学中期実行計画」に基づく自己点検・評価、年次報告書による自己点検・評価、学生アンケート、学修成果のアセスメントなどを実施し内部質保証に努めている。」との評価を得た。優れた点としてはPCR検査センター、キャリアディベロップメント・アドバイザー、FAST、私立大学等総合支援事業等の補助金獲得への取組が取り上げられた。改善を要する点としては、一部の規程に関して整備が必要であるとの指摘を受けた。これらについては、今後早急に改善する必要がある。
（2）着実な評価の継続・向上のために研修会の実施等を含め、学内の評価風土を高め、エビデンスや評価指標の設定を重視したより客観的な評価の実施を行う。	自己点検・評価委員会	１．「第1期中期実行計画の評価サイクル」に基づき、外部委員を含む中間評価組織体制及び評価内容を確立し、実施する。 1）対象A組織（関連する組織等）について中間評価（「自己点検評価報告書」の作成と学外公表の実施）を行い、4年後の最終評価につなげる。 2）上記に関して、「中期実行計画点検評価組織（仮称）」を設け、点検評価を行う。 3）対象B（関連外の指定する組織）8組織にの活動報告を「年間活動報告書」として報告する。 ２．「第1期中期実行計画」に基づき「各組織の活動計画」を全学的に俯瞰し、年度進行過程で評価しつつ効果的な目標達成への活動につなげる。 　上記活動計画は、「令和3年度　各組織の活動計画一覧表」として、学内公表する。	1．「第Ⅰ期中期実行計画(令和2~令和5年度)に基づく点検・評価」の体制構築のため下記の活動を行った。 1）対象A組織（関連する組織等）：活動報告書の様式を、従来の組織・年度単位から中期実行計画単位に変更し、中期実行計画の項目ごとに組織間の関連や、年度をまたいだ活動計画・活動報告の流れが一覧できるようにした。この様式を用いて、令和3年度活動報告と第Ⅰ期中期実行計画中間報告の作成を依頼した。 2）「中期実行計画点検評価組織（仮称）」の設置は、次年度に行う。 3）対象B（関連外の指定する組織）の活動報告書も、年度をまたいだ活動計画・活動報告の流れが一覧できる様式に変更し、報告書作成を依頼した。 2．令和3年度「各組織の活動計画」は9月に運営委員会及び教授会で報告し、全学的に俯瞰できるようにした。 ＜自己評価＞「第Ⅰ期中期実行計画に基づく点検・評価」については、委員会で議論を重ね、新しい報告書様式を策定できた。「令和3年度各組織の活動計画」は4月に作成を依頼したが、提出の遅れ等により全学での共有が遅くなった。次年度からは活動計画も新しい様式で提出を依頼するため、今年度より早く情報共有ができる予定である。
（3）大学運営のPDCAサイクルを着実に機能させ、学長のもとに設置されている「ときわ教育推進機構」や「IR推進室」等との連携において、評価の質向上と評価方法の改善につなげる。	自己点検・評価委員会	従来の点検評価活動の見直しと充実を図る。 ・年次報告書の共有 ＊授業評価における「改善策の活用」は、データを各学科へ送付したものと合わせて学科で検討し、本年度の記述内容の留意点等の検討をする。 ＊「計量テキスト分析・テキストマイニング」によるデータ分析結果と学科内での活用及びＦＤへと連携の現状を把握し検討する。 ＊ 卒後評価は、就職先へのアンケート内容を検討し実施する。 以上の検討をもとに本学の大学評価に関して、関連組織（入試・広報・法人企画課等）との連携を図り、積極的な広報活動に繋げる。	1．根拠に基づいた点検・評価を実施し大学のPDCAサイクルを機能させるため、下記の活動を行った。 ・「令和2年度年次報告書」（年間活動報告書）の学内共有および社会への公表 ・「令和3年度年間活動計画（組織）」作成依頼および学内共有、「令和3年度年間活動報告書（組織、教員個人）」作成依頼 ・「授業の中間アンケート」実施依頼 ・「学生による授業評価」実施、評価結果の教員へのフィードバック、解析結果の学科へのフィードバック、 　「授業評価報告書」（学科長宛て）作成依頼、「学生へのメッセージ」作成依頼と学生への公開 ・卒後評価実施（卒後1年目の卒業生およびその就職先）と結果の学科へのフィードバック ・点検・評価の活動内容をマニュアル化し、委員会メンバーで共有した。 2．点検・評価を、より根拠に基づいたものにするため、IR推進室との連携を深めて「年間活動報告」「第Ⅰ期中期実行計画中間報告」の根拠データの提供を受ける体制を整えた。 ＜自己評価＞年間活動計画・年間活動報告書の作成および情報共有、授業評価・卒後評価実施とフィードバックは予定通り実施できた。委員会活動のマニュアル化と共有により、今後より計画的な点検・評価の実施につながると考えられる。また、IR推進室との連携も深めることが出来た。
8　学部・学科の特色に向けての計画			
保健科学部 医療検査学科			
①臨床検査に必要な知識・技術に加え、人間性のさらなる向上を目指した教育を実施するとともに、社会貢献に資する教育・研究を実行する。	医療検査学科	教育及び研究の社会還元 1）地域交流センターの行う公開講座「サルビア講座 」にて、一般向け講演 2）学内外で実施される臨床検査啓発活動への協力 3）学外での各種専門学会を通じた知的・人的貢献	社会貢献として学科教員が理事として日本臨床化学会、日本臨床検査学教育協議会、日本臨床検査同学院、日本臨床細胞学会近畿連合会、兵庫県臨床細胞学会、兵庫県細胞検査士会、兵庫県臨床検査技師会、評議員として日本臨床検査医学会、日本臨床細胞学会、日本医療検査科学会、生物試料分析科学会、日本生理学会などの臨床検査に関連する専門学会等で役職を務めている。また、兵庫県精度管理専門委員、独立行政法人環境再生保全機構石綿健康被害救済部　中皮腫細胞診実習研修会、中皮腫細胞研究会　副代表幹事、LBC (Liquid based cytology) 研修会 in 滋賀実行委員長 兵庫県臨床検査技師会　学術部管理運営研究班班員等を学科教員が担当した。これらの社会貢献は学科教員の研究内容が活かされており、臨床検査に必要な知識・技術だけでなく、人間性の向上にもつながり学内教育に反映させている。
②平成29（2017）年度に開始した新カリキュラムの学修成果を検証し、その結果を基に、当分野での多様なニーズに応じた教育システムを構築する。	医療検査学科	新カリキュラムの構築 1）202 年 4 月入学者から適用される臨床検査技師教育内容に合わせ、2017 年 から開始したカリキュラムの変更を行う 2）新しい臨床検査技師教育内容に関する学科内 FD の開催 3）上記を系統だって行えるよう、学科内での情報共有	2022年度からの新カリキュラムでは国家試験受験のために7単位増加することに伴い、2017年に改正したカリキュラムをカリキュラム委員会及び教務委員会を中心に見直した。2017年に改正したカリキュラムの良い点を継続し、科目の開講年度及び時期を改正するだけでなく、令和3年に法改正で臨床検査技師の業務拡大された内容も組み込み、臨床検査分野での多様なニーズに応じた教育システムを構築できた。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
③キャリアサポーターによる勉強会」の充実。当勉強会は年齢が近い講師（卒業生）による講習であり、学生にも好評であることを鑑み、講師数の増加と講習内容の拡充のために、学科としての関わりをさらに深くする仕組みを構築する。	医療検査学科	新型コロナウイルス感染予防に対応したキャリアサポーター勉強会の実施 1）新型コロナウイルス感染予防に対応したキャリアサポーター勉強会の支援 2）在学生に対しキャリアサポーター活動の広報	就職委員を担当する教員が主となり、卒業生の予定を調整しながら実施した。新型コロナウイルス感染症予防のため、土曜に開催した勉強会の内容をBLSキャリアパス、臨床検査入門などの授業に取り入れ、学生へ広報活動を積極的に行わずとも参加できるように工夫した。
④卒業生を中心に、社会人を対象とした次の二つのリカレント教育を構築する。 ・臨床検査現場にも本格的に導入が進んでいる遺伝子及びゲノム医療などに関する基礎的な講義を通し、学生時代に同分野の授業を受けなかった社会人への座学的なリカレント教育。 ・超音波検査分野での知識・技術の向上を目指す社会人を対象とした実習的なリカレント教育	医療検査学科	リカレント教育教材のデジタル化 1）社会人を対象にしたセミナーを開催し、リカレント教育にむけた教材作成 2）新型コロナウイルス感染予防に対応できるよう、リカレント教育教材のデジタル化の推進	2020年度の経験を元に、対面でのリカレント教育が行えないことを想定し、以下のデジタル教材の作成を行った。 消化管エコー動画の作成 ・腹部食道、胃、十二指腸、小腸、虫垂、大腸について日本超音波学会の基本走査法に従い、手順内の消化管エコーの観察を行った。 ・各臓器の観察方法についてVTR内にスライドショーを実施し、ナレーションを加えた。 ・下痢、腹痛で来られた急性腹症の患者を想定し、キャンピロバクター腸炎についてナレーションを加え、消化管エコー検査の動画マニュアルを作成した。 頭頸部動画マニュアルの作成 ・甲状腺、唾液腺、頸部リンパ節について、日本超音波診断の基本走査法に従い、手順内の頭頸部エコーの観察を行った。 ・頸部リンパ節については正常範囲内に現れる反応性リンパ節について、形状・境界・縦横比・リンパ門の有無など、頸部の位置別に本学生80人の検討を加えた。 ・観察方法についてもVTR内にスライドショーを実施し、ナレーションを加えた。 ・異常所見についてはバセドウ病患者を想定し、甲状腺機能亢進症についてナレーションを加え、甲状腺・唾液腺・頸部リンパ節エコー検査の動画マニュアルを作成した。
保健科学部 診療放射線学科			
①アドミッション・ポリシーに基づいて迎え入れた学生を、ディプロマ・ポリシーに掲げている、優れた診療放射線技師として育てる。そのために、カリキュラム・ポリシーに基づいて作成した教育プログラムを展開する。同時に、遅滞なくそれを評価し、評価結果は速やかに学生教育に反映させる。	診療放射線学科	１．コロナ・ウイルス感染症の動向をみながら開設 2年目を迎えて、基盤教育の充実とともに診療放射線技師の専門教育を行う。学生の探究心・研究意欲に応える教育を行うとともに、国家試験対策を強化する。 ・学生の探究心に応える とともに、将来の発展に耐えられる教育を行う。 過去の国家試験問題の整理・分析・改変等により、国家試験対策を強化する。 ２．コロナ・ウイルス感染症の影響を最小限に抑えるよう、関連部署との連携を強化する。 ・ コロナ・ウイルス感染症に関して、関連部署との連携の下、学生を指導する。 ３．学内実習に必要な備品を整備する。 ・学内実習に必要な備品の整備を遂行する。 ４．2022年度も優れた入学生を確保する。 ・過去の入学試験の形態・時期などを分析し、2022 年度入学試験に備える。	2021年度の新入生85名を2期生として受け入れ、2学年の体制となった。コロナ・ウイルス感染症拡大等の影響で、学修が思うように進まない学生が比較的多くみられた。欠席が多い学生や不安を抱えている学生については定期的に調査し、学科会議などの場で学科教員全体が情報を共有するとともに、キャリア支援課、学生相談室とも連携しながら対応した。学生の成績を詳細に把握し、特に1期生については、必要とする学生に必要な科目の補習を実施した。特に成績が低迷している学生については三者面談を実施した。さらに、各学生の学修に関して進捗と低迷の原因の分析を試み、学修状況に合わせて個別対応にて学習支援を行った。入学試験においては引き続き厳正な試験を実施し、2022年度新入生として88名の新入生を選抜した。入学試験が選抜試験としての機能を発揮しており、アドミッション・ポリシーに沿った学生を受け入れることができた。診療放射線技師免許等の資格取得に向けて、第1期生に向けて本格的な国家試験対策を開始するための準備を行った。まず、国家試験までのスケジュールを想定して、模擬試験や対策講座といった国家試験対策を計画した。また、国家試験対策の前段として、すでに履修が完了した国家試験科目については、実力試験を2回実施し、現状での学力を把握し、効果的な国家試験対策に繋いでゆくデータとした。2022年度秋から始まる臨床実習に向けて、準備を始めた。同じく次年度から始まる就職活動に向けて、就職情報の収集を行ったり企業関係者との意見交換の場を設けたりする作業を始めた。診療放射線技師とは別の国家資格である放射線取扱主任者の資格取得を勧めており、希望者には受験対策講座を開いた。
②短期大学部を含めると、多様な医療系および教育系の学部・学科を擁した本学の特徴を活かして、基盤（基礎）教育を推進する。	診療放射線学科	コロナ・ウイルス感染症の動向をみながら開設2年目を迎えて、基盤教育の充実とともに診療放射線技師の専門教育を行う。学生の探究心・研究意欲に応える教育を行うとともに、国家試験対策を強化する。 ・診療放射線学科の教員が担当する基盤教育科目の中で、「専門」の内容を意識しながら「専門」にとらわれない基盤教育を考える。	本学教育の特徴である「基盤教育」のなかで他学科学生との交流・連携が進んでおり、多職種連携教育の起点として有用である。また、教員間でも基盤教育を通じてさまざまなノウハウの交換を行っており、教育・研究両面で有意義なものになっている。
③地域医療機関との共同研究を推進する。	診療放射線学科	教員の研究環境を整備する。 ・教員の研究環境（設備・備品・人）整備に努める。	共同研究を開始するために必要な設備や備品は各教員が前職から引き継いだものが多く、本学の設備等は十分とは言えない。今後の研究環境の改善に向けて計画的な整備が必要である。また、本学で整備できない大型機器等については、近隣の医療機関との連携や共同研究の推進で達成する必要があるが、地域医療機関への訪問も制限されているためコミュニケーションが十分構築できていない。
④本学の地域貢献事業やボランティア活動に積極的に関わっていく。	診療放射線学科	本学の地域貢献事業やボランティア活動に、引き続き積極的に関わってゆく。 ・地域貢献事業やボランティア活動に、学生・教職員とも引き続き積極的に関わってゆく。	コロナ感染拡大に伴い、ボランティア活動および地域貢献活動は大幅に縮小、もしくは中止となった。そのような状況の中、原子力発電の事故による放射能汚染に苦しむ福島県を訪問するスタディツアーを実施した。この福島スタディツアーでは、事故より11年経過した現在の状況を知るとともに、これまでの経緯を学習し、放射線の安全管理や原子力災害に対する診療放射線技師の役割を再認識することを目標とした。ただ、残念なことに、訪問当日に震度6の地震が発生したため一部活動が中止となった。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
保健科学部 看護学科			
①地域に開かれた大学としての使命を果たすために、豊かな知性と感性を備えた専門職業人の育成に向けたカリキュラムの現状（基盤教育の推進を含む）を検証する。	看護学科	カリキュラム検討プロジェクト （中期目標１．２） 昨年度末にカリキュラム検討プロジェクトで検討した、改正カリキュラムを、９月末の申請に向けて整える。 ・前年度までにカリキュラム検討プロジェクトで検討してきた教育内容を改正カリキュラムの申請に向けて準備する。 1） ６月の運営委員会での承認に向けて申請書類の準備を進める。 カリキュラム検討プロジェクト委員を中心に、教務課・法人・学科教務委員等と連携し、準備を進める。 2）9 月の申請に向けて準備を進める。 3）改正カリキュラムの運用についてカリキュラム検討プロジェクトを中心に検討を進める。	２０１９年度より発足した「改正カリキュラムの検討に向けたワーキンググループ」を中心に具体的なカリキュラムについて検討してきた。その後「カリキュラム検討プロジェクト」として、2021年度文科省への申請手続き向けて準備を進めた。教務課、教務委員会とも連携し、2021年８月の理事会、10月文科省へ申請することができた。
②国が示す「地域包括ケアシステムの構築」を受けて、チーム医療・多職種間共同を図り、病院・施設看護はもちろん、在宅系サービス、地域における生活支援・介護予防等の実践力育成のための看護の基礎教育内容を検討する。	看護学科		改正カリキュラムでは「在宅看護」が「地域・在宅看護」となり、地域・在宅における看護の役割等について、基礎教育において強化することとなっている。本学科では２年次後期「地域活動基礎実習」を新設し、地域における対象者の課題や生活支援について、地域の中で学ぶこととしている。今後は2023年度開講に向けて学習の場や内容について、地域交流センターへ協力依頼しながら検討していく。
③在宅看護実践力の向上のために、卒業生を主な対象とするリカレント教育、また大学院を視野に入れた卒後教育のシステムを検討する。	看護学科	リカレント教育検討プロジェクト 在宅看護実践力の育成に向け、基礎教育での内容、卒後の育成内容を検討するために、「在宅看護実践力の向上に向けたニーズ調査」を実施する。 1）在宅看護実践力の育成に向け、基礎教育での内容、卒後の育成内容を検討するために、訪問看護師に向けたニーズ調査を実施する。 ①兵庫県内の訪問看護師にニーズ調査を実施（6 月） ②調査結果をまとめる。（12 月） ③基礎教育の内容・卒後の育成内容を検討する 2）卒業生に向け「在宅看護実践力の向上に向けたニーズ調査」を実施する。 ①卒業生（短期大学～4 大）の卒業生を対象に、リカレント教育の内容についてのニーズ調査を実施する。（6 月） ②調査結果をまとめる。（12 月） ③リカレント教育の方向性を検討する。（在宅実践力を含む）	1）「在宅看護実践力の向上に向けたニーズ調査」はR3年度テーマ別研究に申請し、調査に係る費用を確保し、11月より調査を実施。調査結果を分析している。今後は基礎教育での内容、卒後に育成する内容を検討。2）「卒業生を対象としたリカレント教育へのニーズ調査」もR３年度テーマ別研究に申請し、進めた。11がつより調査を実施し、現在分析中である。いずれも今後の方向性を見出すことまでは至らなかった。今後は引き続き結果の分析を行い、リカレント教育実施に向けて検討する。
④「地域拠点において看護学科が提供する all generations の健康支援に向けた実践モデルの検討」における平成30年度研究成果から、地域における健康課題が抽出されたが、その解決に向けた取り組みとして「まちの保健室」や「ＫＩＴ」での活動を中心に、地域の高齢者への健康相談・介護予防、子育て支援等、長田の地域に密着した健康支援活動を継続する。	看護学科	地域における健康課題プロジェクト （健康相談・介護予防・子育て支援） 「all generations 健康支援モデル」の試案の元に、「まちの保健室活動」「KIT での健康相談」の中で、健康相談・介護予防・子育て支援の内容を検討し、健康支援モデルの具体化を図る。（継続） ・看護学科が実施している「健康相談」「介護予防」「子育て支援」について、今年度実施の内容・方法を検討しモデル化の素案を考える。 ①健康相談 ・健康フェア―、まちの保健室活動（生活健康論実習で学生と共に実施、KIT の活用）での相談内容・要望等明らかにし、検討材料にする。 ②介護予防 ・輝はすいけの介護予防講座を含め、長田地域での介護予防活動の実態を探り、本学の役割を検討する。 ③子育て支援 ・健康フェア―、KIT・モトロクでの活動をとおして、長田区の子育てをしている母子の抱える健康問題を分析・検討する。また、発達が気になる子どもへの本学における支援を検討する。 ＊「all generations 健康支援モデル」の研究成果で得られた地域の健康課題 を視野に入れ、①・②・③を検討する。	地域における健康課題プロジェクト （健康相談・介護予防・子育て支援） 「all generations 健康支援モデル」の試案の元に、「まちの保健室活動」「KIT での健康相談」の中で、健康相談・介護予防・子育て支援の内容を検討し、健康支援モデルの具体化を図ることを継続した。「まちの保健室活動」はコロナ禍で本学で実施しているイベントが中止となったこともあり、本年度の活動はなかった。介護予防事業は、輝はすいけデーサービスでの会後予防講座を実施した。「子育て支援」はKIT・モトロクにおいて、長田区をはじめ地域の子育てをしている母親の相談を実施。母子の関わる健康問題について検討した。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
教育学部 こども教育学科			
①特色ある教育システムを次のように構築する。 ・本学他学科の特徴を取り入れ、医療的な知識を備えた保育士・幼稚園教諭・小学校教諭の養成を可能にするカリキュラムを検討する。 ・再課程認定後の新カリキュラムの検証に加えて、子育て支援施設KITおよび附属幼稚園との教育連携を強化し、現地での実践的活動を取り入れた授業計画および準正課でのプログラムを立案する。 ・教員採用試験の対策強化のために、教職支援センターと協働し、準正課での教員採用試験スケジュールの充実を図る。	こども教育学科	特色ある教育システムを構築する １．チーム力育成教育、こどもの健康教育、防災教育の 3 つのプログラムを本学独自の教育プログラムとして構築するために科目の整理、調 整を行う。 ・本学科独自資格「地域防災スペシャリスト」の科目連携を検討するとともに新たに設置した「防災教育実践演習」の科目内容を検討する。 ・保育者養成コースと教員養成コースの学生がともに学ぶ科目「チーム学校論（仮称）」保・幼・小連携（縦のつながり）、保育施設・教育機関と家庭および地域との連携（横のつながり）について学ぶ科目の検討。 ２．再課程認定後の新カリキュラムを検証し、子育て支援施設 KIT および附属幼稚園との教育連携を強化する。 ・昨年度はコロナ感染症蔓延の影響により、子育て支援施設 KIT および附属幼稚園との教育連携が思うように実施できなかったが、ワクチン接種後の状況によっては、当該施設での実践活動を取り入れた授業計画を立案する。 ３．教員採用試験の対策強化を図る。 ・教職支援センターと協働し、教員採用試験対策強化を図る。例年の試験対策に加えて、実施可能な試みを準正課活動として実施する。	特色ある教育システムを構築する １．チーム力育成教育、こどもの健康教育、防災教育の 3 つのプログラ ムを本学独自の教育プログラムとして構築するために科目の整理、調 整を行った。 ・本学科独自資格「地域防災スペシャリスト」の科目連携を検討するとともに新たに設置した「防災教育実践演習」の科目内容を検討した。 ・保育者養成コースと教員養成コースの学生がともに学ぶ科目「チーム学校論（仮称）」保・幼・小連携（縦のつながり）、保育施設・教育機関と家庭および地域との連携（横のつながり）について学ぶ科目の検討を行った。 ２．再課程認定後の新カリキュラムを検証し、子育て支援施設 KIT および附属幼稚園との教育連携を強化する、という目標を掲げたが、コロナ感染症の影響で実施できないこともあった。しかしながら、観察実習の場として、活用することはできた。 ３．教員採用試験の対策強化を図る。 ・教職支援センターと協働し、教員採用試験対策強化を図ることができた。具体的には春季セミナーの実施時期がコロナ感染症の蔓延時期と重なったので、例年対面実施を行っていたセミナーを遠隔実施し、学年を横断して実施することができた。
②地域と大学との連携強化を図るため、学部の専門性を生かした子育て支援活動（KITや附属幼稚園に通う児童、保護者、乳幼児への支援活動）に取り組む。	こども教育学科	地域と大学との連携強化を図るため、学部の専門性を生かした子育て支援活動に取り組む １．KIT を拠点として、こども教育学科が核となり、本学の教育と医療の専門性を地域に還元する。 ・本学教員の専門性をいかした講座を計画・実施する。 ２．附属ときわ幼稚園との連携を強化するため、KIDS クラブを開催する。 ・KIDS クラブを附属ときわ幼稚園で開催し、学科教員が講師を務めるなど、学部の専門性を生かした子育て支援活動に取り組む。	コロナ感染症の蔓延により、思うようには地域との連携を図ることはかなわなかったが、のべ13人の教員が関わり、9回、附属幼稚園でキッズクラブを開催することができた。またワクチン接種の会場となったノエビアスタジアムで幼児の一時預かりを実施するなど子育て支援活動を実施することができた。
③高大連携の強化を図るために、系列校（常盤女子高校）および協定校を中心として、高校生向けの授業や学生と高校生の交流企画を充実させる。	こども教育学科	高大連携の強化を図るために、系列校(神戸常盤女子校)および協 定校を中心として、出張授業や学生と高校生の交流企画の充実を検討する １．神戸常盤女子校との高大連携を強化する。 ・神戸常盤女子高等学校の本学見学会を実施する。その中で本学学生と女子高生徒との交流会を開催する。 ・神戸常盤女子校との連携協議会を実施する。 ２.協定校との出張授業を実施する。 ・鈴蘭台高校への出張授業を定期的に実施（大森学部長）。 ・入試広報課と調整の上、協定校との連携強化を検討し、出張授業を実施予定。	神戸常盤女子高との連携強化を図るために大学見学会、進路講座、出張授業、体験授業を実施した。またコロナ感染症の影響により人数を制限しての実施となったが、12／22（水）には学生と高校生が交流する第1回入学前オリエンテーションを実施することができた。

第Ⅰ期中期実行計画	該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
短期大学部 口腔保健学科			
①4 年制大学への移行を視野に入れ、次の課題に取り組む。 ・口腔衛生に適した優秀な学生を確保するため、一貫した 3 ポリシー（アドミッション、カリキュラム、ディプロマ・ポリシー）を検討するとともに、多様な入学者選抜制度を構築する。 ・豊かな教養と多様な技能を兼ね備えた歯科衛生士を育成するために、基盤教育及び専門教育を見直すとともに両者の有機的連携を図る。	口腔保健学科	１.資質の高い歯科衛生士を輩出することを図る。 ・資質の高い入学生を確保するために、多様な入学者選抜制度を構築する。 ・入試委員会と連携して広報活動を充実する。 （高大連携事業の継続、高校訪問の推進、グランフロント大阪・大学紹介ブースでの口腔保健学科紹介の実施、オープンキャンパスでの個別相談会の充実化など）・４年制大学１期生の定員確保に務める。 ２.豊かな教養と多様な技能を兼ね備えた歯科衛生士を育成するために歯科衛生士専門課程の教育カリキュラムの検証を行う。 ・教育内容を担保する学外臨地実習施設の確保に務める。 ・学外臨地実習における科目担当者の連携と分担について検討する。 ・歯科診療所と連携した学内臨地実習教育の充実化を図る。 ・リカレント教育と学部教育の連携による双方の教育の充実 ・リカレント生へのe ラーニング教育の検討	１.資質の高い歯科衛生士を輩出することを図るために ・４年制大学として資質の高い入学生を確保するために、総合選抜入試A、B、公募推薦入試、指定校推薦入試、共通テスト利用入試、前期入試、中期入試、後期入地、社会人入試、留学生入試などの多様な入学者選抜制度を導入した。 ・入試広報課や入試委員会と連携して、高大連携事業・高校訪問の推進、オープンキャンパスでの個別相談会の充実化などに取り組んだ。特に、今年度は大学への移行の周知と他大学との差別化について強調した内容を組み込んだ。加えて、学科独自の広報活動として、昨年実施出来なかったクランフロンと大阪・大学紹介ブースでのミニオープンキャンパスの実施や、夏季休暇中に兵庫県・大阪府・岡山県の高校100校を教員が訪問し、口腔保健学科４年制の説明と学生募集を推進した。しかし、定員70名のところ67名の入学者となり口腔保健学科1期制の定員確保は出来なかった。次年度にむけて定員確保が課題である。 ２.豊かな教養と多様な技能を兼ね備えた歯科衛生士を育成するために歯科衛生士専門課程の教育カリキュラムの検証について ・昨年度検討し選択した学外臨地実習施設に実習依頼をおこない、快諾を得たので実習施設は確保出来た。 ・大学の教育課程の学外臨地実習科目（9科目）の科目担当者を決定したので、次年度に科目間の連携と分担について検討する予定である。 ・今年度は学内歯科診療所でホワイトニング診療を実施したので、学内臨地実習教育の充実化が図れた。また、来年度に向けて一般歯科診療を実施する事になったので学内臨地実習教育の更なる充実について検討を行った。 ・リカレント教育と学部教育の連携については次年度の課代とする。 ・今年度よりリカレント生に対して学部学生の遠隔授業を視聴できるシステムの導入を行った。
②学生の学びの振り返りや実践力の強化、他者との関係を取り結ぶ姿勢を涵養するために、上級生による教育サポーター制を導入し、教員とともに下級生の学習支援を行うシステムを構築する。	口腔保健学科	学修成果として国家試験合格率が全国平均を上回り、100%を目指す。 ・現存する上級生による下級生への学修支援の充実化を図り、教育サポーター制導入にむけた検討を行う。	昨年度の課題であった「コロナ感染症予防策を取りながら成績不良者のカスタムメイド教育」については、年度当初より検討を重ね、①昨年よりも早期に成績不良者を抽出　②成績不良者のレベルに合わせたグループ分け　③zoomを使用した遠隔個人指導（受験日前2週間）を取り入れた対策を行なった。その結果、74名の在学生と4名の既卒生の合計78名は全員合格を果たした。もう１つの課題である上級生による下級生への学習支援については、現存の短期大学の教育課程では時間的に難しく来年度以降４年制の教育課程の中で教育サポーター制導入を検討する事とした。
③低学年からキャリア意識を高め、歯科衛生士という職種への理解を深めるための支援システムを構築する（キャリア教育の充実）。	口腔保健学科	キャリア意識を高め、歯科衛生士という職種への理解を深める。 ・現状のキャリア支援システムの充実 ①外部講師を招いてキャリアコンサルティング講演を計画する。 ②従来から実施している既卒生による職場の歯科衛生業務の紹介を拡大する。 ・職場体験実習（インターシップ）の実習内容の検討を始める。 ・キャリア教育充実に向けて専任教員の各種資格取得を推進する。	4年制教育への移行を見据えて、学科内に設置した就職委員会とキャリア支援課ならびに学生委員会と連携しながら活動を推進した。 ①3年生対象に国家資格キャリアコンサルタントを外部講師として招いて講演を実施した。 ②卒業生サポーターを招いて、「先輩の話を聞く会」を実施、また、多彩な職歴を持つ本学教員による体験談を実施、更に、企業で勤務されている歯科衛生士を招いての講演を企画し、多様な働き方について学生に理解を深める機会を企画した。複数名がオープンキャンパスで職場紹介を行った内容を、ご本人たちの承諾を得て、ビデオ編集して学生に紹介した。さらに、多彩な職歴を持つ本学歯科衛生士教員の体験談を講演形式で実施した。また、四大化に向けて、教育課程にインターンシップを導入することを決定し、協力企業を募集した。協力を得た企業に対して、今後、開始時期と内容について詰めていく予定である。さらに、学科内教員の数名がキャリア教育に関連する資格を取得した。
④口腔保健研究センタと連携した口腔保健に関する多彩な知的・文化的な生涯学習の拠点を形成し、現行のリカレント教育の拡充を図るとともに、地域イノベーションの創出等、社会貢献への取り組みを推進する。	口腔保健学科	口腔保健研究センターと連携した口腔保健に関する地域イノベーションの創出への取り組みを推進する。 ①地域イノベーションの創出への取り組み拠点であると共に、学内臨地実習施設である歯科診療所のハード・ソフト両面の整備・拡充を行う。 ②口腔保健研究センターの地域貢献事業や歯科診療所業務への教員の適正配置について検討する。	4年制教育への移行を念頭に、口腔保健研究センターにある、歯科診療所を拠点とした地域イノベーション創出として、大学生に対する歯科健診事業の充実を図った。その結果は、本学運営委員会で報告するとともに、内容の一部を学会発表ならびに兵庫県健康推進シンポジウムにて、本学学生が報告した。 ①新型感染症の影響で、学外での実習先確保が困難な中、歯科診療所での実習時間を増やした。 ②本学の子育て支援施設などと連携して、小児期の口腔に関する地域支援を「歯ッピー相談会」として実施した。また、年後半に歯科診療所の改修を開始し、併せて、歯科診療所での業務への教員の適正配置に関して引き続き県都を加えた。

令和3(2021)年度　年間活動報告【B組織】

2021(令和3)年度　年間活動報告		
該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
研究倫理委員会	１．研究倫理委員会への新たな申請様式に関する検証 昨年度の manaba での申請方式もこの 1 年で浸透することができてきた。一方、昨今増加してきた計画変更や公表審査等種々の状況を鑑み、審査における提出書類の様式内容を社会の変化に沿って洗練させるため、さらなる申請様式の更新を行う。 ２．e－ラーニング教材における倫理教育システムの導入の検討 e－ラーニング教材「科学の健全な発展のために-誠実な科学者の心得-」「el core」導入について本年度計画する。 ３．研究情報の公開（オプトアウト）について導入の検討 本大学においても他大学の状況や内容を鑑み、次年度より導入できるように検討する。 ４．令和 3 年 3 月 23 日告示の「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」に基づいた、教職員および学生が行う研究に関する研究実施計画及び研究成果に関する審査 令和 3 年 3 月 23 日告示の「人を対象とする生命科学・医学系研究に関する倫理指針」を確認し、教職員および学生の申請による研究計画および研究成果発表の倫理審査を施行する。加えて、学生からの申請によるものは各学科の学研委員会が審査し、研究倫理委員会に報告する。	【活動報告】 1. 研究倫理委員会への新たな申請様式について 申請書類様式1「実施計画申請書」のチェック欄に「研究倫理教育研修済み」を本年度8月より「研究倫理eラーニング（elcore) 受講済み」に更新した。 2. 研究倫理eラーニング（elcore)における倫理教育システム導入 2022年8月6日受講開始し導入した。 3. 研究情報の公開（オプトアウト）についての導入検討 他大学の状況を調査し検討会を開き、本大学においても導入を目指すことを確認した。 4. 教職員および学生が行う研究に関する研究実施計画及び研究成果に関する審査について 1）教員が行う研究に関する研究実施計画及び研究成果に関する審査 今年度は10回の委員会を開き、のべ23件の申請（医療検査学科5件、看護学科6件、こども教育学科2件、診療放射線学科0件、 口腔保健学科8件、通信制課程2件、再審査含む）に対して審査を行った。 審査の結果：承認20件、取り下げ1件、変更の勧告1件、不承認1件。 2）学生が行う研究に関する研究実施計画及び研究成果に関する審査 学生が行う研究に関しては各学科の学研委員会が審査し、研究倫理委員会に報告された。 5. その他 学生への研究倫理教育の実際について、それぞれの学科より教育状況の確認を行った。 【自己評価】 ・研究倫理eラーニングを導入することができたが研究情報の公開（オプトアウト）については継続して導入を目指す。 【今後の課題】 1）現在の「公表審査」の仕組みのあり方やルールについて検討する。 2）非常勤講師の研究倫理教育について検討する。 3）学生への研究倫理教育の実質化について検討する。
個人情報保護委員会	１．教職員全体の個人情報保護に関する研修会の実施 ・Web、ネットワークの活用の広がりにより研究教育活動における個人情報の取扱いは重要性を増している。更に新型コロナウイルス感染における人権・個人情報取扱いの課題の顕在化、遠隔授業の導入など、個人情報保護に関する環境は大きく変わっている。こういった状況をふまえた効果的な研修を行う。 ・必要性を鑑みながら個人情報研修会の開催を検討したい。コロナ禍での研修会開催は困難な点があるが、動画配信を含め準備を検討していきたい。 ２．現時点での各種個人情報ガイドラインの運用と検証を行う。 ・教育研究機関としての各種個人情報取り扱いガイドラインについて、問題点の整理、見直し点がないか検討を行う。	【活動報告】 １．個人情報取り扱いを学生に周知させる目的で、新入生個人情報取り扱い「同意書提出」を徹底した。 ２．各学科における学生個人情報取り扱い、取り組みについて意見交換を行った。 ３．個人情報保護委員会勉強会として教材「情報倫理デジタルビデオ小品集」（日本データパシフィック社）に関する勉強を行った。 ４．個人情報研修会開催を検討すべく個人情報保護委員会による研修ツールの検討を行った。「教職員のための情報倫理とセキュリティ 2021年度版」（日本データパシフィック社クラウドサービス）を委員会で学修した。また再度会議にて振り返り学修を行った。委員会での研修ツールとして有用と思われた。 ５．教育研究機関としての各種個人情報取り扱いガイドライン、セキュリティーポリシーについて他大学を参考に比較、問題点の整理、見直し点がないか検討を行った。 【自己評価】 １．新入生個人情報取り扱いは、各学科委員のご努力によりほとんどの学生から同意書が提出された。 ２．各学科の学生情報取り扱いは、情報共有、管理方法など各科それぞれ独自の方法があり参考となることが多かった。 ３．個人情報保護委員会勉強会として教材や講習会を検討することで、改めて最新の「情報管理」を学ぶことができた。成果として学科、部署においてセキュリティ対策に生かせると考えられた。今後も研修会開催は困難な点があるが、良い教材または講師が見つかれば、動画配信を含め準備を検討していきたい。 ４．「同意書提出」は入学手続き書類にまとめたり、オンライン化など効率の良い方法が他に考えられる。可能であれば次年度以降の課題としたい。

該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
ハラスメント防止対策委員会	令和2年度はコロナウィルス感染予防対策のため、対面による教職員研修会開催を自粛した。今年度は年度当初に Web 開催（DVD 視聴）にて教職員研修会を開催し、ハラスメント防止対策に関する啓発を促していく。上記目標を達成するために、ハラスメント防止及びハラスメント対応について、ハラスメント防止対策委員会規程・調停委員会規程・ガイドライン等の周知及びそれに基づく対応を学内に徹底していく。また、ハラスメント事案の発生に伴う学生や教職員からの相談及び解決までの手続き、等に関する方策の充実と円滑化を図る。 １. 新入生及び在学生のハラスメントに関する意識の向上を図る。 ・新入生及び在学生に対する学科オリエンテーション（4 月）にて、リーフレット配布及び学生便覧を用いて、ハラスメント防止への意識を啓発し、本学のハラスメント防止に対する相談窓口や方策等に関する認知を促し、ハラスメント防止意識の定着を図る。 ２. ハラスメントにかかる相談事案が生じた際には、守秘義務の範囲で、教職員に周知し、ハラスメント防止意識の向上を図る。 ・当委員会へ報告されたハラスメント事案について、守秘義務のもと学科会議等諸会議を通して報告し、全教職員への周知を図る。 ３. ハラスメント防止対策委員会規程・ハラスメント調停委員会規程・ハラスメント防止対策ガイドライン等に関して、学内への周知徹底を図る。 ①ハラスメント防止対策について教職員への理解を深めるため、教職員については過去の研修会 DVD の閲覧を含め、当該年度の研修によってハラスメント防止意識の向上を図る。 ②ハラスメント防止対策委員会規程・調停委員会規程・ガイドライン等の内容に基づき、毎月 1 回以上の定例委員会を開催し内容検討を図る。	各目標の達成に向けた活動報告 １）ハラスメント防止対策のためのリーフレット「キャンパスハラスメント防止ガイド」について、QRコードの記載、内容検討校正等を行い、更新したリーフレットを配布した。 2回生以上の在学生には、ハラスメント防止に対する意識定着を図るために、後期学科ガイダンス時に、各学科当該委員によるリーフレット配布及び説明等を行い、啓発を図った。新入生に対しては、入学時学科オリエンテーションにて、リーフレット配布及び学生便覧を用いて、各学科当該委員から本学のハラスメント防止に対する相談窓口や方策等に関する説明を行い、ハラスメント防止対策への認知と意識啓発への取り組みを行った。全学年学生に対して、本学HPにハラスメント対応に関するガイドライン等をアップしていることを周知し、確認するよう促した。 ２）ハラスメント事案が生じた場合、各学科のハラスメント防止対策委員へ相談いただきたい旨を学科ごとに周知した。その際、当該事案に関する守秘義務の徹底についても認知を図った。 ３）ハラスメント防止対策に関する教職員への理解を促すために、過去の研修会DVDの閲覧の推奨、及び、下記研修会を開催した。 ＜ハラスメント防止対策研修会　Web開催（研修参加保障のため、配信2回）＞ ①2021年4月26日（月）13：00～15：00 ②4月27日（火）13：00～15：00 4）ハラスメント防止対策委員会規程に基づき8回の定例委員会を開催し、ハラスメント防止対策に係る検討を行った。 5）自己評価 ①各学科当該委員から、「気軽に確認できることへの安心感が生じた」といった学生の感想について報告を受けることができた。また、本年度は、事案発生は0件であった。 ②これまでの数回に渡るハラスメント防止対策研修会を踏まえ、次年度以降、その内容に関する向上を踏まえた検討をしていく必要がある。 ③当該委員会の開催について、事案発生への機動力ある対応を念頭におきつつ、概ね月毎の定例委員会開催を想定しつつ、必要性に応じた委員会開催のあり方について検討していきたい。 ④ハラスメント防止対策に関する新たな知見の収集及び委員の質的向上のために、学外研修会等への積極的な参加について、参加可能な体制づくりを検討していく必要がある。
神戸常盤健康保健センター	１. 健康保健センターを通じて健康に関する重要情報を適宜発信する。 ２. 健康管理室と学生相談室の情報の共有化を図る。 ・ 新型コロナウイルスに対応した感染症対策マニュアルを学生、教職員に周知して感染予防に役立てる。 ・ 新型コロナウイルスにも対応して作成された体調不良学生への対応マニュアルを教職員に周知し学内発症者に備える。 ・ 新入生から回収した健康調査票を基に有病者や配慮を要する者をチェックし、必要に応じて面談を行い関係する教職員へ対処を依頼する。 ・ 定期健康診断実施時には学生が密にならないよう学科教員にも協力を依頼して感染防止対策を行う。 ・ 新入生の定期健康診断実施時にウイルス抗体価検査も行う。 ・ ウイルス抗体価検査結果・ワクチン接種情報を含めた学生の健康に関する情報を集約し、在学中はキャリア支援課で一元管理する。 ・ 健康に関する情報発信（健康保健センターニュースなど）をさらに積極的に行い、最近の学生の動向や傾向にも合わせる。 ・ オープンキャンパス実施時には医師あるいは看護師の資格を有する救護担当者を適正に配置する。 ・ 入学試験実施時には医師の資格を有する救護担当者を適正に配置する。 ・ 対面でのカウンセリング受診を不安に感じている学生のために、電話カウンセリングを実施する。 ・ 新型コロナウイルス感染状況を見ながら、「なごみのリラクゼーション」を実施する。 ・ カウンセリングルーム内の環境を利用しやすい環境に整える。 ・ 学生サロンの利用実態を把握し問題点を検討する。	1.健康管理室と学生相談室が中心となって、学生および教職員の健康維持・増進を支援することを目的に、定期健康診断の実施や健康診断書の交付、健康相談、けがや病気の緊急対応（一次対応）を行った。2022年3月末まで47名。 2.健康管理室と学生相談室との情報の共有化を一層図るため、健康管理室の健康調査、健康診断票、抗体検査、予防接種票と、学生相談室の入学後の保健室・カウンセリング室利用状況等の情報を一括管理することとした。 3.新入生への健康調査票を基に有病者や配慮を要する者をチェックし、入学必要に応じて面談して情報収集し、共有した。 4.新入生の定期健康診断は予定通り4月に抗体価検査を含めて実施、在校生の定期健康診断は3月に前倒しで実施した。その際、学生が密にならないよう指導するため学科教員の応援を求めた。2021年度の受診率は99%であった。 5.健康診断結果有所見学生に対して再検査受信勧告を行った。 6.学生委員会と共同で学生の感染症対策履行状況を確認するため学内見回りを開始した。 7.学生相談室では、カウンセリングルームを開設し、臨床心理士により2022年1月末の定期開室での利用は延べ105件、実人数25名の学生相談を行った。また、長期休業中に13件臨時開室した。 8.学生相談室委員の教員は学生相談サロンで学生相談に対応した。対応は2022年3月末まで延べ82件、実人数35名であった。 9.オープンキャンパスと令和4年度入試日には救護担当者として医師あるいは看護師資格を有する教員を配置した。

該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
すこラボ （健康生活研究所）	(令和3年度設置組織のため、年度当初の設定目標はない)	「すこラボ（健康生活研究所）」は、わが国の重要な健康課題について本学保健科学部の4つの学科で協働して取り組み、健康増進に役立つ情報の発信、研究、そしてその成果を教育に活かしていくことを目的とした施設として、令和３年４月に開設された。今年度の活動内容は以下である。 １．本年度の活動報告 １）定例委員会の開催（計９回） ２）すこラボ講座開催 本年度は、我が国の重要な健康課題である「糖尿病」をテーマに掲げ、保健科学部の８名の教員が協働して計３回の講座を実施した。 第一回「糖尿病と歯周病」～口の健康は全身の健康～ 講師：学部長 塩谷英之教授、口腔保健学科 高橋由希子教授、同学科 山城圭介教授、配信期間：2021年8月21日（土）～28日（土） 第二回「糖尿病と検査」～検査を正しく理解し健康管理～ 講師：医療検査学科 新谷路子教授、同学科 澁谷雪子講師、診療放射線学科 市川尚助教、配信期間：2021年12月11日（土）～25日（土） 第三回「糖尿病と看護」～食事療法とフットケア～ 講師：看護学科 生島祥江教授、同学科 阿児馨講師、配信期間：2022年3月17日（水）～31日（水） ３）すこラボライブラリーの立ち上げ すこラボ講座を３回実施することにより、延べ８本の糖尿病に関する教材が作成された。すこラボ開設目的のひとつである「成果を教育に活かす」ため、すこラボライブラリーを立ち上げ、教員へ資料として開放する。データの管理と貸し出しはIR推進室が行う予定である。 ４）科学研究費助成事業（科研費）への申請 看護学科、医療検査学科、口腔保健学科の３科で協働して令和４年度科研費申請を行った。 ２．自己評価 第一回、第二回すこラボ講座に関しては、視聴者の概ね９割以上から高評価を受けた。第三回は現在評価中である。次年度も４科で協働して健康増進に関する情報発信を行っていく。令和４年度科研費申請に関しては残念ながら採択されなかったが、次年度再考しチャレンジする予定である。
教職支援センター	１．一般・教職・専門教養の学力を強化する ・教職支援センター事務室による「学力把握テスト」の実施、解説を実施する。 ・東京アカデミーによる「教職・教養対策講座」、「基礎力養成講座」、「論作文・面接・討論対策講座」を実施する。 ・教職支援センター事務室による「学力把握テスト」を実施し、その解説も行っている。 ・「定例学習会」、「弱点フォロー勉強会」、「春季集中学習会」、「春季セミナー」等の採用試験対策を実施する。 ・自主学習会（E4 面接指導、E3 一般教養）を実施する。 ２．実技試験対策を可能な範囲（コロナの影響により）で、計画的に実施する ・専門教養「実技試験」直前対策を実施する（体育実技・音楽実技）。 ３．学びの常盤風土を促進する（含：異学年・異学科交流） ・昨年度は実施を見送った「養護教諭合格者座談会」を４/18（日）に実施した。小学校教諭「先輩激励訪問会」も実施予定である。また「現役合格者による教員採用合格者座談会」も実施予定である。課程内・外においても異学年、異学科交流の機会を設ける。 ４．子育て支援施設 KIT における活動の中で、小学校教諭としての自覚を喚起し、実践力の養成を図る ・カリキュラム内に KIT における実習を位置づけたので、その活動の中で小学校教諭としての自覚を喚起し、実践力の養成を図る。	１． ・「学力把握テスト（兵庫県・神戸市・大阪府の傾向を踏まえた出題）」を年 3 回実施及び解説 ・東京アカデミーによる「教職教養対策講座」、「基礎力養成講座」、「論作文・面接・討論対策講座」を実施 ・「定例学習会」、「夏季弱点フォロー勉強会」、「自主学習会」、「春季セミナー」（コロナ感染予防のためmanabaを活用し、遠隔実施）、「春季集中学習会」等の採用試験対策を実施 ・教員採用試験対策講座（EN1対象）遠隔学習コンテンツを作成し、manaba にて実施 ・自主学習会を実施　二次試験対策(個人面接・集団面接)（E4 対象）、一般教養（E3対象）を実施 ・11/4（木）「学内スタート模試」（E3 対象）を実施 ・1/5（水）「全国公開模擬試験」（E3 対象）を実施 2. ・専門教養実技試験直前対策講座（体育実技）を 6/18（木）、7/2（金）に実施 ・音楽は個別指導で実施 3. ・4/14（水）「神戸市教員採用試験説明会」を実施（昨年度は未実施、今年度はオンラインで実施） ・4/18（日）「養護教諭合格者座談会」を実施。（昨年度は未実施、卒業生も含め20名が参加（在学生13名、卒業生7名）） ・8/8（日）「先輩激励訪問」を実施。神戸市に勤める2名、兵庫県に勤める2名の卒業生が、二次試験対策として、教育現場の様子や、自らの教員採用試験への取り組み方について語ってくれた。11名の受験生が参加。 ・11/1（月）「受験対策説明会」（E3 対象）を実施 ・11/19（金）「小学校教諭合格者座談会」を実施。39名の学生が参加 ・11/25（木）「岡山市公立学校教職員募集説明会」をオンラインで実施 ・2/9（火）「小学校教員採用試験対策説明会」（E2 対象）を実施 4. ・「基礎研究演習Ⅰ」（1年必修科目）、「基礎研究演習Ⅱ」（2 年必修科目）、「保育教育課題研究Ⅱ」（3 年必修科目）において、KIT 内で実践学修を行い、小学校教諭としての自覚を喚起した。

該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
教職支援センター		【自己評価】 本年度は正規の小学校教諭として、兵庫県（1名）、神戸市（3名）、大阪市（1名）、岡山市（1 名）、和歌山県（1名）において、 7 名（うち 2 名は既卒生）が採用され、3 年任期付き教諭として 2 名が、岐阜県、神戸市に採用された。 今年度の課題としてあげた大学推薦枠を活用して、 4名が正規採用された（神戸市に 2 名、大阪市1 名、岡山市 1 名の計 4名を大学推薦）。 養護教諭の採用試験には、現役生は受験せず、過年度生3名が受験したが、1名が任期付き教諭として、採用された。養護教諭の採用試験は難関である。 小学校教諭受験者総数が13名と過去最少人数となった。来年度は約２０名と増加の見通しである。しかしながら、昨年度の正規採用小学校教諭 5名（うち 3名既卒生）の実績と比較すると合格者が増加し、現役合格者数も増えた。養護教諭採用試験については、昨年度は既卒生が3名合格したが、今年は現役受験者がいないこともあり、任期付き合格1名を除くと合格者は出なかった。小学校教諭採用試験に関して、二次試験合格者は昨年の14%、2名から大幅に改善され、過去2番目に多い、38%、5名と上昇した。引き続き二次試験の突破力養成に努めたい。昨年度同様、コロナ感染症の影響により、本学学生の強みである実技や面接が廃止されたり、場面指導等も規模が縮小されたりするなど、人間性や教員としての実践力を評価する比重が小さくなり、いわゆるペーパーテストで判断される学力重視の傾向が強まった。コロナ感染症の状況によっては、遠隔での採用試験対策の実施も継続し、対面実施でしか養うことができない能力についてもあわせて指導していく。またコロナ禍で様々な経験の機会が減少しているが、人間性を磨くボランティア活動や自然学校支援員等への参加を促す。
口腔保健研究センター	１．地域住民並びに職員・学生の口腔健康を維持・増進するために地域社会活動を充実する。 1)地域貢献事業部と連携して口腔保健活動に参加する。 ・はすいけ介護予防教室講演会（２回程度）を行う。 ・歯科相談（歯ッピー相談会）（KIT・もとろく施設・ノエビアスタジアム）を行う。 ・地域ボランティア活動（地域委員と協業、学生ボランティア活動を行う。 ・KOBETOKIWA 健康ふれあいフェスタへ参加する。 ・歯科医師会と連携できる体制を構築するための関係づくりに努める 2)歯科健診活動を行う。 ・神戸常盤大学附属ときわ幼稚園・神戸常盤女子高校ならびに本学新入生 へ実施する。 ２．歯科診療所の機能充実の継続と受診者増加への取り組みを継続して行う。 ・ホワイトニングを実施する。 ・定期的口腔衛生管理（歯のクリーニングなど）・口腔機能検査を行う。 ・受診カード（スタンプカード）を使用する（来所回数による特典付与）。 ・診療所利用に対する需要調査を実施す。 ・「口腔の健康を自ら管理できる口腔に自信のある学生を育てる」ことを理念として、入学時歯科健診の結果を踏まえた、歯科治療の推進と口腔衛生管理の継続のための呼び出しを実施する。 ・学生実習後の二次利用（継続利用促進）を検討する。 ３．リカレント教育における口腔保健研究センターの役割の明確化 ・リカレント教育の実践の場として、診療室内利用の実施に向けた検討する。	１．昨年度に引き続き、地域貢献活動の充実化と情報のワンストップ体制の確立を目指しました。一方、新型感染症の影響を受け、多くの学内活動ならびに地域活動が中止もしくは規模縮小となりました。下記に示す活動を、歯科診療所を通じて行いました。 ①：地域交流活動（本活動は地域交流センターから依頼のあった歯系活動も含みます） ・はすいけ介護予防教室講演会：1回（参加者14名）　　・KITでの歯科相談と指導：８回実施（相談者55名） ・モトロクでの歯科相談と指導：９回実施（相談者49名）　　・新規：ノエビアスタジアムでの歯科相談と指導：３回実施（相談者11名） その他に予定されていたイベントへの参加はすべて中止となりました。 ②：歯科健診 ・神戸常盤女子高：751名、　・神戸常盤大学附属ときわ幼稚園：37名、　・神戸常盤大学・短期大学部：417名、　・立花うるま幼稚園（尼崎）31名 ③：歯科診療所での教職員・学生・地域住民の定期的な口腔管理の実施 ・一般243名、学生315名、教職員88名、合計646名 ・ホワイトニング：昨年度の学生需要アンケートで第一位となったホワイトニングについて本年度はホワイトニングに関する施術のための準備を行い、モニター募集を開始し、6月より本格導入し、計48名の学内患者に施術した。（計：モニター25名、正規患者23名） ・歯科診療所活用のための需要アンケートを学生に実施（期間：9月16日から10月20日）：有効回答数461件 （診療内容希望：保険内診療部門：1位う蝕治療(146人)、2位智歯抜歯（74人）、3位歯周治療59人、自費診療部門：1位ホームホワイトニング（175人）、２位歯の健康診断（79人）、3位 歯科矯正(69人)）。 ・受診カード（スタンプカード）の利用（来院回数による特典付与）:2回はフロス、５回は砂時計、８回はデンタルセット：結果として計７０セットを配布した。 ２．の目標に対して今年度実施できた活動は以下の通り。 ・診療所用新規パンフレット作成　　・受診者に対するスタンプカードと来院回数に応じて特典を実施 ・歯科診療所の周知としてアンケート実施：有効回答数653件、診療所が利用できることを知らない割合が25%、学生の実習対象とされると感じている割合が7% ・学生実習の二次利用として診療所での継続的な利用促進の呼びかけを行った. ３．生涯教育に対するセンターの取り組みとして、今年度は4名のリカレント生が受講を支援した。今後、リカレント教育の実践の場として、口腔保健学科の4年制化に合わせて完成する歯科診療室での実習を計画している。併せて、次年度リカレント生の募集等リカレント担当者と検討し、次年度生には現役の学生と受講が可能なweb講義科目を選定した。

該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
子育て総合支援施設 KIT	１．開設 4 年目を迎え、事業の開催回数に関しては一定の水準に達しているので、活発な運営を行い、より地域のニーズに沿った開催を目指すなど、質の面でのさらなる向上を目指す。 ・新型コロナウィルス感染症の流行に伴い、事業実施にあたっては、昨年度同様、慎重な運営が求められている。そのため本年度も安全面への配慮を念頭に置きつつ、予約制・時間入替制を維持しつつ、地域のニーズに応じた内容で事業を実施する。 ２．ノエビアスタジアム神戸内に「ときわんノエスタ」を新たに開設。 他 2 施設でのノウハウを活用し、早い段階での安定した運営を目指す。 ・人的資源に関して、専任職員・施設スタッフとともに、大学の人的資源の活用も模索して、それぞれの特性を活かした運営を行う。 ３．利用者数に関しては、一定の水準に達しているので、本年度は満足度のさらなる向上等を目指す。 新型コロナウィルス感染症が継続流行しており、事業の開催には一定の制限があるため、利用者数を基準とした目標設定は行わない。その中で、利用者の満足度を向上させるために、より精選された内容での事業実施を目指す。 ４．運営コストも含め、本施設が安定的に運営できる体制の構築を目指す。同時に、施設の存在意義を高める取り組みを実施して、経費をかけることの意味を高める。 各種の補助金・助成金等の活用も模索して、可能な限り運営に必要となる経費を外部から獲得することを目指す。また、大学本体との連携を深めて、教育・研究拠点としての存在価値を高める。そうした取り組みを通じて、受験生に施設の存在意義を訴求して、受験者数の増加に繋げ、すべてステークホルダーからの認知度を高める。 ５．中長期にわたって取り組む課題 ◎外国にルーツを持つ子供たちも含め、地域の子どもたちの学びの拠点や子育て支援、地域支援の拠 ◎真に生きた知識・スキルの修得を目指す本学の医療系・教育系、全学生の学びのフィールドとして位置付ける。 ◎本施設で実施する学童や未就園児・保護者に対する教育や子育て支援に関する事業、地域支援に関する事業を、本学教員の研究対象やリカレント講座の場として位置付ける。 ・本年度も、新型コロナウィルス感染症の流行に対応した施設運営方法を模索し、何より安全面に配慮した運営を行うことが活動の中心となる。そのため中長期の課題に関しては、可能な範囲での取り組みを目指す。	コロナ禍という制約のあるなか、「子育てひろば」3施設は、年間を通して一時間毎の入替の予約制での運営であった。 各施設の運営状況は、次の通りである。 ※コロナの感染状況とそれぞれの施設の広さを考慮し、各施設時間毎の定員設定が異なる。 ■ときわんクニヅカ 2021年4月～2022年3月までの延べ利用者人数：10,934人　※N・O・E科の実習生含まず 開園日数：224日、1日当たりの利用者平均：48.8人 ■ときわんモトロク 2021年4月～2022年3月までの延べ利用者人数：7,583人　※N・O・E科の実習生含まず 開園日数：223日、1日当たりの利用者平均：34人 ■ときわんノエスタ 2021年4月～2022年3月までの延べ利用者人数：2,931人 開園日数：209日、1日当たりの利用者平均：14人 □てらこや（KIT）：2021年4月～2022年3月までの延べ参加人数：児童2,165人　ボランティア：632人 実施日数：186日、1日当たりの参加人数：11.64人【児童のみ】 □てらこやノエスタ：2021年4月～2022年3月までの延べ参加人数：児童613人 実施日数：111日、　1日当たりの参加人数：5.5人【児童のみ】 本年度の目標に対しては、それを超える活動が出来たと考えている。ときわんノエスタは、新規登録者が150組を超えており、順調なスタートであると考える。ときわんクニヅカ、ときわんモトロクは、昨年度に引き続き、看護学科、口腔保健学科の多くの学生の実習先としても活躍できたと考えている。てらこやノエスタについては、てらこや（KIT）との比較であるが、校区の狭さを考慮しなくとも上々の出来と感じている。また、ときわんノエスタにおいては、ノエビアスタジアウムが神戸市の大規模接種会場となり、受託業務としてキッズスペースを実施。実績は次の通りである。 □てらこや（KIT） 2021年6月17日～2021年11月30日月までの延べ利用者人数：964名、　運営日数：142日 2022年1月29日～2022年3月31日月までの延べ利用者人数：48名、　運営日数：58日 キッズスペースの運営については、様々な場面で取り上げられ、広報面で非常に良い効果があった。 年度末には、試験的にヴィッセル神戸のホームゲーム開催日にキックオフまでの4時間程度、キッズスペースを開催している。 中長期課題である「外国にルーツをもつ子どもたちの支援」については、神戸国際コミュニティーセンターと協定を結び、来年度よりKITと連携した学習支援にむけた準備を行った。

該当組織	本年度の目標と活動計画	年間活動報告及び自己評価
ライフサイエンス研究センター	１．生命科学研究、特に本学における唯一の遺伝子組換え設備を有するセンターとして、分子生物学研究、細胞生物学研究等を推進するための研究環境整備を行う。 ・必要備品・設備のリストアップを行う ・共通消耗品の利用状況共有システムの構築を行う。 ２．　生命科学関連分野の研究者（特に若手・学位取得を目指す者）への研究支援を行う。 ・ベクター、遺伝子発現コンストラクト、細胞株等の（共有可能なものに関して）共有システム構築を行う。 ・各種機器使用法、解析方法の共有システム構築を目指す。 ３．センター内外との共同研究の推進を図る。 ・本センター利用者間での研究情報等共有システムについて協議を行う。	１．ライフサイエンス研究センター（LSC）の研究環境整備 ・必要機器として、経年劣化しているクリーンベンチの更新と製氷機のリストアップを行い、これらを次年度備品として申請を行うこととした。 ・グローブ、エタノール等、また細胞培養関連等の共通消耗品の発注方法とそれらの納品場所を定めた。 ２．研究支援体制の確立 ・LSCに新たに共通コンピュータを設置し、LSC関連情報参照にアクセス可能なシステムを構築した。 ・LSC利用者の中で、希望する研究者にベンチスペースの配分を行った。 ・細胞保存用液体窒素タンクを増設した。これにあわせて細胞株の管理システムを共有フォルダ上に構築した。 ・LSCの主な機器の担当者を決定した。今後、各担当者を中心に当該機器のSOP整備を進めることとした。 ３．共同研究の推進 ・将来的な共同研究推進を目指すこととして、本センターの現在のアクティビティ調査を行った。 現在進行中の研究テーマ 「歯周病原細菌が誘発する炎症応答におけるフラボノイドの作用機序解明」「薬剤耐性淋菌の遺伝子解析」 「保育施設におけるオムツ処理規定モデルの構築」「フィブリノゲン生合成・分泌機序に関する研究」 「プレセプシンの産生機序の解明」「DSCR9 タンパク質の機能解明」 「サイトカインストームについて」「放射温度計によるCOVID-19判定ガイドラインと看護師の感染予防システムの開発」 「兵庫県登録衛生検査所の新設のための設備考案と運用法の模索および本学教員、学生対象および周辺者へのSARS-CoV-2遺伝子検査の実施と新規関連試薬R&D」 「遺伝子検査に必要な新技術（新規のPCR酵素やウイルス濃縮法など）の獲得と種々検査系への適応」 「ヒトスジシマカの胚樹脂標本作製」、「薬剤耐性細菌における耐性機構の解析ならびに新規抗菌薬の開発」 「マクロファージを標的とした輸血後鉄過剰症治療薬の探索」、「FIV感染ネコ由来の末梢血リンパ球に対するADCC作用について」 「新規熱帯疾患コントロールツールの開発」 論文発表：英文12報　和文2報、　学会発表：国内学会　15報、 獲得研究費：科研費　9件（研究代表者６　研究分担者３）　その他の研究費　3件、　特許：1件、受賞：2件 ・生命科学の共同研究のシーズ探索、ディスカッションの場として、LSC研究セミナーを2/24に開催した。演者はPCR検査センターの戸高眠氏に依頼し、「自己紹介と今まで関わってきた研究・製品開発について」の題で講演いただいた。15名の参加者が熱心にディスカッションを行った。
事務局	１．新型コロナウイルス感染症への適切な対応を講じた大学運営を図る ２．日本高等教育評価機構による第三者評価受審に向けた適切な対応を目指す	１．新型コロナウイルス感染症への適切な対応を講じた大学運営を図る 令和２年度より引き続き、学長を本部長とした新型コロナウイルス対策本部会議を述べ15回年度中に開催し、授業の実施方法や学生・教職員への感染拡大を防ぐ取組みについて、運営委員会・教授会と連携し決定する体制を執った。とりわけ、感染防止対策として実施された全学教職員による職域接種（大学拠点接種）については、各学科の臨地実習等を勘案し夏頃の比較的早期に実施した。これにより年度内においてワクチンの2回接種済者が90%に到達した。また、登録衛生検査所としてのPCR検査センターを設置し、その強みを活かし実習前の全学生を対象にPCR検査を実施してから学生を実習先に送るなど、実習先からの信頼を得る形で本学学生の学修機会の確保に努めた。そのような対策・取組みの結果、本学における大規模感染を引き起こすこともなく大学運営を行えた。 ２．日本高等教育評価機構による第三者評価受審に向けた適切な対応を目指す 令和３年度大学機関別認証評価の結果、日本高等評価機構が定める大学評価基準に適合しているとの認定を受けた。 なお、機構より指摘された一部事項については、事務局として早期改善を図り、年度内において対応案をまとめ、令和４年度早期に完了する計画である。

2021年度（令和3年度）

M科

学科	学年	基礎データ 入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	卒業者数
M科	1年	87	87	4	1	0	0
	2年	86	84	4	2	0	0
	3年	79	77	0	1	0	0
	4年	96	106	4	15	11	91
	計	348	354	12	19	11	91

休退学等の理由：進路変更、学習意欲の低下等

目標資格取得状況 臨床検査技師	人数/率	細胞検査士	人数/率		
受験者	91	受験者	13		
合格者	79	合格者	13		
合格率	86.80%	合格率	100%		

備考：

卒業後の進路	人数	割合（率）
就職者	78	85.70%
進学者	1	1.10%
その他	－	－

備考：

卒業者累積GPA平均：2.51

R科

学科	学年	基礎データ 入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	卒業者数
R科	1年	85	85	1	0	0	0
	2年	86	84	5	4	0	0
	3年						0
	4年						0
	計	171	169	6	4	0	0

休退学等の理由：進路変更等

目標資格取得状況 診療放射線技	人数/率				
受験者		受験者		受験者	
合格者		合格者		合格者	
合格率		合格率		合格率	

備考：

卒業後の進路	人数	割合（率）
就職者		
進学者		
その他		

備考：

卒業者累積GPA平均：

O科

学科	学年	基礎データ 入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	卒業者数
O科	1年	79	79	2	0	0	0
	2年	77	76	2	0	0	0
	3年	84	82	2	1	6	74
	計	240	237	6	1	6	74

休退学等の理由：進路変更、学習意欲の低下等

目標資格取得状況 歯科衛生士	人数/率				
受験者	74	受験者		受験者	
合格者	74	合格者		合格者	
合格率	100.00%	合格率		合格率	

備考：

卒業後の進路	人数	割合（率）
就職者	67	90.50%
進学者	1	1.40%
その他	－	－

備考：

卒業者累積GPA平均：2.72

N科

学科	学年	基礎データ 入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	卒業者数
N科	1年	87	87	3	1	0	0
	2年	81	82	0	1	0	0
	3年	83（2）	83	1	3	0	0
	4年	90（1）	97	1	7	7	89
	計	168	349	5	12	7	89

休退学等の理由：進路変更等
（　）は編入学

目標資格取得状況 看護師	人数/率	保健師	人数/率		
受験者	88	受験者	31		
合格者	84	合格者	27		
合格率	95.50%	合格率	87.10%		

備考：

卒業後の進路	人数	割合（率）
就職者	86	96.60%
進学者	1	1.10%
その他	－	－

備考：

卒業者累積GPA平均：2.59

E科

学科	学年	基礎データ 入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	留年者数	卒業者数
E科	1年	85	85	3	0	0	0
	2年	96	96	1	1	0	0
	3年	94	89	1	1	0	0
	4年	71	75	1	1	1	73
	計	346	345	6	3	1	73

休退学等の理由：進路変更、学習意欲の低下等

目標資格取得状況 幼稚園教諭	人数/率	小学校教諭	人数/率	保育士	人数/率
取得者	45	取得者	20	取得者	45

備考：
●公立こども園（正規）1名
●公立小学校（正規）5名
●公立小学校（任期）1名
●公立保育園（正規）3名

卒業後の進路	人数	割合（率）
就職者	69	94.50%
進学者	1	1.40%
その他	－	－

備考：

卒業者累積GPA平均：2.78

CCN

学科	学年	基礎データ 入学者数	在籍者数	退学者数	休学者数	在籍延期者数	卒業者数
CCN	1年	114	114	4	0	0	0
	2年	0	168	24	6	50	94
	計	114	282	28	6	50	94

休退学等の理由：

目標資格取得状況 新卒	人数/率	既卒	人数/率		
受験者	93	受験者	78		
合格者	70	合格者	20		
合格率	75.30	合格率	25.60		

備考：

卒業後の進路	人数	割合（率）

備考：

卒業者累積GPA平均：2.80

保健科学部　医療検査学科　学生による授業評価アンケート集計結果

表1　医療検査学科の実施率・回答率

	アンケート対象科目数（①）	アンケート実施科目数（②）	**科目実施率** ②÷① ×100(%)	②の履修登録者数（③）	③の回答者数（④）	**学生回答率** ④÷③ ×100(%)
医療検査学科	115	108	**93.9**	7920	5682	**71.7**
総　計	664	587	**88.4**	35029	23756	**67.8**

表2　医療検査学科の項目別平均値

カテゴリー	問	設　問	平均値
Ⅰ 学生自身	3	この授業への出席状況は？	4.82
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業 1 回あたりの平均時間）	3.36
	5	この授業に意欲的に参加した。	4.28
Ⅱ 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。	4.25
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。	4.17
	8	授業は知的関心や好奇心を起こす内容であった。	4.19
Ⅲ 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。	4.14
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。	4.17
	11	授業の進行速度は適切だった。	4.19
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。	4.21
Ⅳ 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。	4.25
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。	4.30
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.23
Ⅴ 総合評価	16	この授業を受けて満足している。	4.25
学科別質問項目	17	【実習科目】レポートや課題などのチェックは適切だった。	4.18
	18	【実習科目】器具・備品・試薬などの準備は適切だった。	4.27
	19	【実習科目】スタッフの補助・対応は適切だった。	4.25
記述式項目	①	この授業でよいと思った点があれば書いてください。	
	②	この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。	
	③	教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。	

問1は所属学科，問2は学年のため表からは省略。

問3以降の選択式項目について，次に示す5件法で回答を求めた。

問3　5:すべて出席，4:1回欠席，3:2回欠席，2:3回欠席，1:4回以上欠席

問4　5:2時間以上，4:1～2時間，3:30分～1時間，2:30分未満，1:0時間

問5～　5:そう思う，4:どちらかと言えばそう思う，3:どちらでもない（ふつう），2:どちらかと言えばそう思わない，1:そう思わない

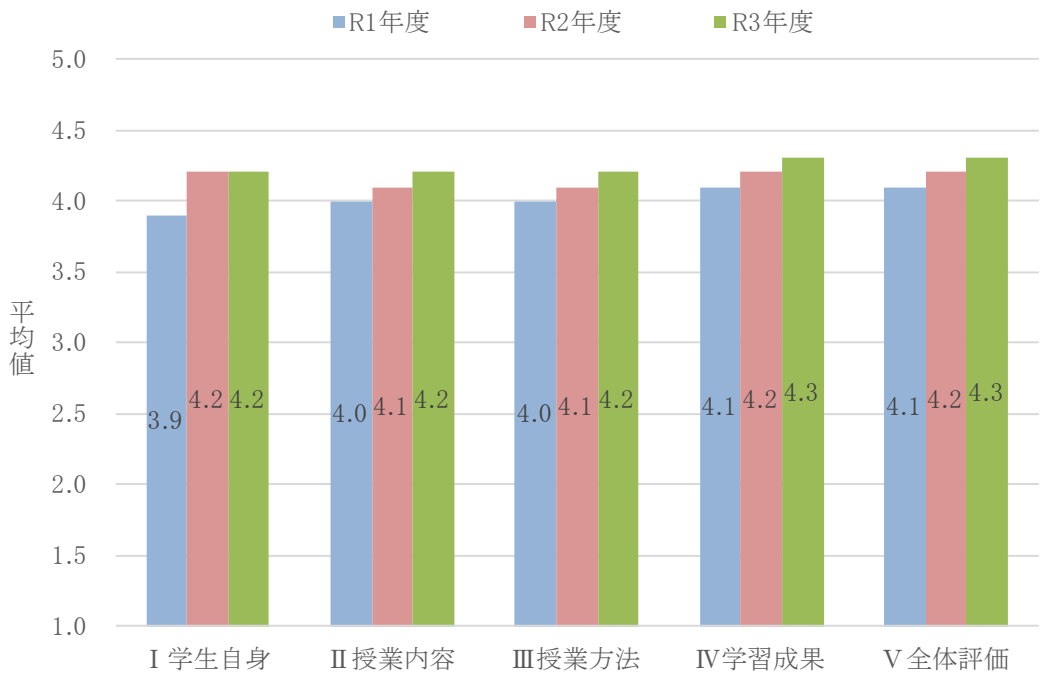


図1　医療検査学科のカテゴリー別平均値年次推移

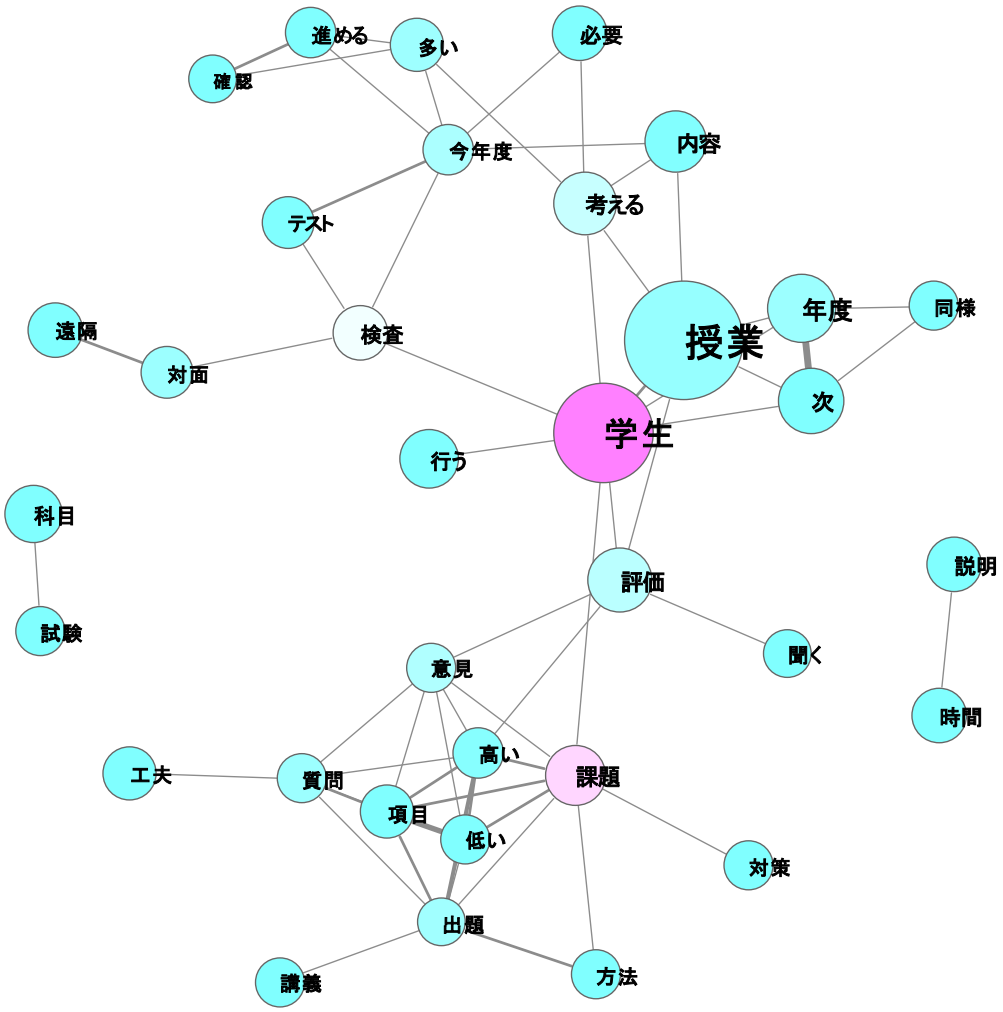


図2　医療検査学科　授業改善データの共起ネットワーク　授業の改善をどのようにしたいのか、またどのように実施したのかを明らかにするため、計量テキスト分析・テキストマイニングを実施し、「自動抽出した語を用いて、恣意的になりうる操作を極力避けつつ、データの様子を探る段階」として、共起ネットワークの作成を行った。

保健科学部　医療検査学科　卒後アンケート

１．対象

令和3年3月に卒業した卒業生72名

２．回収率

	発送数	回答数	回収率(%)
令和３年度	72	41	56.9
令和２年度	86	69	80.2
令和元年度	86	53	61.6

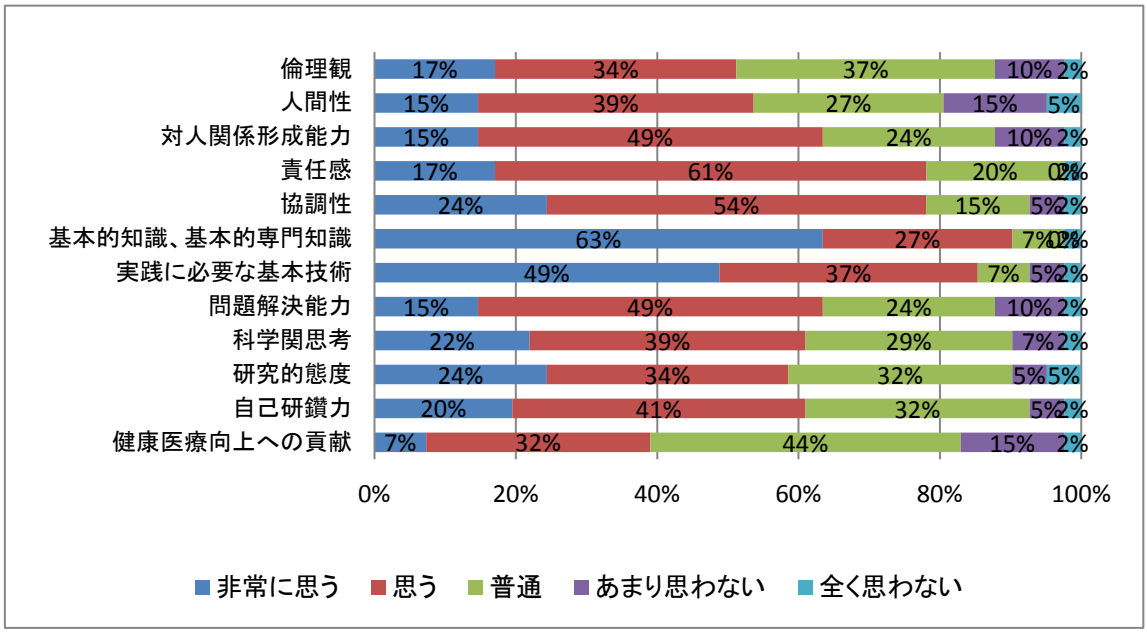
３．調査結果

● 卒業後の進路

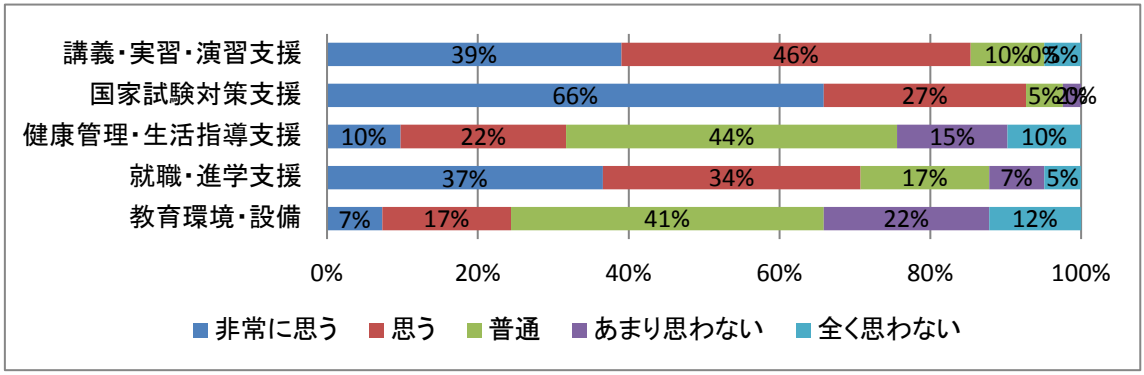
クリニック（一般）	1
健診センター	3
検査センター	2
国公立病院	13
私立病院	17
進学（大学院・他の大学・専門学校）	3
大学病院	2

● ディプロマポリシー（DP）に対する自己評価

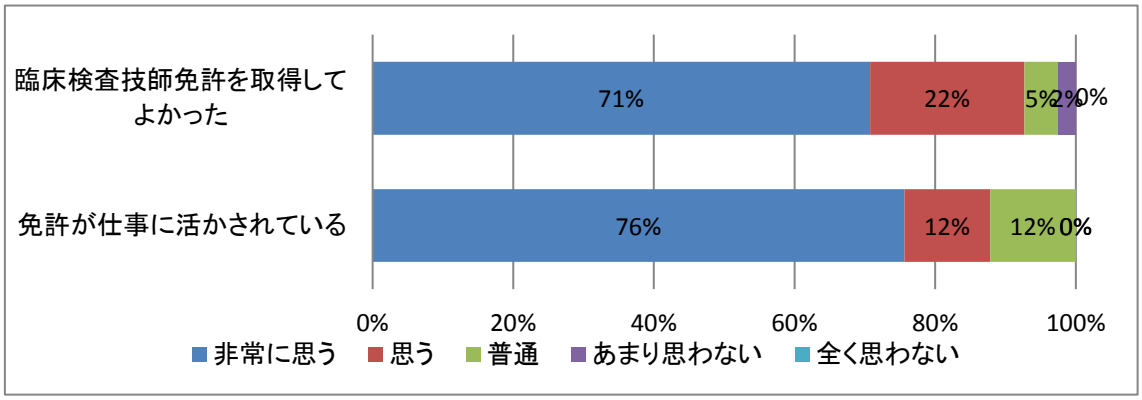
大学での学修や学生生活を通じて、以下のDPを身につけることができたか。



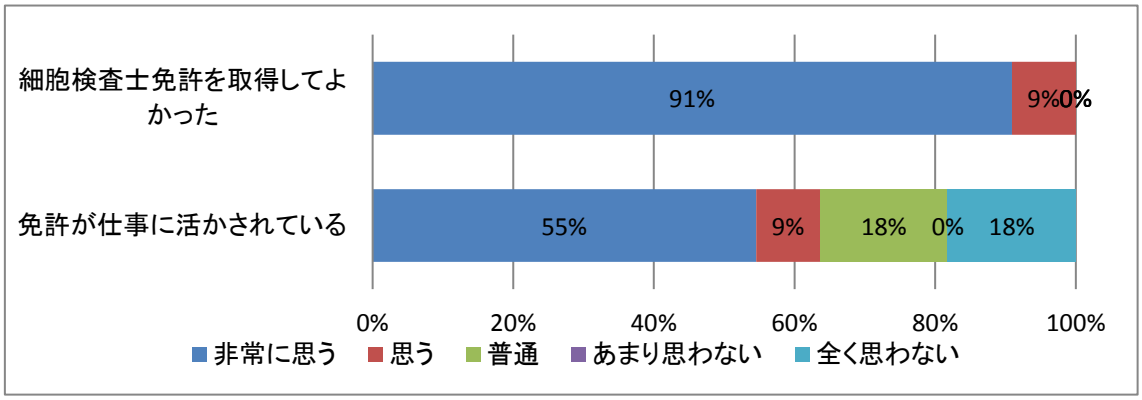
● 本学の各種支援に対する満足度



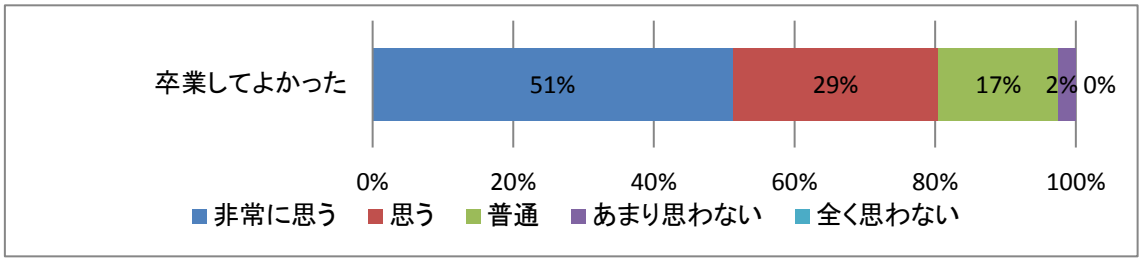
● 臨床検査技師免許を取得しての満足度（免許取得者のみ対象）



● 細胞検査士認定資格を取得しての満足度（資格取得者のみ対象）



● 総合評価：学生時代を振り返って、本学医療検査学科を卒業して良かったか。



保健科学部　医療検査学科　就職先アンケート

１．対象

令和 3 年 3 月卒業生の就職先 49 施設

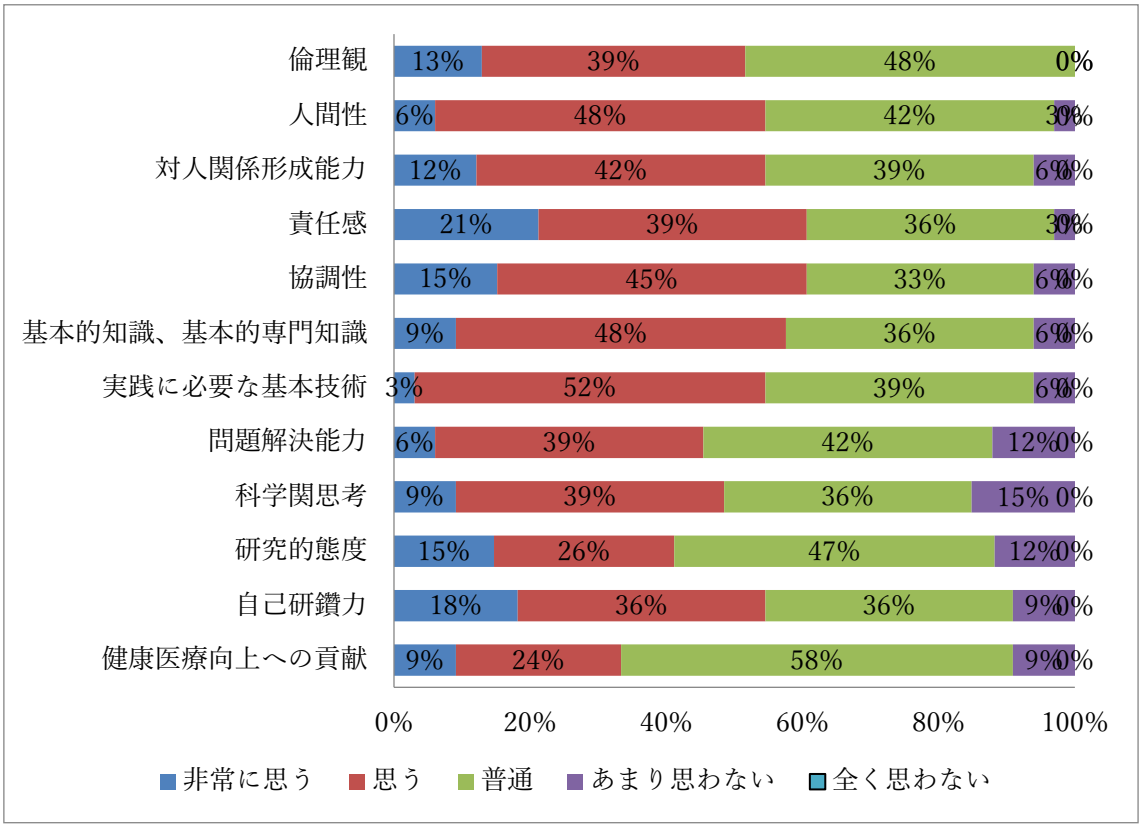
２．回収率

実施年度	発送数	回答数	回収率(%)
令和 3 年度	49	34	69.4
平成 30 年度	72	49	68.1
平成 27 年度	53	26	49.0

３．調査結果

● ディプロマポリシーに対する評価

卒業生が以下のディプロマポリシーを身につけているか。



保健科学部　診療放射線学科　学生による授業評価アンケート集計結果

表1　診療放射線学科の実施率・回答率

	アンケート対象科目数（①）	アンケート実施科目数（②）	**科目実施率** ②÷① ×100(%)	②の履修登録者数（③）	③の回答者数（④）	**学生回答率** ④÷③ ×100(%)
診療放射線学科	47	44	**93.6**	3498	2302	**65.8**
総　計	664	587	**88.4**	35029	23756	**67.8**

表2　診療放射線学科の項目別平均値

カテゴリー	問	設　問	平均値
Ⅰ 学生自身	3	この授業への出席状況は？	4.40
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業 1 回あたりの平均時間）	3.13
	5	この授業に意欲的に参加した。	4.26
Ⅱ 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。	4.24
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。	4.17
	8	授業は知的関心や好奇心を起こす内容であった。	4.17
Ⅲ 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。	4.19
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。	4.19
	11	授業の進行速度は適切だった。	4.25
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。	4.26
Ⅳ 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。	4.21
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。	4.26
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.21
Ⅴ 総合評価	16	この授業を受けて満足している。	4.26
学科別質問項目	17	【実習科目】レポートや課題などのチェックは適切だった。	4.21
	18	【実習科目】装置・器具・備品などの準備は適切だった。	4.10
	19	【実習科目】教員の補助・対応は適切だった。	4.13
記述式項目	①	この授業でよいと思った点があれば書いてください。	
	②	この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。	
	③	教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。	

問1は所属学科，問2は学年のため表からは省略。

問3以降の選択式項目について，次に示す5件法で回答を求めた。

問3　5:すべて出席，4:1回欠席，3:2回欠席，2:3回欠席，1:4回以上欠席

問4　5:2時間以上，4:1～2時間，3:30分～1時間，2:30分未満，1:0時間

問5～　5:そう思う，4:どちらかと言えばそう思う，3:どちらでもない（ふつう），2:どちらかと言えばそう思わない，1:そう思わない

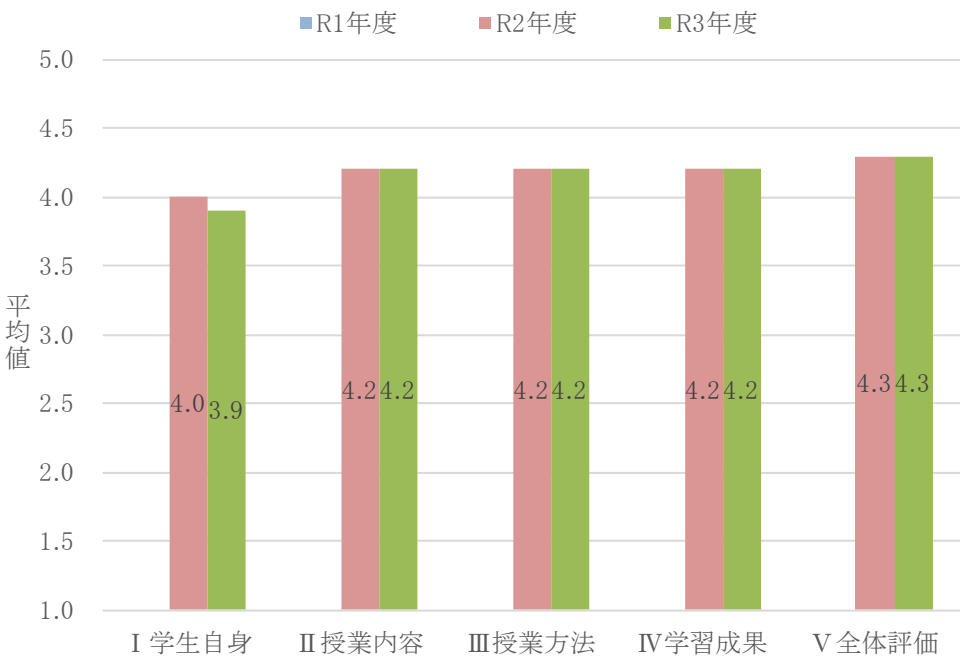


図1　診療放射線学科のカテゴリー別平均値年次推移

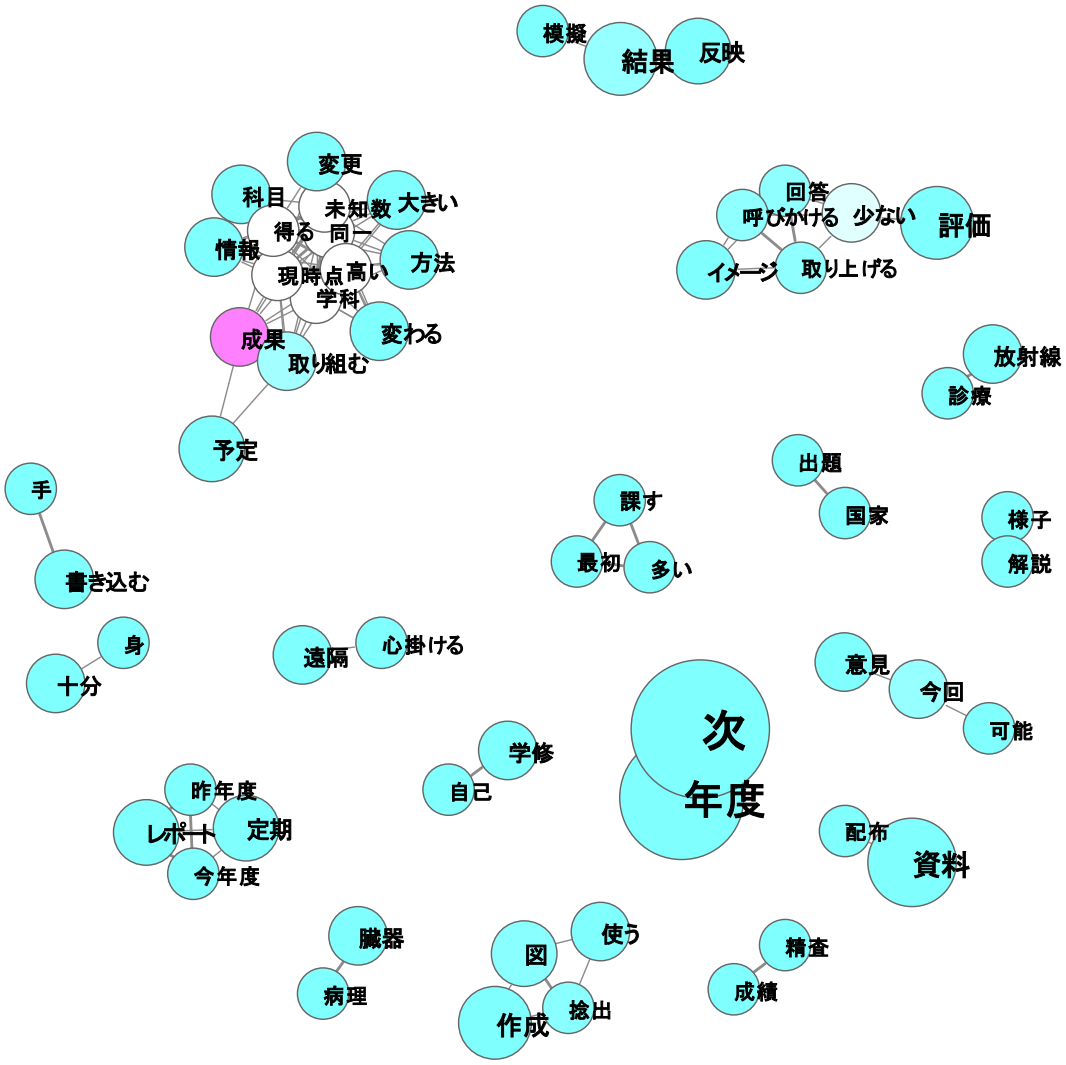


図2　診療放射線学科　授業改善データの共起ネットワーク　授業の改善をどのようにしたいのか、またどのように実施したのかを明らかにするため、計量テキスト分析・テキストマイニングを実施し、「自動抽出した語を用いて、恣意的になりうる操作を極力避けつつ、データの様子を探る段階」として、共起ネットワークの作成を行った。

保健科学部　看護学科　学生による授業評価アンケート集計結果

表1　看護学科の実施率・回答率

	アンケート対象科目数（①）	アンケート実施科目数（②）	**科目実施率** ②÷① ×100(%)	②の履修登録者数（③）	③の回答者数（④）	**学生回答率** ④÷③ ×100(%)
看護学科	109	87	**79.8**	4744	2862	**60.3**
総　計	664	587	**88.4**	35029	23756	**67.8**

表2　看護学科の項目別平均値

カテゴリー	問	設　問	平均値
Ⅰ 学生自身	3	この授業への出席状況は？	4.73
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業 1 回あたりの平均時間）	3.56
	5	この授業に意欲的に参加した。	4.47
Ⅱ 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。	4.42
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。	4.34
	8	授業は知的関心や好奇心を起こす内容であった。	4.40
Ⅲ 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。	4.31
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。	4.32
	11	授業の進行速度は適切だった。	4.36
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。	4.35
Ⅳ 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。	4.46
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。	4.46
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.37
Ⅴ 総合評価	16	この授業を受けて満足している。	4.43
学科別質問項目	17	【演習科目】到達度の確認は適切であった。	4.41
	18	【演習科目】(複数教員授業の場合)教員間の連携、対応は適切であった。	4.33
	19	抽象的な内容については、適度に事例を示して具体的な説明があった。	4.44
	20	授業内容は、教員独自の意見や考えを適度に示し、心に響くものであった。	4.38
記述式項目	①	この授業でよいと思った点があれば書いてください。	
	②	この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。	
	③	教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。	

問1は所属学科，問2は学年のため表からは省略。

問3以降の選択式項目について，次に示す5件法で回答を求めた。

問3　5:すべて出席，4:1回欠席，3:2回欠席，2:3回欠席，1:4回以上欠席

問4　5:2時間以上，4:1～2時間，3:30分～1時間，2:30分未満，1:0時間

問5～　5:そう思う，4:どちらかと言えばそう思う，3:どちらでもない（ふつう），2:どちらかと言えばそう思わない，1:そう思わない

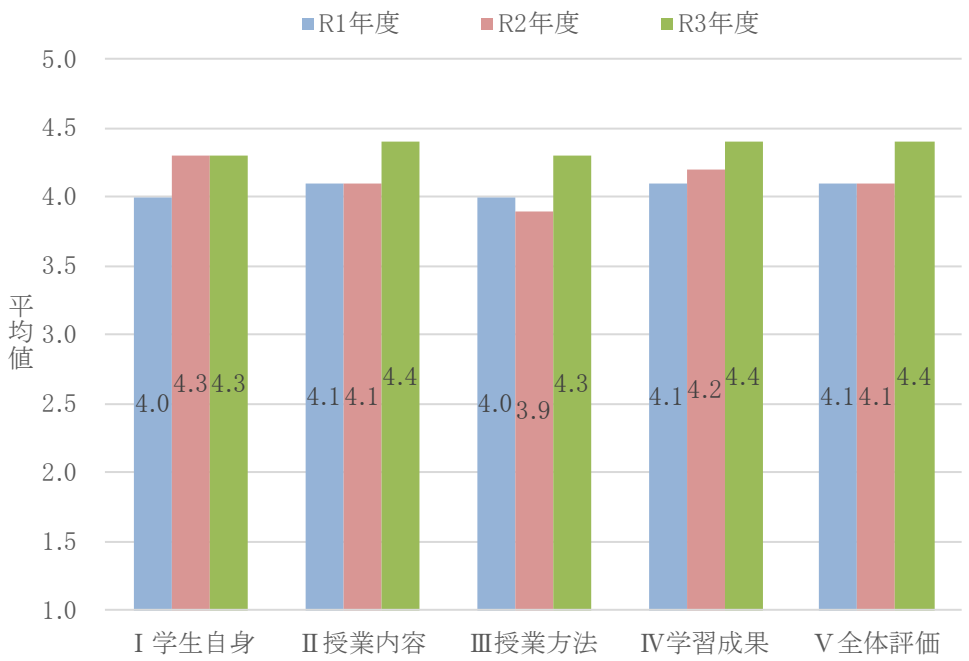


図1　看護学科のカテゴリー別平均値年次推移

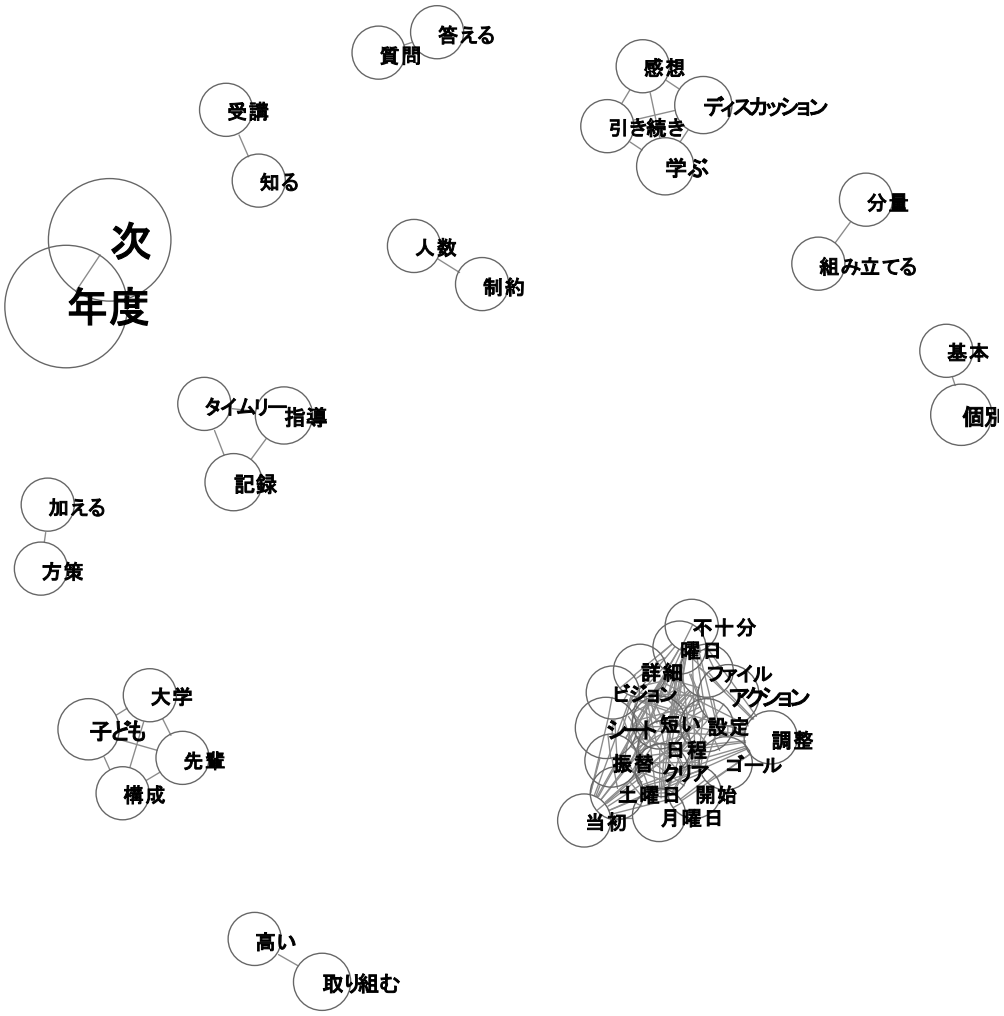


図2　看護学科　授業改善データの共起ネットワーク　授業の改善をどのようにしたいのか、またどのように実施したのかを明らかにするため、計量テキスト分析・テキストマイニングを実施し、「自動抽出した語を用いて、恣意的になりうる操作を極力避けつつ、データの様子を探る段階」として、共起ネットワークの作成を行った。

保健科学部　看護学科　卒後アンケート

１．対象

令和3年3月に卒業した卒業生78名

２．回収率

	発送数	回答数	回収率(%)
令和３年度	78	23	29.5
令和２年度	75	37	49.3%
令和元年度	85	25	29.4%

３．調査結果

● 卒業後の進路

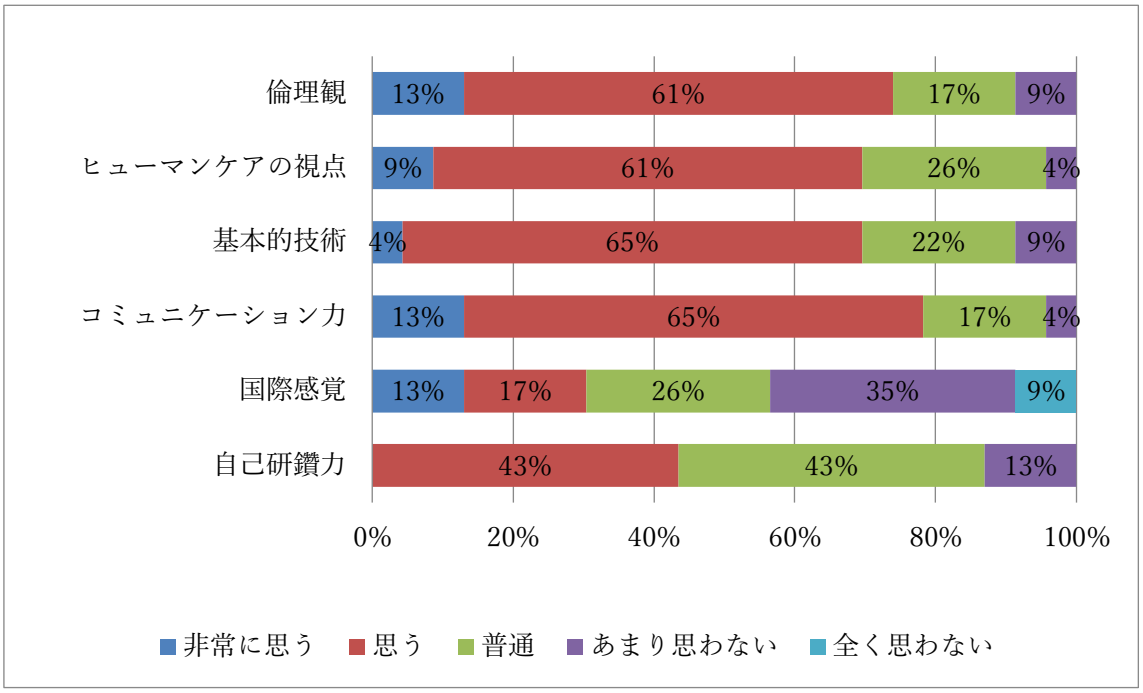
病院	23

● 卒業後の職業

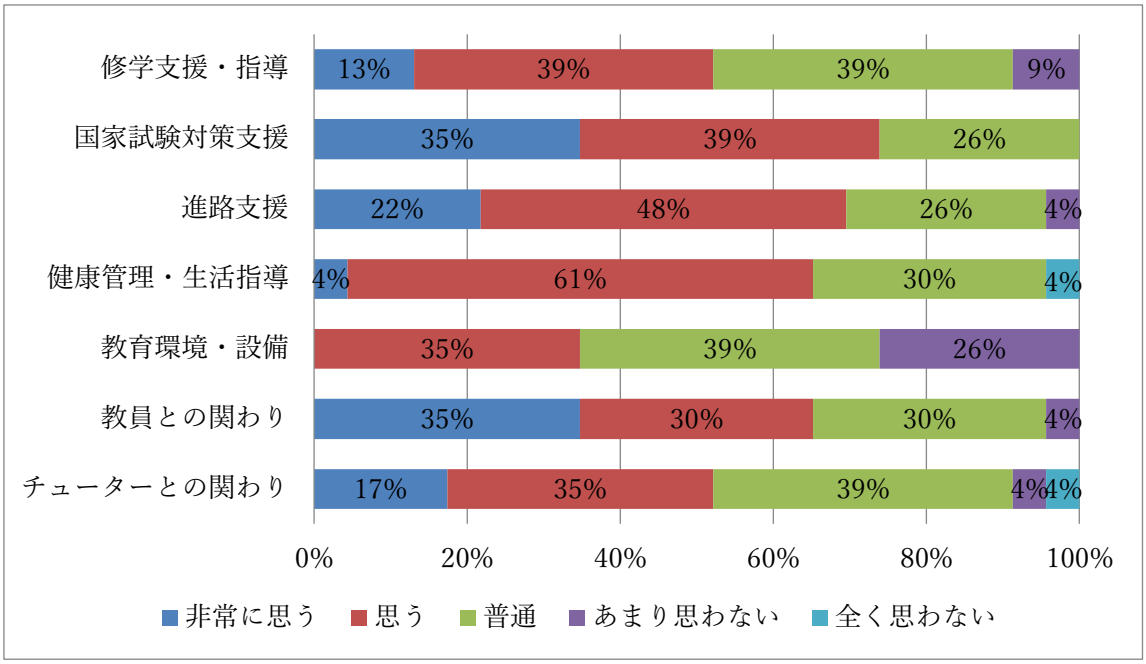
看護師	23

● ディプロマポリシー（DP）に対する自己評価

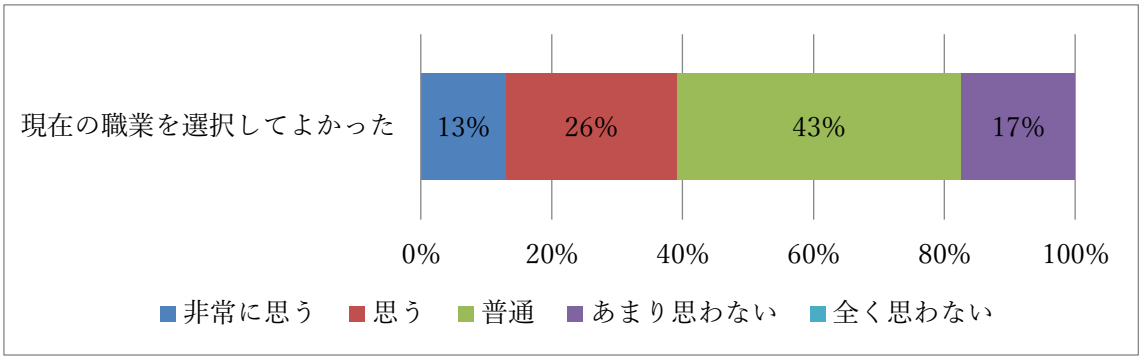
大学での学修や学生生活を通じて、以下のDPを身につけることができたか。



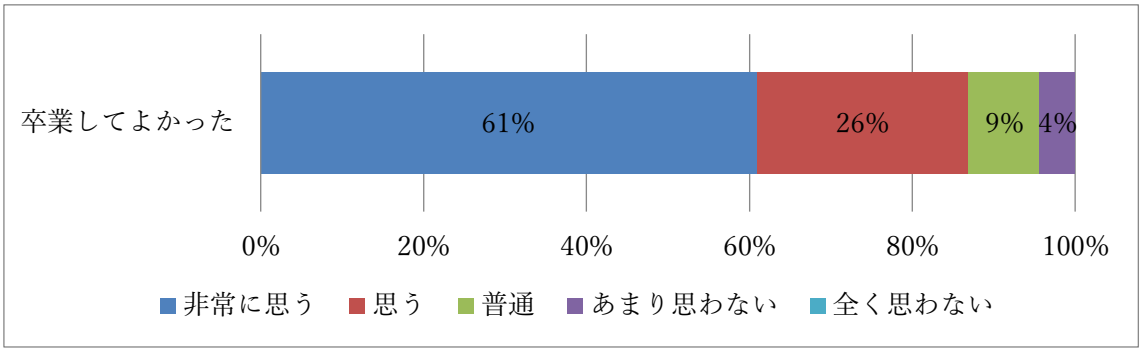
● 本学の各種支援に対する満足度



● 現在の職業を選択しての満足度



● 総合評価：学生時代を振り返って、本学看護学科を卒業して良かったか。



保健科学部　看護学科　就職先アンケート

１．対象

令和 3 年 3 月卒業生の就職先 35 施設

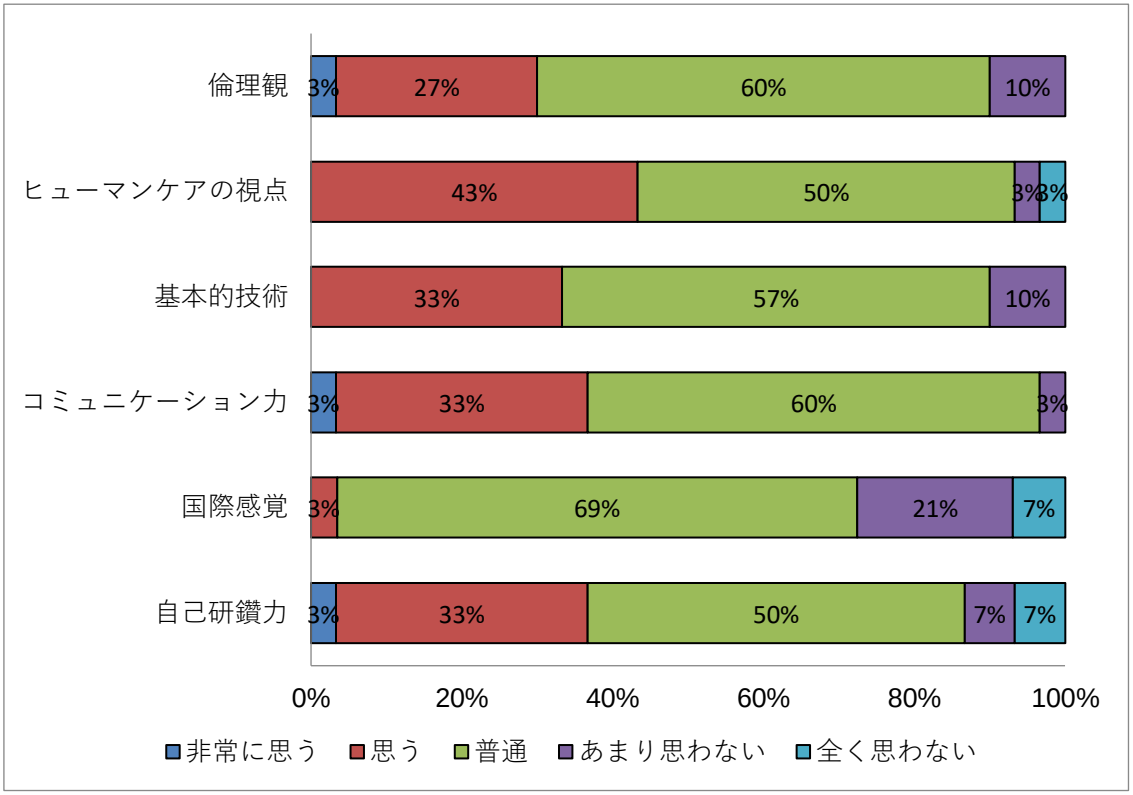
２．回収率

実施年度	発送数	回答数	回収率(%)
令和 3 年度	35	30	85.7
平成 30 年度	47	28	59.6
平成 27 年度	40	25	62.5

３．調査結果

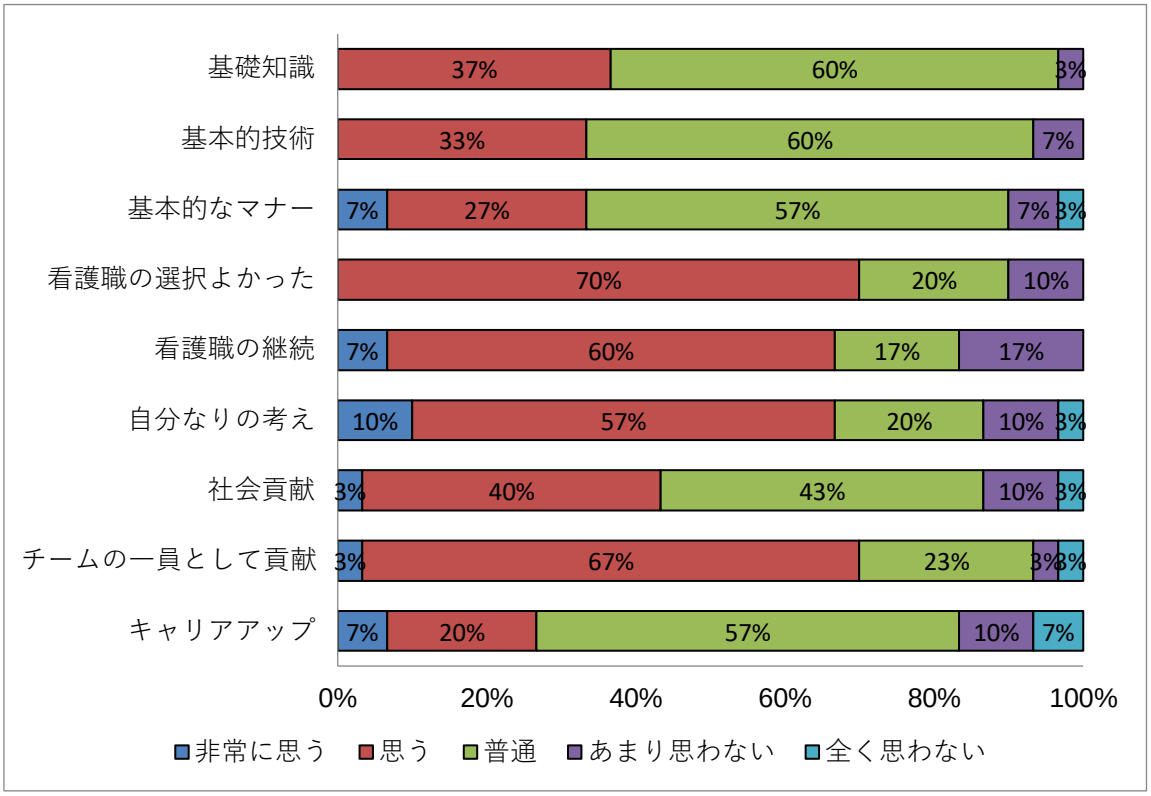
● ディプロマポリシーに対する評価

卒業生が以下のディプロマポリシーを身につけているか。



● 大学教育に対する評価

卒業生を通して見えてくる大学教育に対する評価



教育学部　こども教育学科　学生による授業評価アンケート集計結果

表1　こども教育学科の実施率・回答率

	アンケート対象科目数（①）	アンケート実施科目数（②）	**科目実施率** ②÷① ×100(%)	②の履修登録者数（③）	③の回答者数（④）	**学生回答率** ④÷③ ×100(%)
こども教育学科	149	126	**84.6**	5567	3491	**62.7**
総　計	664	587	**88.4**	35029	23756	**67.8**

表2　こども教育学科の項目別平均値

カテゴリー	問	設　問	平均値
Ⅰ 学生自身	3	この授業への出席状況は？	4.52
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業 1 回あたりの平均時間）	3.27
	5	この授業に意欲的に参加した。	4.68
Ⅱ 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。	4.62
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。	4.60
	8	授業は知的関心や好奇心を起こす内容であった。	4.61
Ⅲ 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。	4.58
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。	4.55
	11	授業の進行速度は適切だった。	4.58
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。	4.61
Ⅳ 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。	4.67
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。	4.69
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.60
Ⅴ 総合評価	16	この授業を受けて満足している。	4.66
学科別質問項目	17	教員の学生への対応は公平であった。	4.74
記述式項目	①	この授業でよいと思った点があれば書いてください。	
	②	この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。	
	③	教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。	

問1は所属学科，問2は学年のため表からは省略。

問3以降の選択式項目について，次に示す5件法で回答を求めた。

問3　5:すべて出席，4:1回欠席，3:2回欠席，2:3回欠席，1:4回以上欠席

問4　5:2時間以上，4:1～2時間，3:30分～1時間，2:30分未満，1:0時間

問5～　5:そう思う，4:どちらかと言えばそう思う，3:どちらでもない（ふつう），2:どちらかと言えばそう思わない，1:そう思わない

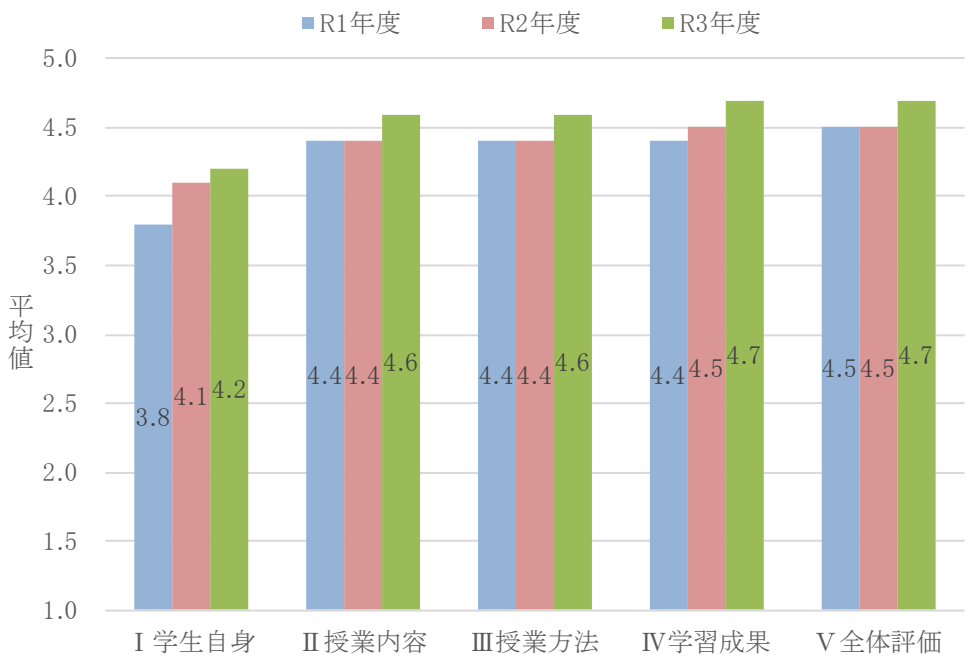


図1　こども教育学科のカテゴリー別平均値年次推移

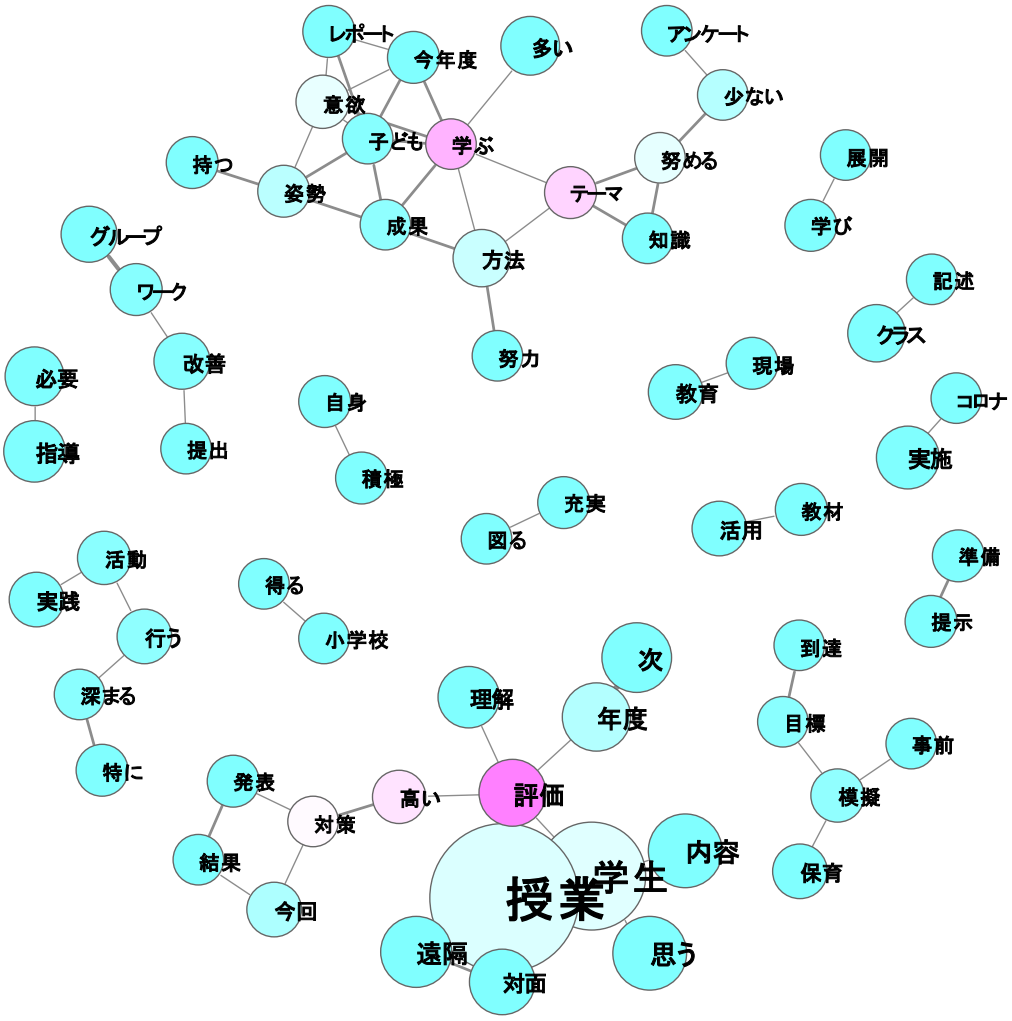


図2　こども教育学科　授業改善データの共起ネットワーク　授業の改善をどのようにしたいのか、またどのように実施したのかを明らかにするため、計量テキスト分析・テキストマイニングを実施し、「自動抽出した語を用いて、恣意的になりうる操作を極力避けつつ、データの様子を探る段階」として、共起ネットワークの作成を行った。

教育学部　こども教育学科　卒後アンケート

１．対象

令和3年3月に卒業した卒業生84名

２．回収率

	発送数	回答数	回収率(%)
令和３年度	84	26	31.0
令和２年度	78	42	53.8
令和元年度	83	27	32.5

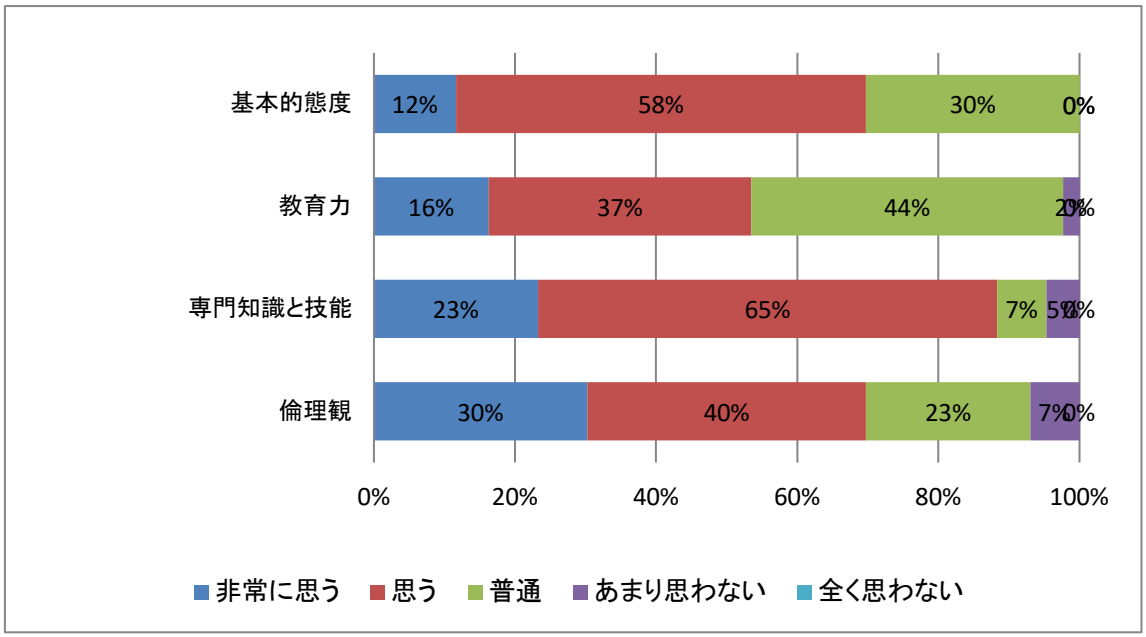
３．調査結果

● 卒業後の進路

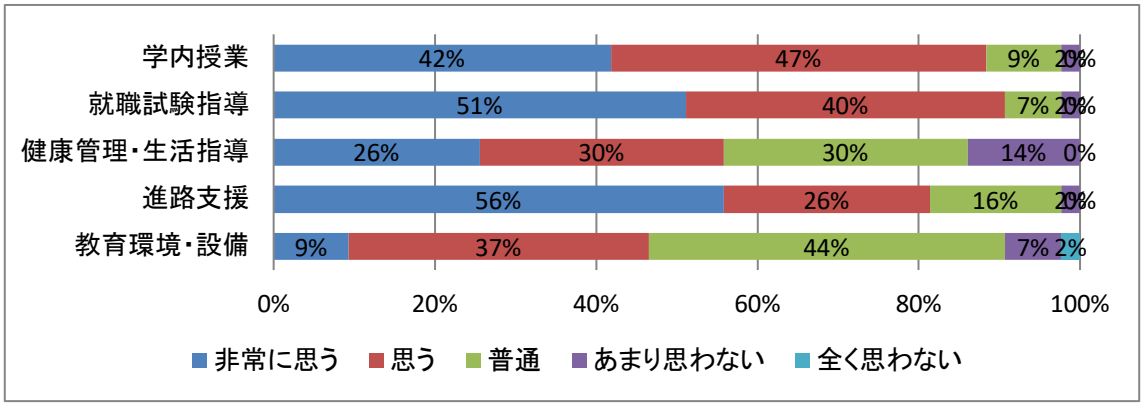
認定こども園	7
保育所	6
幼稚園	2
小学校	3
社会福祉施設	6
進学（大学院・他の大学・専門学校）	1
働いていない	1

● ディプロマポリシー（DP）に対する自己評価

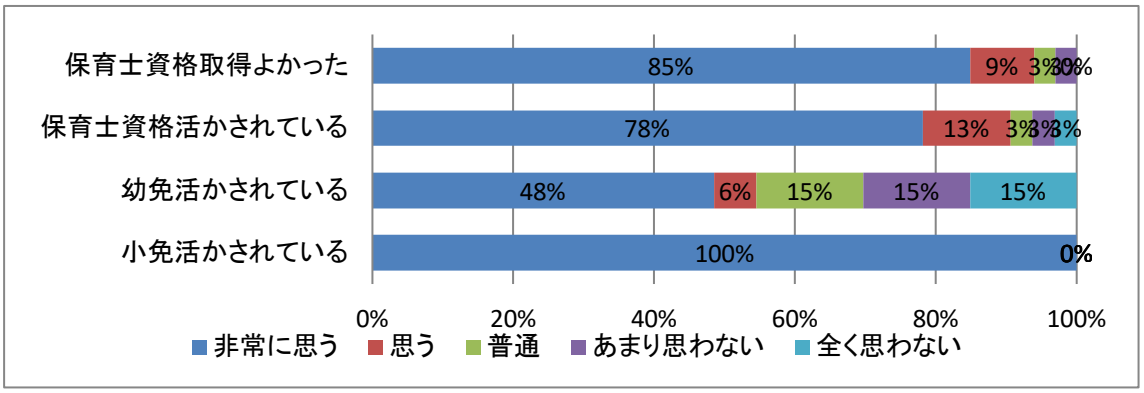
大学での学修や学生生活を通じて、以下のDPを身につけることができたか。



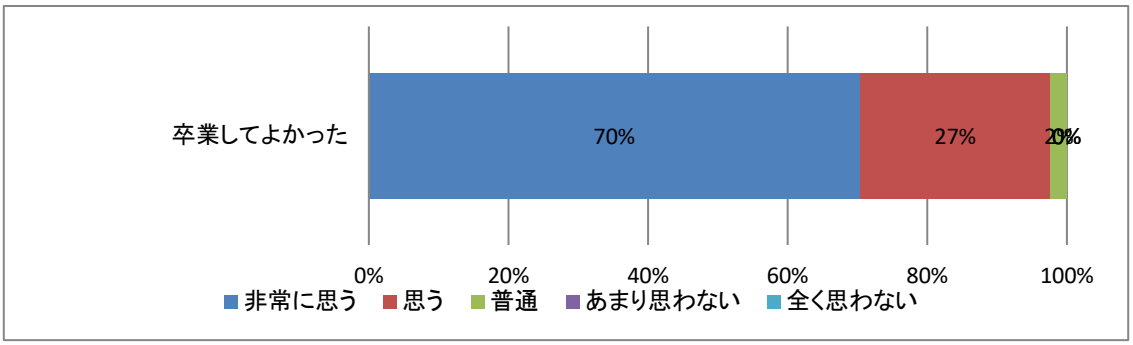
● 本学の各種支援に対する満足度



● 資格を取得しての満足度



● 総合評価：学生時代を振り返って、本学こども教育学科を卒業して良かったか。



教育学部　こども教育学科　就職先アンケート

１．対象

令和 3 年 3 月卒業生の就職先 53 施設

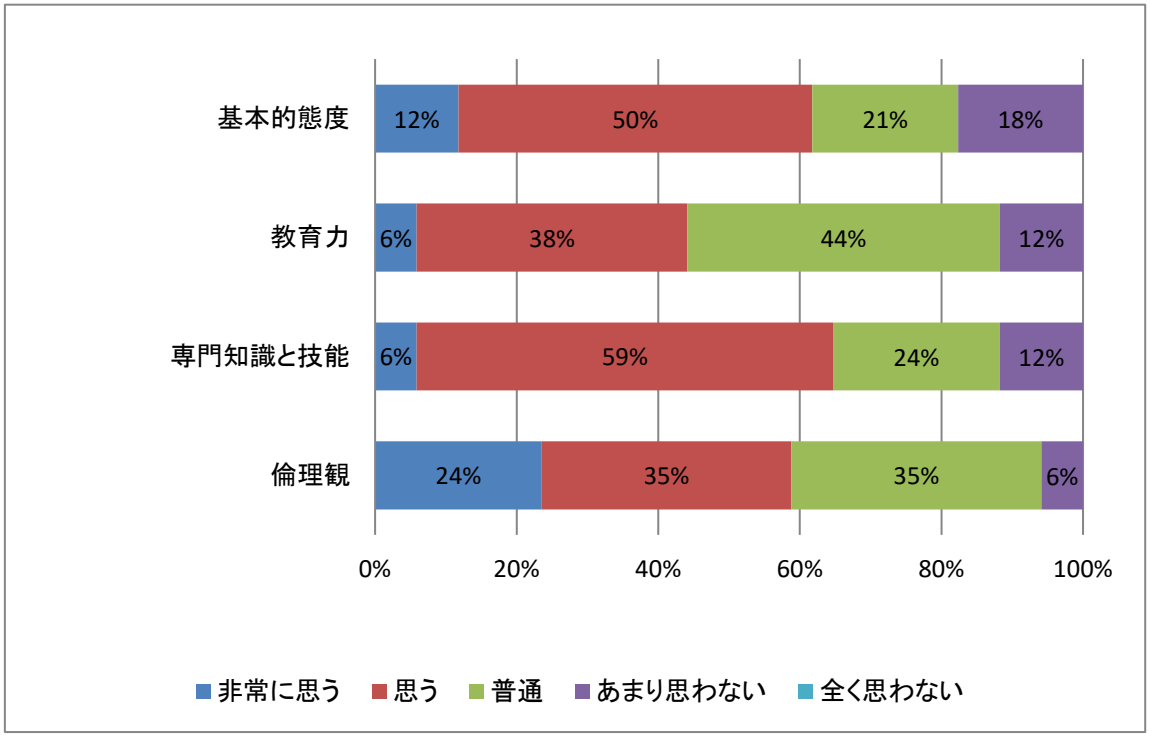
２．回収率

実施年度	発送数	回答数	回収率(%)
令和 3 年度	53	37	69.8
平成 30 年度	58	33	38.8

３．調査結果

● ディプロマポリシーに対する評価

卒業生が以下のディプロマポリシーを身につけているか。



短期大学部　口腔保健学科　学生による授業評価アンケート集計結果

表1　口腔保健学科の実施率・回答率

	アンケート対象科目数（①）	アンケート実施科目数（②）	**科目実施率** ②÷① ×100(%)	②の履修登録者数（③）	③の回答者数（④）	**学生回答率** ④÷③ ×100(%)
口腔保健学科	92	82	**89.1**	5137	4246	**82.7**
総　計	664	587	**88.4**	35029	23756	**67.8**

表2　口腔保健学科の項目別平均値

カテゴリー	問	設　問	平均値
Ⅰ 学生自身	3	この授業への出席状況は？	4.84
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業 1 回あたりの平均時間）	3.30
	5	この授業に意欲的に参加した。	4.55
Ⅱ 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。	4.53
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。	4.49
	8	授業は知的関心や好奇心を起こす内容であった。	4.47
Ⅲ 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。	4.48
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。	4.46
	11	授業の進行速度は適切だった。	4.46
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。	4.45
Ⅳ 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。	4.48
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。	4.51
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.46
Ⅴ 総合評価	16	この授業を受けて満足している。	4.53
学科別質問項目	17	【実習科目】実習器材や材料の準備は適切に行われた。	4.39
	18	【実習科目】教員の人数や配置は適切であった。	4.45
記述式項目	①	この授業でよいと思った点があれば書いてください。	
	②	この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。	
	③	教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。	

問1は所属学科，問2は学年のため表からは省略。

問3以降の選択式項目について，次に示す5件法で回答を求めた。

問3　5:すべて出席，4:1回欠席，3:2回欠席，2:3回欠席，1:4回以上欠席

問4　5:2時間以上，4:1～2時間，3:30分～1時間，2:30分未満，1:0時間

問5～　5:そう思う，4:どちらかと言えばそう思う，3:どちらでもない（ふつう），2:どちらかと言えばそう思わない，1:そう思わない

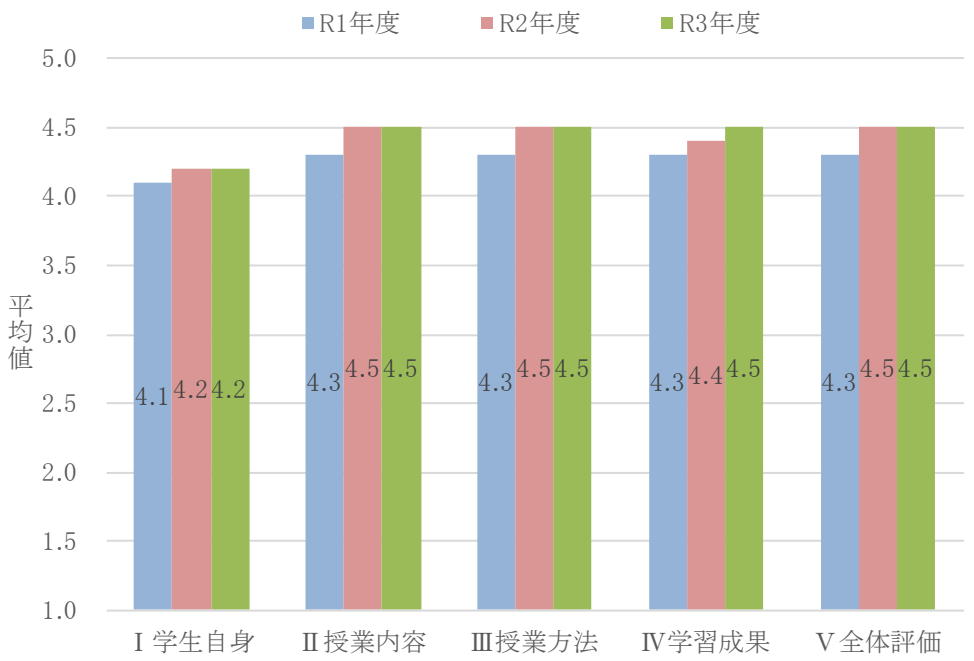


図1　口腔保健学科のカテゴリー別平均値年次推移

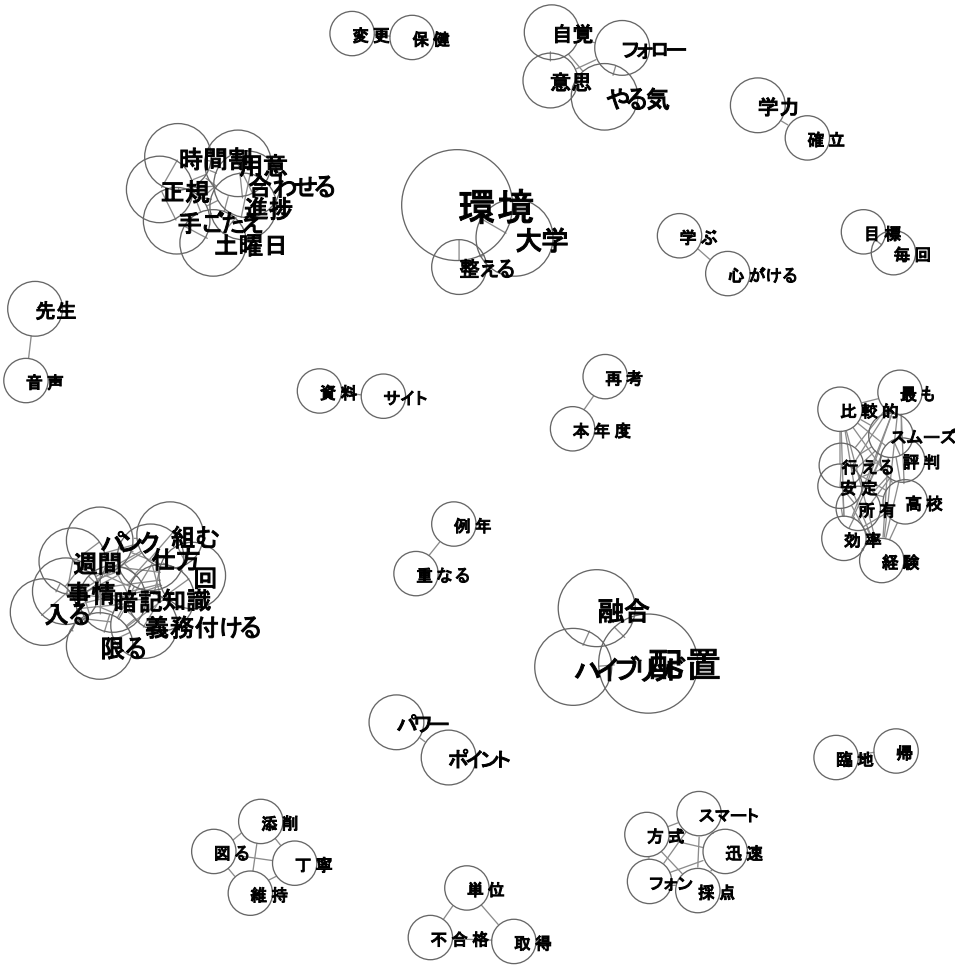


図2　口腔保健学科　授業改善データの共起ネットワーク　授業の改善をどのようにしたいのか、またどのように実施したのかを明らかにするため、計量テキスト分析・テキストマイニングを実施し、「自動抽出した語を用いて、恣意的になりうる操作を極力避けつつ、データの様子を探る段階」として、共起ネットワークの作成を行った。

短期大学部　口腔保健学科　卒後アンケート

１．対象

令和3年3月に卒業した卒業生64名

２．回収率

	発送数	回答数	回収率(%)
令和３年度	64	27	42.2
令和２年度	79	52	65.8
令和元年度	58	27	46.6

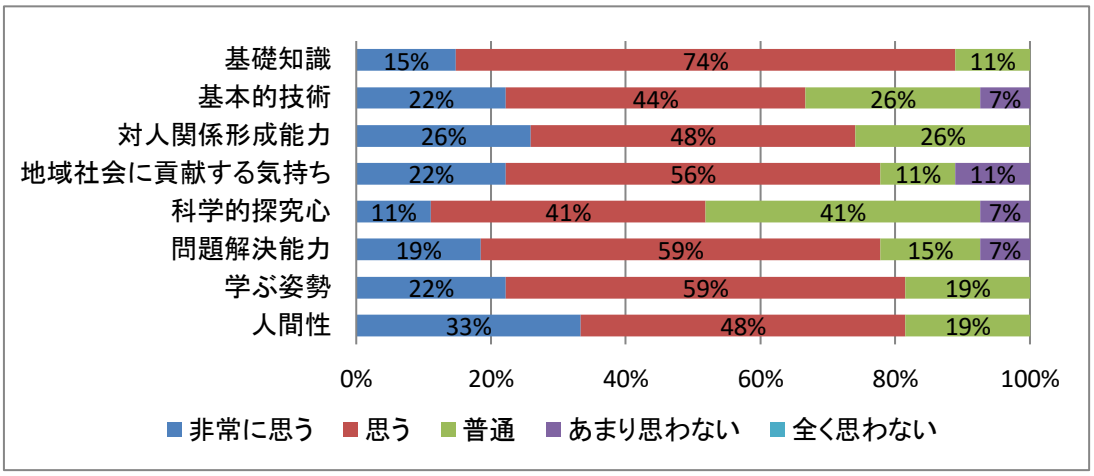
３．調査結果

● 卒業後の進路

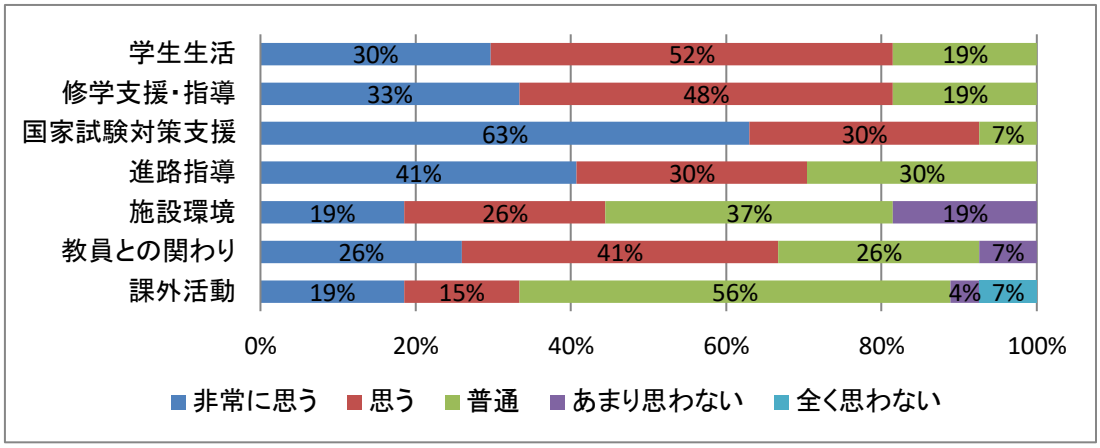
歯科診療所	27

● ディプロマポリシー（DP）に対する自己評価

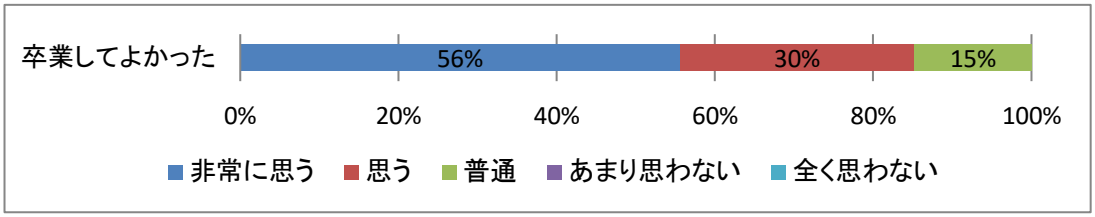
大学での学修や学生生活を通じて、以下のDPを身につけることができたか。



● 本学の各種支援に対する満足度



● 総合評価：学生時代を振り返って、口腔保健学科を卒業して良かったか。



短期大学部部　口腔保健学科　就職先アンケート

１．対象

令和 3 年 3 月卒業生の就職先 49 施設

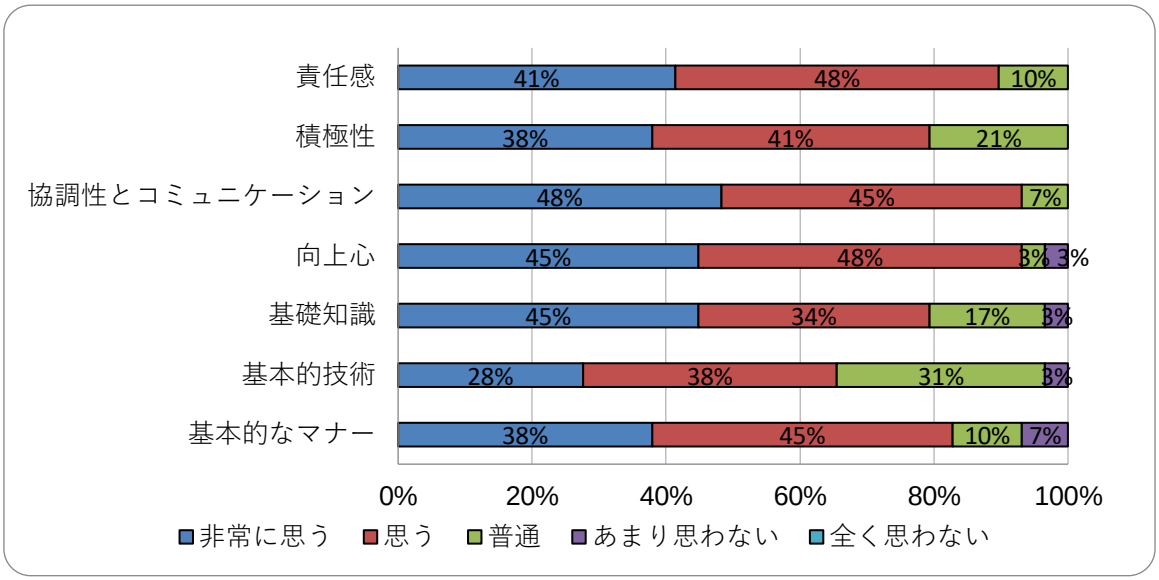
２．回収率

実施年度	発送数	回答数	回収率(%)
令和 3 年度	49	29	59.2
平成 30 年度	60	38	63.3
平成 27 年度	48	35	72.9

３．調査結果

● ディプロマポリシーに対する評価

卒業生が以下のディプロマポリシーを身につけているか。



短期大学部　看護学科通信制課程　学生による授業評価アンケート集計結果

表1　看護学科通信制課程の実施率・回答率

	アンケート対象科目数（①）	アンケート実施科目数（②）	**科目実施率** ②÷① ×100(%)	②の履修登録者数（③）	③の回答者数（④）	**学生回答率** ④÷③ ×100(%)
看護学科通信制課程	32	32	**100.0**	864	589	**68.2**
総　計	664	587	**88.4**	35029	23756	**67.8**

表2　看護学科通信制課程の設問項目

カテゴリー	問	設　問	平均値
Ⅰ 学生自身	3	あなたはシラバスを読んで授業内容を確認して臨みましたか。	4.04
	4	3日間の授業に意欲的に取り組みましたか。	4.40
	5	この授業を受けて今後の学習に意欲的に取り組めますか。	4.36
Ⅱ 授業内容	6	授業内容は無駄や重複がなく順序立てて整理されていた。	4.29
	7	専門的内容に対し、わかりやすい説明があった。	4.39
	8	抽象的な内容については適度に例を示して具体的な説明があった。	4.43
	9	授業内容は表面的ではなく教員自身の意見や考えを適度に示し、心に響くものであった	4.34
Ⅲ 授業方法	10	聞きやすい話し方だった。	4.32
	11	授業の進行速度は適切だった。	4.28
	12	授業の要点・テーマ・目的がわかりやすい展開であった。	4.33
	13	板書・スライド・教材などの使い方は適切だった。	4.24
	14	ノートをとるための時間はちょうど良かった。	4.04
	15	学生への質問の量、タイミングや方法は適切であった。	4.04
Ⅳ 学習成果	16	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。	4.28
	17	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。	4.37
	18	自分で調べ、考える姿勢の大切さに気づいた。	4.37
Ⅴ 総合評価	19	この授業を受けて満足している。	4.42
記述式項目	①	この授業でよいと思った点があれば書いてください。	
	②	この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。	
	③	教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。	

問1は性別，問2は年齢のため表からは省略。

問3以降の選択式項目について，次に示す5件法で回答を求めた。

5:そう思う，4:どちらかと言えばそう思う，3:どちらでもない（ふつう），2:どちらかと言えばそう思わない，1:そう思わない

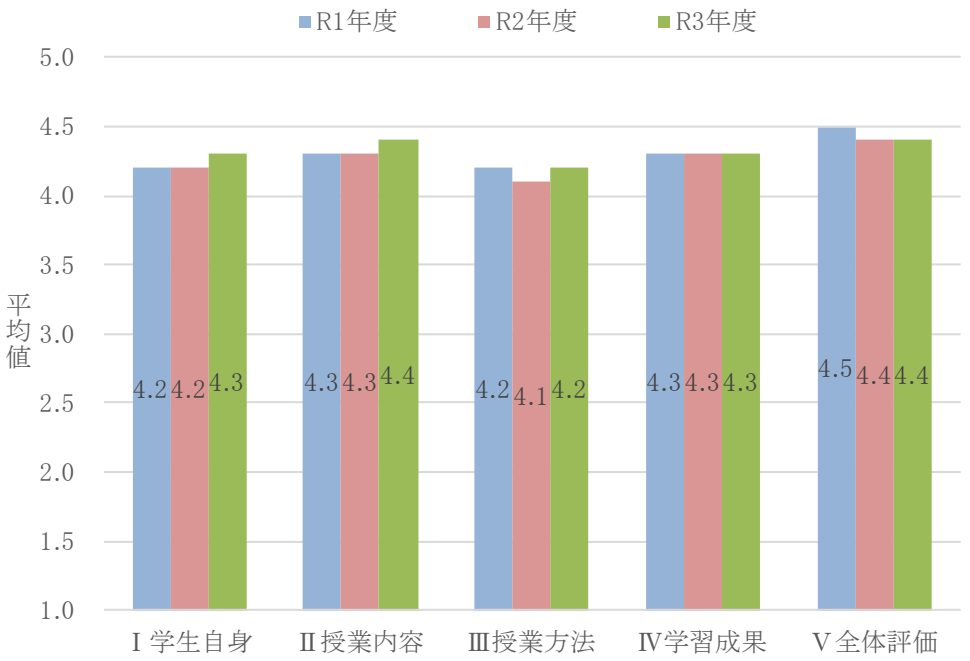


図1　看護学科通信制課程のカテゴリー別平均値年次推移

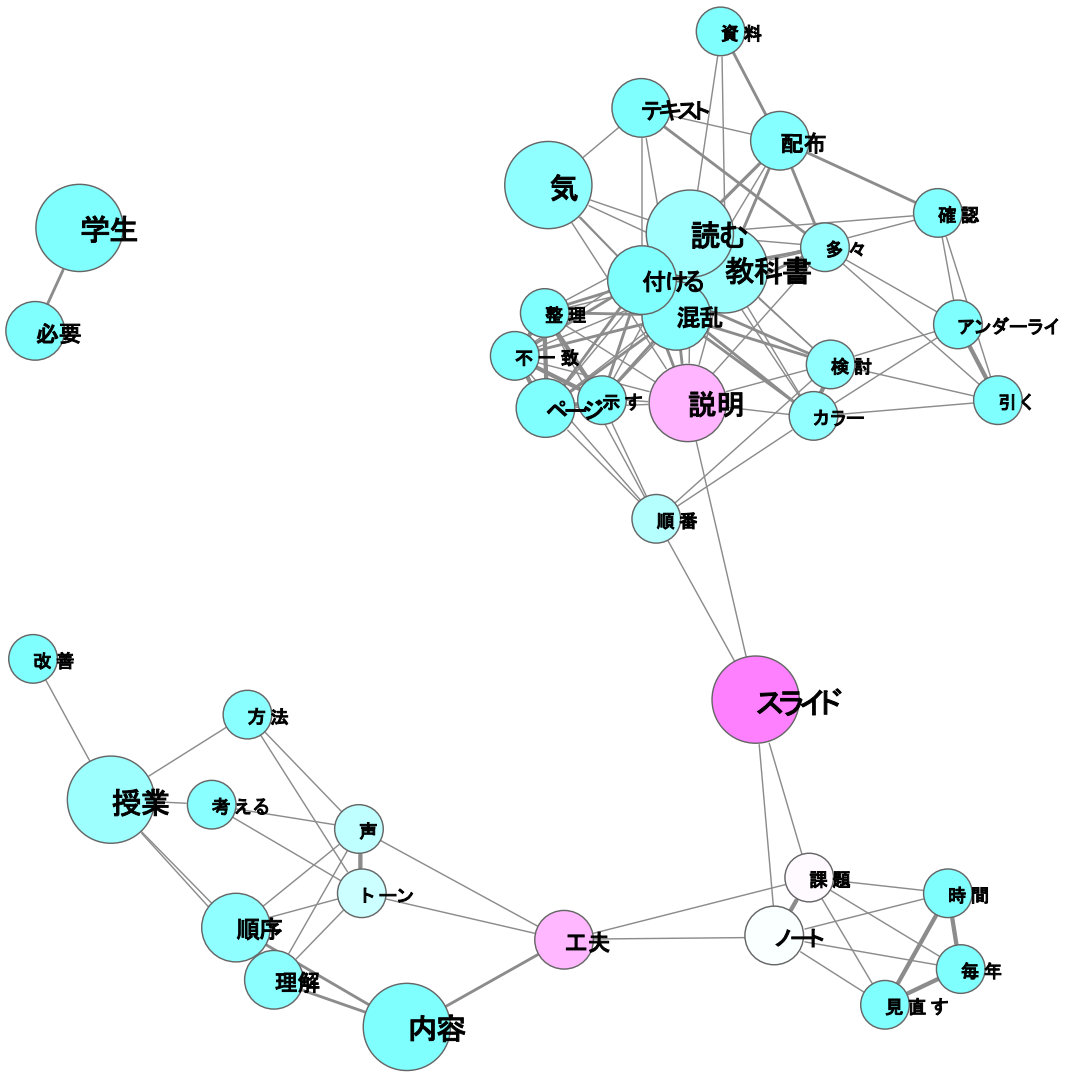


図2　看護学科通信制課程　授業改善データの共起ネットワーク　授業の改善をどのようにしたいのか、またどのように実施したのかを明らかにするため、計量テキスト分析・テキストマイニングを実施し、「自動抽出した語を用いて、恣意的になりうる操作を極力避けつつ、データの様子を探る段階」として、共起ネットワークの作成を行った。

Ⅵ. 短期大学部　看護学科通信制課程

１．　対象

令和３年３月に卒業した卒業生 124 名

２．　回収率

	発送数	回答数	回収率
令和３年度	124	47	37.9%
令和２年度	128	45	35.1%
令和元年度	128	46	35.9%

3. 調査結果

● 回答者の背景

年齢 （人）

30 歳代	8
40 歳代	26
50 歳以上	13
合計	47

就業の状況 （人）

	合計
働いている	46
働いていない	1
合計	47

勤務場所 （人）

	合計
病院	29
診療所または開業医	5
老人保健施設または特別老人ホーム	7
その他	6
合計	47

卒業後の職場　（人）

	合計
勤務先が変わった	10
部署が変わった	2
役職に変化があった	4
委員会の所属が増えた	1
変わっていない	29
合計	46

役職の変化

リスクマネージャーの任命	1
係長	1
主任から課長へ	1
病棟主任、来年度から師長予定	1

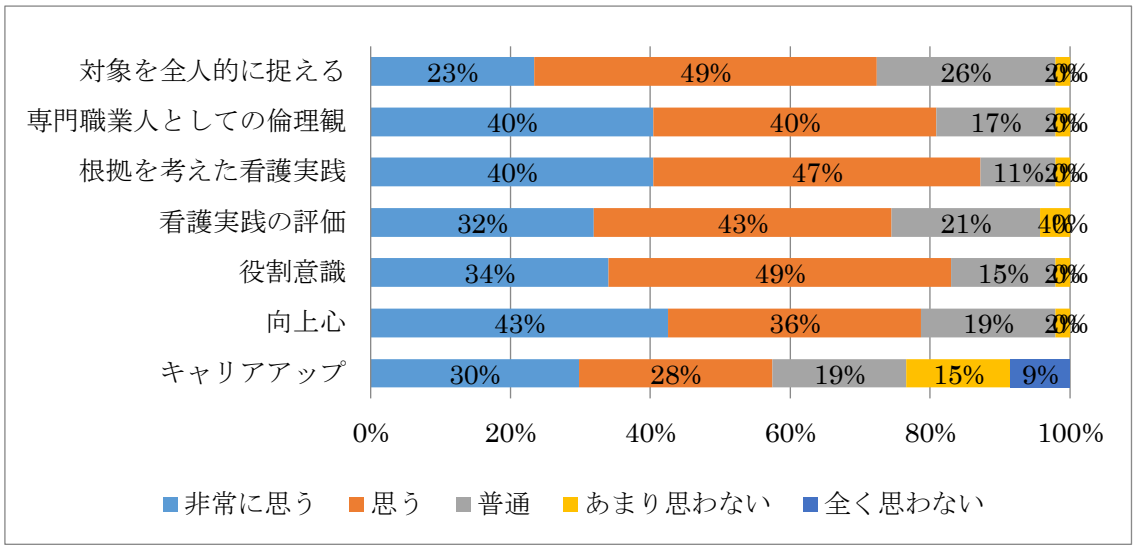
進学の有無　（人）

	合計
進学した	2
進学の意思はあるが、準備中である	3
進学していない	42
合計	47

- ディプロマポリシーに対する評価

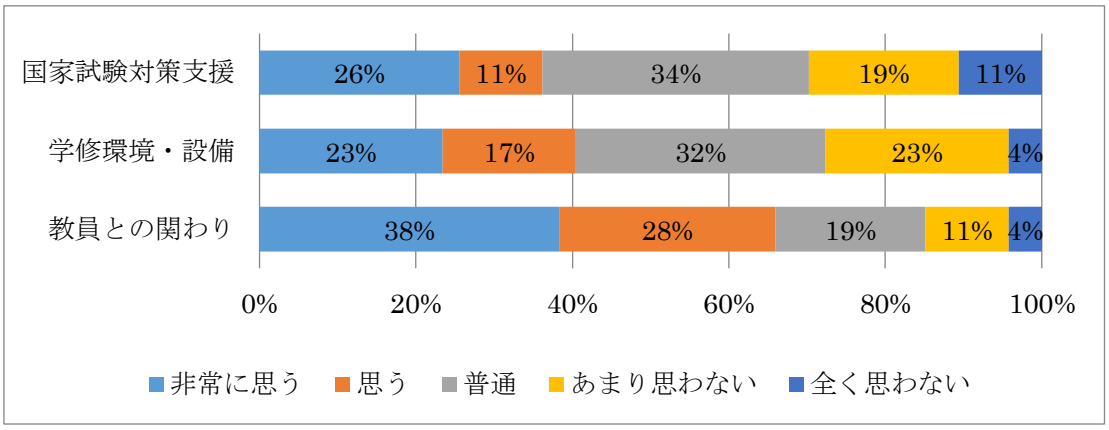
ディプロマポリシーの視点からご自身についてお答えください。

1. 対象を全人的にとらえることができるようになった。
2. 専門職業人としての倫理観を持って行動するようになった。
3. 根拠、エビデンスを考えながら看護の実践が行えるようになった。
4. 看護実践を評価するようになった。
5. 保健医療福祉チームの中で看護専門職の役割を意識するようになった。
6. 向上心を持ち看護の専門性を深めたいと思うようになった。
7. 今後キャリアアップを目指し、進学または専門分野に進みたいと思うようになった。

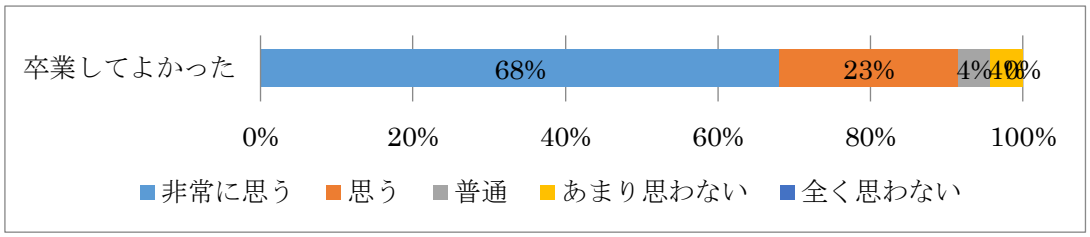


● 本学の各種支援に対する満足度

1. あなたにとって神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程での国家試験に対する支援はいかがでしたか。
2. あなたにとって神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程での学修環境、設備はいかがでしたか。　（教室、図書館、ハローホール、地方会場など）
3. あなたにとって神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程での教職員との関わりはいかがでしたか。（対面授業、レポート添削、学修相談、電話対応などを含む）



● 総合評価　：　学生時代を振り返って総合的にお答えください。



基盤教育分野　学生による授業評価アンケート集計結果

表1　基盤教育分野の実施率・回答率

	アンケート対象科目数（①）	アンケート実施科目数（②）	**科目実施率** ②÷① ×100(%)	②の履修登録者数（③）	③の回答者数（④）	**学生回答率** ④÷③ ×100(%)
基盤教育分野	120	108	**90.0**	7299	4584	**62.8**
総　計	664	587	**88.4**	35029	23756	**67.8**

表2　基盤教育分野の項目別平均値

カテゴリー	問	設　問	平均値
Ⅰ 学生自身	3	この授業への出席状況は？	4.66
	4	この授業に関連して、授業以外に学習した時間。（授業 1 回あたりの平均時間）	3.09
	5	この授業に意欲的に参加した。	4.53
Ⅱ 授業内容	6	授業の到達目標がシラバスや授業でわかりやすく示された。	4.47
	7	毎回の授業内容はよくまとまっていて、よく理解できた。	4.46
	8	授業は知的関心や好奇心を起こす内容であった。	4.44
Ⅲ 授業方法	9	聞きやすい話し方だった。	4.44
	10	板書、スライド、教材などの使い方は、わかりやすく適切だった。	4.41
	11	授業の進行速度は適切だった。	4.47
	12	学生の質問や意見への対応が十分になされていた。	4.41
Ⅳ 学習成果	13	自分にとって新しい考え方・発想を得ることができた。	4.48
	14	授業で扱った分野に対する基本的な知識を得ることができた。	4.52
	15	自分で調べ、考える姿勢が身についた。	4.43
Ⅴ 総合評価	16	この授業を受けて満足している。	4.53
記述式項目	①	この授業でよいと思った点があれば書いてください。	
	②	この授業で改善すべきだと思った点があれば書いてください。	
	③	教室、教育設備等で改善すべき点があれば書いてください。	

問1は所属学科，問2は学年のため表からは省略。

問3以降の選択式項目について，次に示す5件法で回答を求めた。

問3　5:すべて出席，4:1回欠席，3:2回欠席，2:3回欠席，1:4回以上欠席

問4　5:2時間以上，4:1～2時間，3:30分～1時間，2:30分未満，1:0時間

問5～　5:そう思う，4:どちらかと言えばそう思う，3:どちらでもない（ふつう），2:どちらかと言えばそう思わない，1:そう思わない

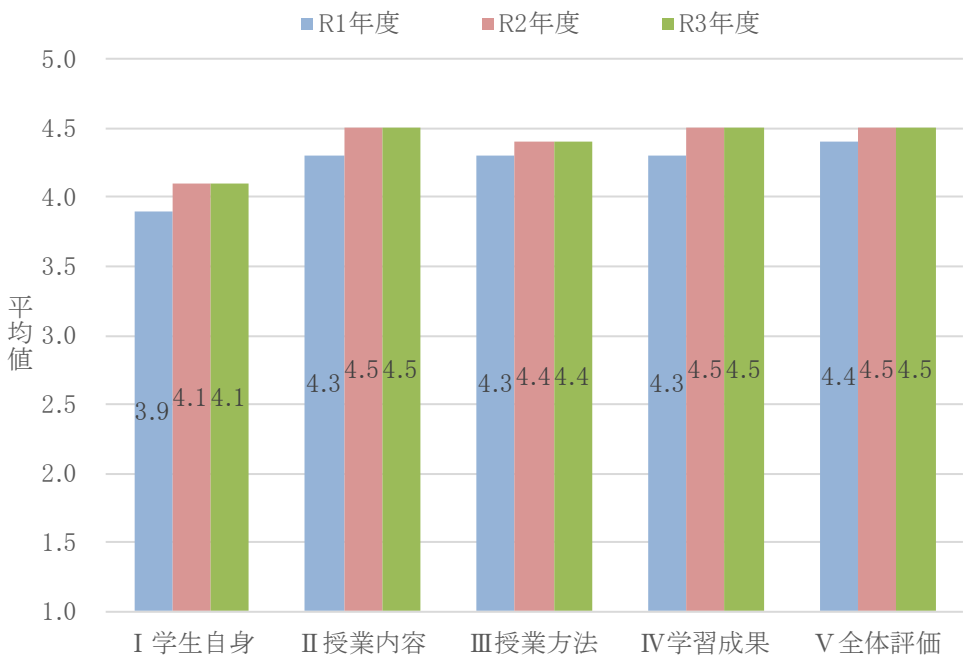


図1　基盤教育分野のカテゴリー別平均値年次推移

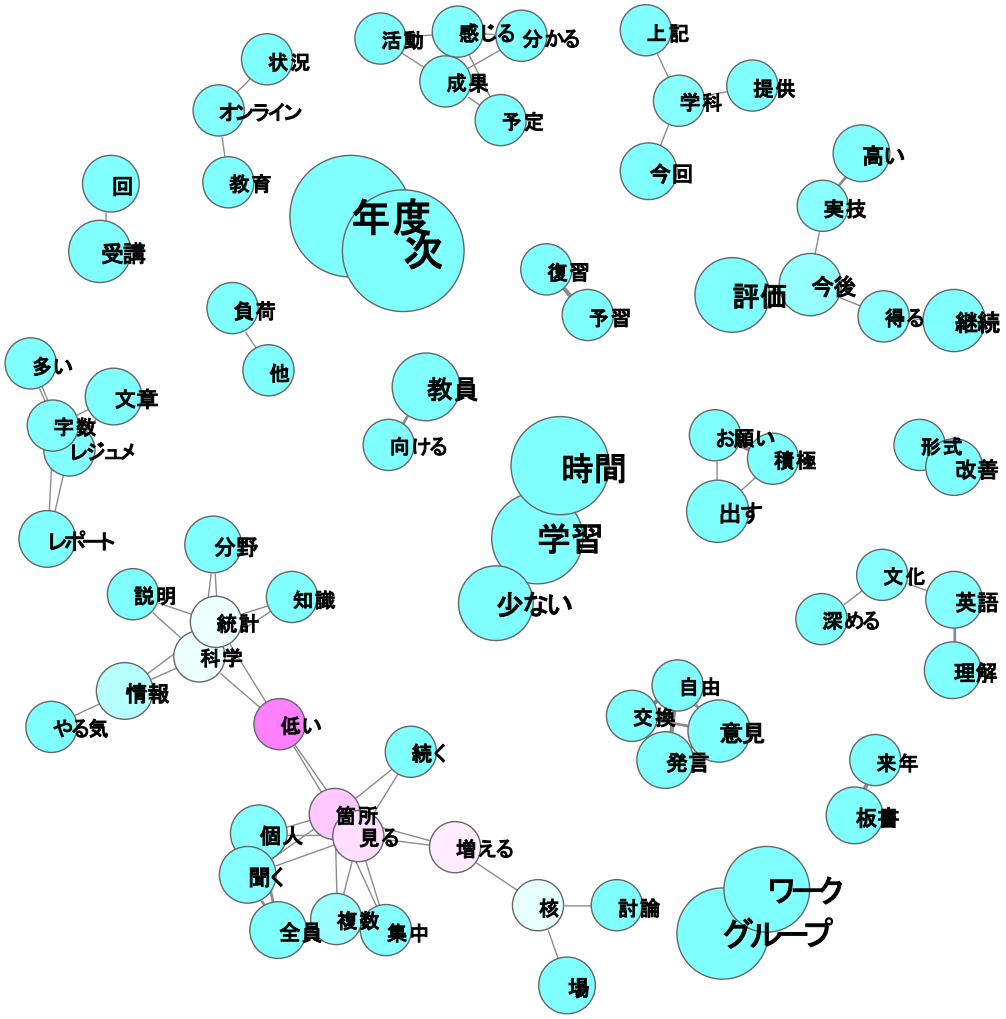


図2　基盤教育分野　授業改善データの共起ネットワーク　授業の改善をどのようにしたいのか、またどのように実施したのかを明らかにするため、計量テキスト分析・テキストマイニングを実施し、「自動抽出した語を用いて、恣意的になりうる操作を極力避けつつ、データの様子を探る段階」として、共起ネットワークの作成を行った。